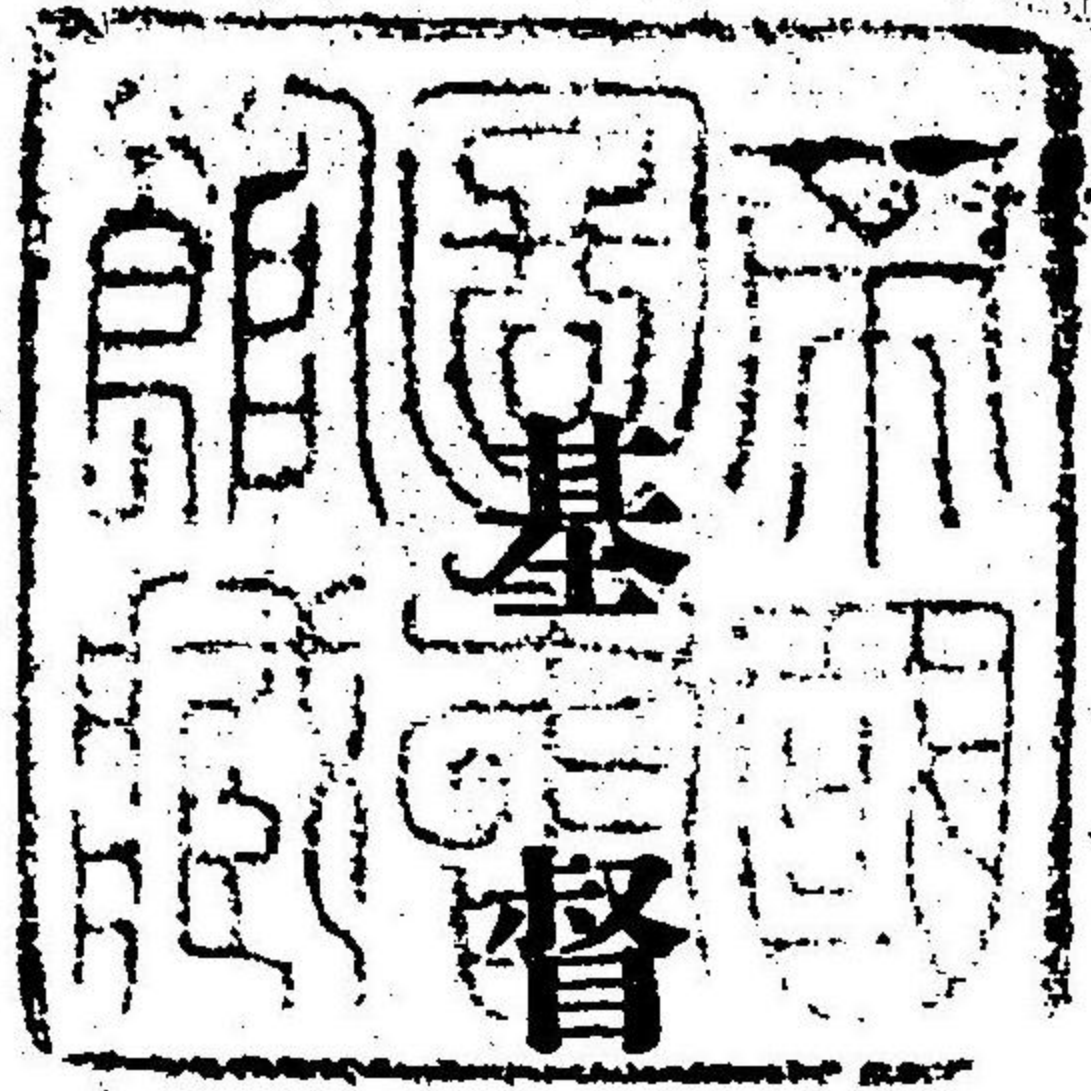


富永德磨著

基督教新解

324-159



教
新
解

全



基督教新解序

今や我が同胞國民の急激なる精神的發展により、基督教はますます一般の注意を引き、味方たると敵たるとに論なく、基督教を知らんとする情甚だ切なり。基督信者たる者は、其の宗教を應分に説明し、かくて一般同胞の心に基督教を訴へ、道を求めつゝある者のために手引となり、同教の信徒の信仰を助長することを務めざるべからず。

余も基督信者として、自らも此の責を負へる一人なるを感じ居りしが、今年
の初夏、神學校を辭して閑を得、數個月東海道興津に退き休みし事あり。其時
稿を起して、逍遙と讀書との間に筆をやり、歸京後之を全うするを得たり。車
薪の火に杯水を注ぐに似たれとも、唯だ已む能はざる心より之を公にせり。

此書は所謂神學書に非ず、其の組織は神學諸科の何れの形式にも據らず、其
の説明は特に何れの教派の教義をも、何れの學派の學說をも主張せず、又神學
上の問題を殘す所なく網羅議論するが如きこともなし。唯だ今日日本基督信徒

の意識に従ひ、基督教宗教の重き所を重く、輕き所を輕く、近き所を近く、遠き所を遠く、全く無關係の所をば全く無關係として説明し、勉めて今日の基督教徒の宗教の體系を忠實に表はさんとしたるのみ。而して其の大體の組織は、小にしては一個人信徒、特に日本現代の基督教徒の經驗に於ける宗教發展の順序、大にしては歴史に於ける宗教發展の順序に従ひて立てたるものなり。蓋し基督教を説明するも此の順序に由り、基督教を受くるも此の順序に由るべきものと信ずればなり。

此書は一般の讀書社會に向つて基督教の大體を説明せんとしたるに外ならず。故に極めて簡略にして又平易ならんことを勉めたり。時としては此の目的のため議論の法式を改めたることもありき。例へば有神論の如きに於ても、之をして此書の全體の組織及び傾向と調和せしむるには、先づ個人人格の實在を論じ、次で内部の經驗より神の存在を證し、其より外界に即して有神論を立て、最後に形而上學的に之を論證するを最も適當なりと思ひしも、之を改めて倒に其の法式を立てたり。されば各局部の問題に付ては、尙十分の説明をなさざるべからず。

若し必要あるを認めば、他日基督教倫理學と共に各部別冊として論明することあるべし。

書中引用したる文書をば著者自ら讀みたるもあれば、又間接に他人の書中より引きたるもあり。之と共に或は知識を仰ぎ或は其の説に従ひ或は其説と暗合しながら、名を擧げて引用せざりし所また甚だ少しとせず。特に現在せる諸大家、及び最近數年間に物故せる其等に對しては、負ふ所頗る多きことを告白せざるを得ず。此等は一々引照を附して明かにせんと欲したりしも、餘りに煩雜なると、大なる要のなきと、何よりも斯がる一小冊子に不似合なるとより、之を中止したり。

此書の一項一節を引き出だせば悉く遼東の豚なり。著者の唯だ心とせし所は、現代の基督教徒の内部に活せる基督教を、外に表はして説明せんことにあり。故に斯く發表したる思想の一部一部は、同じ人情を以て存らへし古今の人々の既に思想せし所と一致すること多けれども、其等は内に在るものを露はして其諸部分が外に在るものと一致するに外ならずして、外に在るものに一致させん

と企て、内に在るものを表はしたるに非ざれば、其等諸部分を合せたる全體は、現代人の基督教の説明にして、若し現代人の基督教に何等か新らしき點あらば、此の説明も亦その幾分を分有し居れるならんと信ず。著者は同教の諸君子が完全此の業を成し遂ぐることを切望し、又其の時の遠からざることを希ふ。命題に付ては頗る困しむ、屢次變改したる後回りて最も平凡にして最も不満足なるものを選べり。

此書の出版に至るまで、友人尾間明氏が常に力を添へられしことを謝し、此に之を表す。

明治四十二年十二月中旬

著者誌

目次

緒論

基督教と其の説明——我國の基督教——西洋より受けたる基督教——自己解釋の基督教——諸教包容の基督教——現代の基督教——基督教説明の必要

第一章 宗教

宗教の定義——宗教の起原——宗教の根據——宗教性——宗教と人生——宗教の體系——宗教體系區別變化の原因——宗教體系の比較——宗教の習合——吾人の宗教體系

第二章 神の一般的觀念

- 一、神といふ觀念(神の定義——人格的靈)……………二七
- 二、神の存在(神の存在の證明——第一、形而上學的の議論——第二、科學的の議論——第三、心理學的の議論)……………二九
- 三、神と宇宙(宇宙の根本たるもの、人格——多神的觀念——超越神論——汎神論——汎神論の變遷——神と世界——神と人の人格)……………八二

第三章 神の知識

- 一、神は知り得べし……………九六
- 二、神の知識の發達(神の知識は普遍的なり—天才の出現—猶太民族—預言者—基督)……………一〇二
- 三、神の顯現の進行(現啓は活動なり—現啓の様式—人格に由れる顯現—耶穌基督に於ける顯現)……………一〇七
- 四、神の知識と聖書(神の顯現の書存—顯現の表號としての聖書—インスピレーション—聖書の價值)……………一二八

第四章 歴史上の耶穌

- 一、神の知識進歩の絶頂と神の顯現の進行の絶頂としての耶穌……………一二七
- 二、基督の歴史的人格(不思議に大なりし一代—歴史の事實たりし人格—神話説)……………一三八
- 三、基督一代記の材料(聖書—聖書に關する批評—マタロの四書翰—同觀福音書—約翰傳)……………一四七

- 四、耶穌の國と時代(猶太民族—其の歴史—基督の時代)……………一五七
- 五、耶穌の「代」(施洗者ヨハネ—耶穌の受洗—耶穌の衆生と經歷—耶穌の活動—其一、教訓—其二、實行—其三、弟子等の教育—其四、宗教の實現—最後—十字架—葬)……………一六九
- 六、耶穌傳首尾の記事(復活及昇天—奇蹟的誕生—誘惑—復活に關する諸說明—復活否定の困難—復活を信ずる信仰の宗教に於ける地位—其他の奇蹟)……………一八〇

第五章 基督の宗教

- 一、耶穌に由りて知られたる神(神は天父なり—神の天父たるを信じ得る理由—第一、宇宙に由り之を知りて信ず—反對論—客惡の問題—神は人の意識に於て父なり—第二、耶穌基督に由りて神の天父なるを知る—耶穌は愛子の妻なり—父たる徳基督に顯はる—新譯)……………一九六
- 二、神人の關係(人は天地間の子なり—神人の關係—人の神に對する道—神人關係の理想—實際の人—神の應報—神人關係の回復)……………二三八

三、天國(天國又神の國の性質—基督は天國の建設者又王子—天國の生活は永生なり—靈魂不滅—神を信ぜざる者の未來—復活の意義)……………二七五

第六章 基督信徒の基督教……………三〇一

基督教の宗教と基督教……………三〇一

一、救主基督(基督信徒の意識に於ける基督は救主—何に由て人を救ふか

—救の二要素—其一贖罪—贖罪說の發展—刑罰說—道德的刑罰說—其二和合—感化說—愛の代贖說—兩要素の必要—十字架の地位—聖書の救拯觀—耶穌基督の救拯觀—マテロ—ヨハネ)……………三〇八

二、神の子基督(基督の神子たる意識—マテロの信仰—ヨハネ文書記者の

信仰—其後の信徒の信仰—此の信仰の根據—今日の信仰に於ける基督—其一基督は純然たる人なり—其二基督は眞の理想の人—其三基督は神の中の人の世界に實現せられし者—神性と人性の關係—基督は圓滿なる人格—神の子の實現)……………三三五

三、聖靈(聖靈に付ての信仰の起原—聖靈とは何ぞや—聖靈の人格—此の信

仰の由來—吾人の經驗—聖靈信仰の大切なる事)……………三五八

四、三位一體(三位一體の意義—初代の信徒は三位を信ぜり—三位一體の信仰は必然—之に關する説明—三位一體の信仰の地位)……………三六五

五、教會(教會の意義—教會は必然にして必要—基督自身と教會—基督後の發達—マテロの教會觀—ヨハネ文書の教會觀—教會の政治羅馬教會—基督の全教會—特殊の教會—儀式—洗禮—聖晩餐)……………三七四

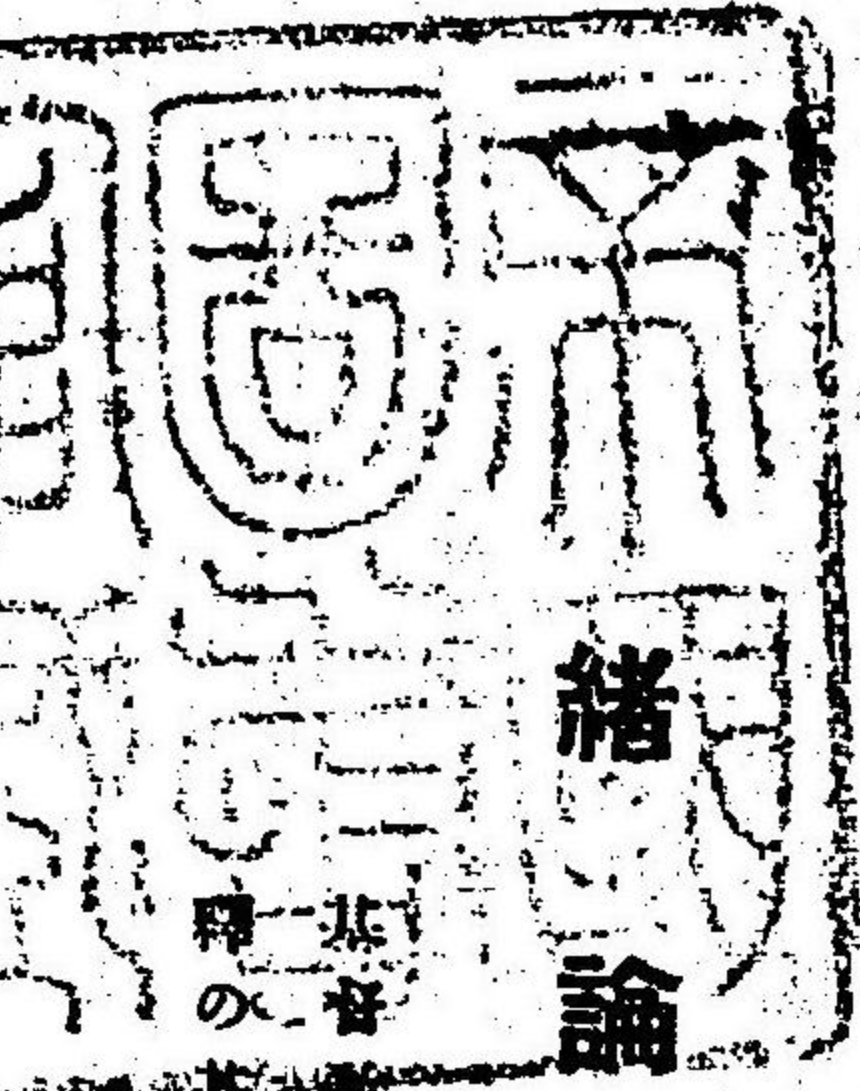
結

論……………三八八

吾人は基督信者なり—吾人は基督に由て神を知るを得たり—基督は神に付て救へたり—基督は其の人格に於て神を現はせり—基督は神人關係の理想を實現せり—基督は吾人を感化して神に歸せしめたり

基督教新解

富永徳磨 著



基督教と其の説明——我國の基督教——西洋より受けたる基督教——自己解釋の基督教——諸教包容の基督教——現代の基督教——基督明教説の必要

基督教とは耶穌基督に由て起れる宗教を云ひ、宗教とは神との關係を正しき生活と云ふ。宗教すてに生活なるが故に、其の存する所には必ず之を表はすの記號發生す。教義説明も宗教の活きて存在する所には必ず湧き出づべき記號の一なり。何となれば人その裏に宗教を有す。之れが燃えて在らん限りは、之を外に形はさずして已むものに非ざればなり。若し教義説明の全く現はれざる所あらば其所に宗教存せりといふも頗る疑ふべく、よし存在するも、萎微極

めて振はず、氣息奄々たるや論なきなり。輒近西洋の思想界は、思辨に疲れし餘り、經驗實用を重んずるに偏し、宗教界また此の風潮に染み、神學より思辨的要素を排せんとして、之がために教義説明を立つることを厭ひ、専ら聖書研究及び實際生活の研究のみ盛んならんとする傾向あり。此れ固より當然の事なり。煩雜なる思辨を専らとし、論理の上に論理を築きたる在來の神學は、もはや今日の實生活と懸隔せり。在來の神學は、今日の生ける基督教を説明せるものに非ざるなり。然れども之と共に宗教實に生きて存在する以上は、又之を時代の思想に由りて、説明し、かくて自ら満足し、又他人の心に訴へずしては已む能はず。教義を排斥せるリッチェル派の人にも又一種の教義を立てざるを得ざりしなり。されば教義を厭ふと言ふも、教義そのものを厭ふにはあらず、在來の煩雜なる思辨論理に由て成れる教義を厭ふに外ならざるなり。教義は宗教に於て必然に存するもの、又之に必要とせらるるものなり。

我國プロテスタント基督教を傳へられてより既に滿五十年に及べりと云へり、之を我が建國以來の歴史に比しても、又之を基督教會の歴史に比しても、未だ長き時日を経過したりとは謂ふべからず。然れども五十年といへば所謂一世紀の半にして、又實に古來人の一生として數へられたる年月なり。半世紀の間、又人の一生の間基督教を受けて、之が我が國民間の宗教となり居らぬ理はなし。余輩は我國民にも基督教がもはや土着したることを疑はず。日本の精神界にも基督教が一國をなせることを信するなり。

我國に現存する基督教は如何なるものなるべきか。思ふに第一は西洋の教會に襲奪せられたる基督教なり。日本の基督教は西洋の基督教會より派遣せられたる宣教師に由て傳へられたるものなるが故に、其の基督教は此種のものたるを免るゝ能はざりき。此の種の宗教は形式に流れ易し。西洋にては基督教は由來古しと雖も國民の精神に活きて存せり。諸の制度、信條、儀式、其他の習慣は、唯だ此の活ける宗教を外に現はしたるものに過ぎず。然れども日本人は西洋人に非ず。且つ彼等の有する歴史なし。然るに宣教師は西洋の基督教の記號に由て基督教を日本に傳へ、日本人は之を其のまゝに受けたり。故に此の種の基督教は漸く信仰及び行爲の断片の集合のみとなり、根底に生命の躍如たるも

のなし。且つ其の箇條的にして総合的ならず、形式的にして精神的ならぬため、自己の内には基督教品格の生きたるものなく、外に向つては徒らに衝突排他を事とせり。されど斯かる基督教も他より宗教を受けたる初代に於ては自然に起るべきことにして、又大いに必要なり。何となれば基督教は次第に發展せる宗教なり。基督より直接に吾人に飛び来るものに非ず。基督教は二千年の歴史の上を流れ來れる生命なり。二千年間諸民諸族の經驗となり、之を総合したる宗教なり。若し吾人が全く歴史を無視し、吾人今日の東洋の心を以て縱まゝに基督教を解せば、此は自己流の基督教を得るに止まらんのみ。吾人は世界に發展せる基督教の全生命を受けざるべからず。日本の基督教は歴史より受けたる基督教なり。

然れども第二に自己より發せる基督教あり。日本人は教會の權威を知らず。僧侶の權威を知らず。自らの理性を標準として基督教を解釋し、其の信すべき所を信ぜり。傳へらるゝまゝに信ずることは、多くの日本人には出來難きことなり。西洋にも唯理派あれど、尙傳來の信仰が本となりて、之より脱化せしに

過ぎず。日本人の信仰は、無信仰の立場より基督教を見、之を批評し、終に之を取りしなり。此の基督教は偏すれば自己流となり、先賢の經驗に同情せず、自らの小我を標準とせる故に頗る淺薄となる。自己のみの經驗に閉ぢ籠り、世界的の基督教經驗を受容せざるものは、實に基督信徒といふべからざるものなり。然れども斯かる自發的の宗教なくば、基督教は終に西洋人の信仰の雷同として終らん。

第三は基督教以外の思想を包容せる基督教なり。西洋にても、生ける基督教は時代の思想を包容せざること能はず。されど西洋にては基督教信仰既に主にして先入せり。他は客にして後入するものなり。故に基督教を中心として他の思想を攝取するなり。日本人は同時に基督教と他の思想とに接し、同時に之を受く。否多くの場合に於て基督教が客なり後入なり。勢ひ他の思想と共に基督教を受け、而して後に基督教を中心とし、他の思想を其の周圍に列ね、一の思想の體系を作らざるを得ざるなり。

斯く我國には種々なる基督教あり。前代までは以上諸種の基督教は、各々中

心を異にしたる思想として散在したり。彼等は互ひに衝突し分争したり。然れども現代人は平等に是等に接し、此等の凡てが在る所にて成長したり。現代人は是等に養はれて、凡てを攝收したり。分裂の時代は去つて合同の時代は來れり。現代人は凡てを攝收し統一して、從來よりは別に一の新しき宗教意識を生じたり。從來の基督教の内容には、現代人の意識に於て重きものと輕きものと生じ、近きものと遠きものと生じたり。此の輕重遠近の意識に従つて、宗教内容を按配組織し、新たに一の思想の體系を立てたるが現代の基督教信仰なり。現代基督教信徒には既に信仰の體系立てり。内に體系立ては人性の自然として之を外に表はすは必ずべし。豈説明なくして已まんや。然かのみならず、之を説明するは頗る必要なり。今日は多くの思想あり。思想の生存競争あり。基督教も戦はずんば思想として亡び了るべし。人に理解せしめ、人をして之が眞理に服従せしむるには、必ず之を説明せざるべからず。勿論宗教は説明に超越す。されど説明の及ぶ範圍内をば説明せざるべからず。之を説明すれば、其の以上は自づからにして人納得し體得す。説明なき傳道ほど力なきはなく、説明

を聴かずして信仰せしほど危険なるはなし、現代基督教徒は自己等の基督教を説明するの責任を有す。

此書は此の現代の基督教を幾分にも説明せんと試みたるものなり。

第一章 宗教

宗教の定義——宗教の起原——宗教の根據——宗教性——宗教と人生
 ——宗教の體系——宗教體系區別變化の原因——宗教體系の比較——
 宗教の習合——吾人の宗教體系

宗教とは人間以上の存在との關係を正しうせんとする人間生活なり。宗教の定義は一言にして下し難しとせらるゝ所、然れども何れの宗教も人間以上の存在者を知り、自己と之と關係せることを認め、之を正しうせんとする生活なることに於ては共通せり。

宗教は人類普遍の事實なり。古今となく、東西となく、文野となく、人は必ず何等かの宗教を有す。文化開けたる人民に在りては、思想美麗、論理明晰なる信條告白教義文學に由り、秩序整然、規模宏大なる教會政治に由り、嚴肅莊重なる禮拜儀式に由り、將た壯嚴なる建築、華麗なる服裝等に由りて、其の内部に有する所の宗教を發表せり。宗教は彼等の生活に重大なる地位を占めたるを示す。未開なる蠻人と雖も亦宗教あり。衣を織るを知らず、家を建つるを知

らざる人民も、何等か其の拜するものを有せり。時として全く宗教なき人種あるが如く報ずる者ありと雖も、是れ異境を疾過せる旅客の淺薄なる觀察の致す所にして、仔細に研究するときに、其等の人種また宗教を有するを發見すと云ふ。宗教は人類普遍の事實にして、宗教性は人類共通の天性なり。

宗教の起原如何。此に付ては學者の意見紛々として定まれる説を見ず。或は初より神の啓示ありて起れりと言ひしもあり。或は木石等の物質其物を恐れて之を拜し、次て其等物質の背後に活靈の存することを信ずるに至りたる庶物教、活物教に生まれりと言ひしもあり。マクスミュンルは、人類最初より有限の感と共に無限の感を有し、之が次第に覺醒して宗教の進歩を見たりと言ひ、オイゲン、フオン、シユミットは宗教は人類が世界を支配する力を感じたるより起れりと言ひ、ハートマンは原始人類が其の幼稚なる詩的自然觀より、之に應ずる宗教的對象生し、次第に神とせられしなりと言ひ、スペンサーは原人夢に故人を見、死者尙存すと思惟せしより靈魂を信じ、次第に神を信ずるに至りしなりと言へり。

宗教の起原は如何にありしにせよ、現在の吾人に於ては、宗教は精神の必然にして又最高なる活動なり。何を以て精神必然の活動といふか。吾人の精神は活動して必ず實在の根本の觀念に到達せざれば已まず。人は先づ五官に由て周圍の事物を感覺す。然れども唯だ箇々別々の事物を感覺するのみならず、人は此等の箇々別の事物が相集り相關係せることを思想し、更に進んで此等の事物の全體は、又其の根本たるものあつて之に依り存在せりと思想す。箇々の事物に付ての感覺は、事物の一般の思想に進み、終に實在の根本の觀念に達す。此れ人の精神の必然の活動なり。例へば吾人自らの一生に付て考ふる時の如きも、精神は同じ活動をなす。人は思想すらく、我が生れしは自ら求めて生れしに非ず、我が死するは自ら死なんと欲して死するに非ず。我れ生を求めざれど何時の間にか此世に生れ出て居たり。我れ死を好まざれど時來らば如何にしても死なざるを得ず。人間此世の存在の兩端たる生と死と既に斯くの如く、其他生涯の遭遇、自ら求めず又自ら好まざるにも拘はらず、吾の身上に落ち來り、吾の一身を靡らし行き、吾をして之を避脱し之を防遏し之に抵抗し之を推轉するに

殆ど其の術なきを覺えしむ。然れば人は其の生れ其の死するよりして自らに由て生れ又は死するに非ず。實に自己以外の他のものに由て然るものなることを思はざるを得ず。單に自己一人のみならず、我等の周圍の人も物も事も時代も否全世界も影の如く移り粗糠の如くに篩ひ去らる。其等の事物は自らに由て存するものに非ず。他のものも在て始めて存し、凡て此等の根本たるものも在て始めて存するを認むと。斯くの如くして彼は實在の根本に想到したるなり。斯くの如く想到するとき、自己は必ず己れの依存せる此の根本との關係を整へんと勉むることなくして已む能はず。宗教は神との關係を整ふるものなるが、神は實在の根本たるものなり。此を以て人は其の精神の活動の必然として宗教を有するなり。思ふに人類原始の時代より宗教の存せしは、人々のづからにして自然現象の根本たるものあるを感じ、意識せずして之を探り求めたるより起りしものならん。

又何故に宗教を以て人類精神最高の活動といふか。人が五官にて事物を感覺するは、他の動物と共通せることなり。又自然の要求欲望によりて行動するも

動物と共通せることなり。人が最も進化したるもの、萬物に冠たる所以は、意識が発達して精神又は靈といふものとなり、精神的活動をなすにあり。人は事物を感覺するのみならず、又之を認知し、更に之に付て思想す。故に宇宙の事物を察して、其より物の法則を知り、又理といふものを辨ふ。理といふものは勿論、法則といふものさへ、もはや彼が感覺に入るものには非ず。されど其の感覺する所を蹈み臺として、彼は其以上に斯かるものを思想し得るなり。されば學問も人類にして獨りなし得るものにして、之も人類精神の高き活動なり。されど全く物質を超越し、全く思想の活動に由て達せしもの即實在根本の信仰は精神最高の活動也。之と共に彼は動物が自然の力に動かされて行動すると異り自己の内部より自らの立てたる目的を達するの力あり。之が発動せし時道德となる。されど道德は他人と關係せる人の生活なるが、人は自己の意志を用ひて實在の根本たるものと合一せんとす。これまた人類精神最高の活動ならずや。宗教は實在の根本たる神を信じ、之と合一せんとする生活なれば、此れ人類精神の最高の知的活動と意的活動とが合したる生活なり。されば人類原始時代より宗教の存したるは、人類精神が最高なる活動をなす方に向つて無意識に煩悶突進したるが故なりと見ることを得るなり。人類初より無限を思ひ神を思ひたるや否は定かならざれども、無限を思ひ、神を思ひ、宗教を生ずるに至るの素質をば初より具有し、此の素質は常に自己を十分に發現せんとして煩悶せしこと明なり。

以上述べたるが如く宗教は人類精神の必然の活動、又其の最高の活動として、吾人人類の方より起せるものたると共に、少くも今日の吾人に於ては、宗教は實在の根本たる神の方よりの顯現に由て起れり。顯現といへばとて、神が十誠を石板の面に彫みて示せしといひ、若くは電光の如く宗教的真理を人に閃めき示せしと云ふ意には非ず。神宇宙に充在し、自ら活動して人の精神を動かし、人をして神の充在せることを意識せしめ、又その内性を知らしむることを云ふなり。今日の吾人の宗教は吾人自らの此の經驗と、又最も多く神に接し神に動かされたるものが、吾人に宗教的真理を示せるより存せり。故に今日の吾人には宗教は神の顯現に由て存せりと言ふなり。

此を以て宗教は人類に宗教性を造り居れり。意識自然の要求として現はれ、又其の最高の活動として現はれ、又神の活動顯現に由て現はれたる宗教は、人類に於て實際の生活に實現せられては、早くより其の精神に習性を作りたり。人は常に宗教を實現するが故に、自らの知も情も意も、宗教を實現せんとするに傾きたり。此の傾向は子孫に暗示となり又模倣せられ又遺傳せられ、宗教性は人の精神遙に深く根を下して、人類の破るべからざる天性となりしなり。故に人は鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く、其の天性に由て神を求めて已まざるなり。されば宗教は人生と關係全く密接なり。人は一つには自己を完成する所以として宗教を有し、二つには實在との關係を正しうする所以として宗教を取らざるべからず。宗教を有するは自己を完成する所以なりと云ふは、宗教が人類精神の最高活動なればなり。人は自然界に付ては學問して其の關係を知り、之を正しうせざるべからず。人類同志に付ては道德を有し、之が關係を正しうせざるべからず。實在の根本たる神に付ては、宗教を發揮し之が關係を正しうせざるべからず。若し學問あり、道德ありて、而して宗教なければ、彼の靈性は其の

本來有する所の可能性を中途まで活動せしめ、可能性中途まで伸びたるまゝにて折れたるものなり。彼は人として人たる所以を全うせずして已めるなり。人は其の五官にて感覺する所の物象を超越して實在の根本の存在を認め、有限界の外に無限界の展ひたるを認め、諸善の上に至善を認む。之を認めて、之を慕ひ、之に向つて翻け上らんとするが其の精神的存在者たる特性なり。人は進化の末に現はれたり。彼の身軀は自然界より來れり。彼の背後は動物なり。されど彼は自然界の絶頂に立てり。彼は身軀と共に靈の存在者となれり。彼の前には無限界あり。神あり。彼は後に尾を動物より捉へられつゝ、前に神を望み、其の靈性を以て神に翻け行かんとす。彼は自然界の階段の頂に立ちて、今や半は無限界に踏み入り居れるなり。人の尊きは此に在り。されば此の無限界と連れる生活たる宗教を有するは、彼をして人の特性を發揮せしめ、やがて一層發達して、全く自然界より離れ、靈界にのみ生くるに至らしむる所以に非ずや。宗教ある人と宗教なき人との差は此所より起る。無宗教の人にして、徳高くすぐれたること宗教者の企て及ばざるものなきに非ず。されど彼の有する世界は

有限なる物質の世界のみ。彼の有する経験は、感覺に屬するもののみ。故に其の精神は向上の頂低く、活動の範圍狭く、其の道徳も單に人類社會の習慣を集めて組織したるものに過ぎず。其の人格は如何にしても、垢抜けのせぬ心地す。宗教者中には勿論下劣なる品性の者も少からざれど、普通の者より以上ならば、不完全ながら尙完全を理想し、物質の以上に大精神を知り、有限の外に無限を思ひ、精神の活動の高さも廣さも、限定なきが故に、必ず一種脱離したる所あるべきなり。然り人は宗教に由て、精神無限に進み、自己を全うする者なり。又實在の根本との關係を正うする所以なるが故に宗教を有せざるべからずと云ふは、此れ人の最先急務なればなり。人は多くの方面に關係を有す。されど宗教は實在の根本と自我の本體との關係なり。人や、もすれば輕重大小の別を誤り、急かぬことを先にすることあり。基督の譬喩に、或る富める人、其の田畑よく實のりければ、自ら思ひ言ひけるは、我が作物を藏むる所なきを如何せん。我かくなさん。我倉を毀ち更に大なるを建て、凡て我が作物と貨物を其所に藏むべし。斯くて靈魂に向ひ、靈魂よ、多年を過す程の多くの貨物を有す

れば、安心して食ひ飲み樂しめよと言はんとす。然るに神之に言ひけるは、愚なる者よ。今宵汝の靈魂取らるゝことあるべし。さらば汝の備へし物は誰か有となるやと云へるが有り。此の人の如きは、自らにては天晴れ人生の要務を成しをほせたりと思ひしならんが、神の眼を以て見れば、彼は何をもなし居らず彼のなせる所は肉體と世界の貨物とを善く結び着けたりといふのみ。世界の貨物も失する時あるべし。之は或は保つとしても肉體は死なざるべからず。貨物と肉體と共に物質にして、共に暫くにして消ゆるものならば、彼は自ら何をなしたるか。肉體を超越して存する靈魂の始末は如何にせし。神と其の關係とは如何に結び置きし。此の方に何もなきなり。實に愚者ならずや。基督は神に就て富まさるものは斯くの如きものなりと言へり。世には此の種の人多きなり。或は其れほど甚しからずとも、尙ほ移り變る物との關係をは攷々として整へ置けど、自己と永久不變なる關係を整ふることをは忘るゝなり。名譽は消えん。財産は失せん。權力は死後に用なし。然も之等を得んことには汲々たる人多く、而して何時も何時までも面々相接せざるべからざる神との關係、凡ての物の根

本たる神との關係を整ふる人の少きこそ不思議なれ。故に多くの人は萬一の場合となりて或は狼狽し、或は絶望自棄するに至る。佛蘭西の文豪ヴォルテヤ會て一貴女の死に臨んで惑へる者に答へて曰く、死の事を少しも思ふ勿れ、此は生活を苦くするのみにて用なき事なり。死は唯だ無なりと。貴女は果して死の無なるを信ずるを得て死にしや否や傳はらず。されど死がヴォルテヤ自身の番に回り來りしときは如何。其の醫士は記して曰く、義人の死を晴天とすれば、彼の死は天地晦冥雷雨篠を突く死なりき。彼は言て曰く、友よ君は唯一の我が善き助言者なりき。されど此の以上君は我を助くる能はず。乞ふ癡狂を治する醫師を招け、我を憐め、我は狂せりと。彼は實に狂して死にたり。此れ極端の例なれども、唯だ移り變るものとの關係を正うして、己が本源たる神との關係を整へざる者は、此の類の悲惨に陥るを常とす。此に至れば孔子の如きは、天といふ信仰ありしだけに泰然たるものありき。桓魋孔子を殺さんとて孔子樹下にて教へし時樹を切り抜きしかば、天徳を手に生ず桓魋を我を如何せんといひ、匡人孔子を圍みし時には、天の未だ斯文を喪はざるや匡人夫我を如何せん

と言ひたり。ソクラテスも毒盃を與へらたて少しも惡びれず、我に取りては死ぬるは生くるより幸ひなりと言へり。基督の使徒パウロに至ては、羅馬の獄に在て處刑の切迫せしを感ぜし時、我が世を去る時は近づけり。我は戦ふべきの戦をなし、走るべき趨場を走れり。我れ信仰を保ちて今に至れり。義の冠は我ためにささげらる。と言へり。確に晦冥なる雷雨の天と冴えわたる秋の空の如き差を見るといふべし。實在の根本との關係を正しうするは、人生の最要事にして、宗教の必要なる所以なり。

宗教は人類に普遍なるものなるが、隨所に意識せられて思想の體系を成せり。之を普通世に何々教と呼ぶ各種の宗教とす。此の宗教體系が或る民族の間に自然に成り立ちしものを民族的宗教とし、或人格に由て意識せられ、思想の體系に組織せられしものを開基的宗教となす。我國の神道の如きは、日本民族の間に存在せし自然宗教を、誰れ意識するとなく一般に意識し、誰れ組織するとなく一般に思想の體系に組織したるものなり。印度にもかゝる宗教體系ありき。希臘にもありき。其他古も今も各民族は大抵かゝる宗教體系を有したり。開基

宗教は大なる人格が此の民族間に在る宗教体系と、他民族の有するものと、更に自己の發見せるものとを総合し、自ら新一体系を作りたるものたり。佛教も之なりき。マホメット教も之なりき。基督教も其の一なり。

されば宗教体系に種々の區別あり變化あるは、其の起りし國土天然の狀態、民族の氣質、生活、歴史等のために影響せらるゝためにして、開基宗教に於ては、之に加ふるに開祖の人格の影響著しきものあるに由る。國土の狀態が希臘や印度や日本などのやうに風景美麗に、産物豊饒ならば、此の中に生れし人民の宗教の諸觀念は、また穏和にして温かきものたり。猶太の如き亞刺比亞の如き、天然の恩恵豊ならず、人に向つて峻烈ならば、其の宗教の諸觀念は又之に相應したるものならざるを得ず。又民族の氣質が理性に強きときは、之に應じたる宗教出て、感情強き時は又之に應じたるもの出て、意志強きときは又之に應じたるもの出づべし。歴史の發展も宗教の形を作る上に影響し、社會の道徳觀念も又然るべく、特に人格に由り起りたる宗教に於ては、其人が自己の意識に從つて思想の体系を立つるものなれば、其の人格の性格が、大いなる影響を

なせるは言ふを待たざるなり。

此等種々の宗教の体系は、何れも多少の宗教的真理を含み居れること論ずるを要せず。如何に完美せる宗教と雖も、他に全然有せざる真理のみを以て成り立てりとは思ふべからず。或る宗教体系が凡ての點に於て全く他と異れりとせば、其は必ず誤謬か虚偽なり。何となれば人類の精神は同族なり。宗教は普遍なり。斯くの如きこと有り得べからざればなり。

唯だ宗教の諸体系は比較せられざるべからず。比較して完全と思はるゝ者に最も近きものを取りて、吾人の宗教の標準として、之に由て神との關係を整へざるべからず。而して此の比較の照準たるものは他なし。宗教の本質たり其の目的たる點、即ち神との關係を正しうする點に於て、或る宗教体系は幾何の具ふる所ありや。又幾何の實力ありやを見るこれなり。之を見て甲と乙との体系を比較せば、吾人の取るべきものは自づからにして分明せん。固より甲と乙との体系に於て、殆ど凡ての重大なる内容は共通するなるべし。然れども假令内容が相同しければとて、其等の宗教体系が甲乙同じ價值なりとはすべからず。

各宗教体系は、各々其の内容の重きを置く所を異にせり。甲の方には重くして中心となれる内容が、乙の方へは甚だ軽く隅の方に隠れ居れるあり。大宗教の開祖は此の隠れ居れる内容を表に引き出だし、之を中心とし、之を統一原理として新宗教を立てたる者に外ならず。されば諸宗教の比較は、此の内容の重きを置かれて中心となれる者を見、其が宗教即ち神人の関係を整ふる上に何程の価値ありや、力ありやを計り、之を以て宗教体系の優劣を定めざるべからざるなり。

此の照準を以て宗教体系を見、宗教の本質具はり、其の目的を達せしむる力あらば、たとひ他の點に於て幾分の缺點あり、幾分の不純の分子あるも其は問ふを要せざるなり。儀式の如き、制度の如き、信條の如き、其の末までも一々合理的ならざるべからざる要なし。大主眼を完備し、之を形はさんために出て來れる形式ならば、多少の不完全は恕するも可なるべく、又其等形式は時代と國土等に由て改變し行くべきなり。迷信的分子の如きも、宗教の本質を誤り、人生を害するものならざる限り、宗教体系の中に多少混入すとも亦深く咎むる

を要せず。人は如何なる人にてても、如何なる世にてても、絶對的に迷信より自由なるを得るものに非ず。迷信の多寡は知力發達の程度に由て異れり。知あるものは無知者に比して迷信少しと雖も、無知者をまて強て知者と同一の思想に達せしむるの要はなし。又其は出來べきことに非ざるなり。

吾人の有する所の宗教の体系は基督教なり。吾人は人格耶穌基督に由て、最も善く神に付ての知識を得たり。又彼の人格自身に於て、神の徳性の充在せるを見たり。従つて基督に由て神と吾人との關係を知るを得たり。又この關係の理想が基督に於て實現せらるゝを見たり。然かのみならず、基督の人格に於て吾人をして神との眞關係に入り、神と全く新しき關係となるの力の充満し、吾人の精神に溢れかゝり、吾人を此の幸に至らしむるを意識せり。此を以て吾人は基督教の宗教體系を以て、最も完全に宗教を組織したるものとなし、基督教を吾人の宗教として有するなり。

近頃が始まりたる事にあらねど、世には諸宗教を集合融和して、新しき宗教を作らんと試みる人なきに非ず。我國にても、佛教も基督教も皆な迷信ありて

不完全なれば、凡てを研究し、選擇して新しきものを作らんと云ふ學者あり。勿論釋迦の如きマホメットの如き人格あらば、之も出來ぬことに非ざるやも知れず。されど此は非凡にして人類稀有の天才を待つことなるや論なし。非凡稀有の天才に於ては、凡人又は前人以上に彼等の感せず知らざる精神的實在を感覺經驗し、諸宗教の教へたる宗教眞理を、自己の意識に従つて取捨し按配し統一し、かくて新しき宗教体系を作らざるべからず。之と共に彼は人をして眞宗教を得せしむる力を發揮せざるべからず。即ち自己人格の感化を以て、罪ある人を救はざるべからず。之を言ひ換ふれば、宗教は實在の根本たる神を善く知識して、且つ之と合一する活動をなすことなれば、大人物ありて人に此の至深の知識を與へ、且つ人の意志を感化して神と合一する活動を起さしむることを得なば、其人は宗教の開山たり得べし。然らざれば、唯だ諸宗教を研究し、宗教の理を知り、之を他人にも知らしめたりとて、宗教は起るものに非ず。人心を動かし人を救ひ得るものに非ざるなり。宗教は知と共に意の活動なり。知らしむるのみにて、意を動かすを得ずれば何時までも宗教起らざるなり。佛蘭西

の超越神論者の一人、曾てターレランの許に至り、時代に適する新宗教を造らんとして失敗し、失望せるを訴へ、其助言を求む。ターレラン之に答へて、其の至難なるを告げ、且つ曰く止むなくんば一策あり。君乞ふ十字架にかけられ殺されて三日目に復活せよと。然り此れほとの人格あらば、新宗教は起され得べきなり。然らざれば其の計畫は到底無益の徒勞なり。ユニテリアンの徒は疾より諸宗教の共通點を採取し、思辨に由りて宗教を立てんとせり。印度のブラマンマジユの徒も之を企てたり。されど今に至るまで人類に新らしき宗教を與ふる點に於ては殆ど成功の望を示さざるなり。吾人には基督の宗教意識は無二の大宗教者の意識にして、之が組織したる宗教體系は、宗教の眼目を達せるものなり。此の耶蘇の立てたる體系の歴史的に發展したるものを吾人の宗教體系とするとき、此に宗教其自身を完くし、一指の之に加ふるものなきを覺ゆ。之あらば他の細末の點は有るも可なり無きも可なるを思ふ。

然れども吾人は他の宗教を排棄するを要せず。凡ての宗教に有する宗教眞理をば悉く攝收包容すべきなり。否凡ての學問藝術萬端より、苟も神人の關係を

正しうする生活に資するものは採納することを怠るべからざるなり。唯だ吾人の宗教は耶蘇基督あつて起りしもの、耶蘇基督あつて存するものなり。耶蘇基督の経験し基督信徒の経験し來れる所の中心が同じく吾人の中心なり。其の重きを置きたる根本は吾人の同じく重きを置く所の根本なり。他の信仰思想は此の中心を圍みて之を助け、之を補ふものに過ぎず。故に吾人の宗教思想の内容は、或は古代及び前代の基督信徒の其より多様複雑ならんも知れずと雖も、基督的宗教として統一せられ居れるものなり。吾人は基督教を奉ずる基督信徒たる者なり。』一九三一、五、六

第二章 神の一般的觀念

- 一、神といふ觀念(神の定義——人格的靈)
- 二、神の存在(神の存在の証明——第一、形而上學的の議論——第二、科學的の議論——第三、心理學的の議論)
- 三、神と世界(宇宙の根本たるもの、人格——多神的觀念——超越神論——汎神論——汎神論の變遷——神と世界——神と人の人格)

余は先に宗教とは實在の根本たるものとの關係を正しうすることなりと言へり。然れども實在の根本たるもの果して存在するか。若し存在せば如何なるものなるべきか。斯の如き者にして存在せずんば勿論、よし存在しても單に内容の空虚なる絶對といふ如きものならば、之と吾人との關係を正しうするの道もとより有るべからず。宗教は根據なく理由なき行動となり了るなり。此を以て先づ此の實在の根本に付ての觀念を明にし、其の果して存在するや否やを究めざるべからず。

一、神といふ觀念

余は實在の根本といふと共に、屢々之を吾人の神なりとしたり。實在の根本

たるもの實に吾人が神と呼ぶ如き者にして始めて意味あり、又始めて宗教なるもの存在するなり。然れども神といふ語に顯はされたる觀念も、亦此に明白に説明し置くの要あるを感ず、何となれば此語は様々の意味を顯はし居ればなり。神といふと同意義の西洋の言「ゴット」「テオス」或は東邦の「エル」等の語原は何れも不明なり。我國の「カミ」といふは、「上」といふ語より來ると言はる。果して然らば「至上者」といふ意に於て吾人が神と稱するものを幾分顯はし得べし。然れども其にては尙甚だ不十分なり。吾人が神といふ語を以て顯はしたる觀念は、天地物質及び精神の凡ての世界の根源たるものにして、此は精神即ち靈なり。精神又は靈とは物質に對する物質以上の實在の名なり。而して精神といふ言は、近頃の哲學及び科學に於ては、稍意味の漠然たるものとなりたれば、吾人は更に神の精神又靈たるは、人格者たる精神また靈なりと言はざるべからず。人格とは意識の統一ある體系なり。知と意との結合せるものなり。吾人の人格は常に斯くの如きものなり。吾人は事物を経験し、此の經驗を自己の經驗として統一せり。之と共に自己は又或る目的を立て、之を成し遂げんため、内より外に向つて出動せり。此れ知と意とにして、吾人の人格の内容なり。人が天地の根本の實在に付て、觀念する所も、又人の如き人格たらざるべからずとし、之が人格者なることを思ふに外ならず。然るが故に宗教が人生の最高活動とはなるなり。若し天地の根本の實在にして、唯だ存在といふのみのものならば、之が關係を正しうすることは、人の精神の最高能力を以てせずとも可なり。人格以下のものに對しては、吾人は人格的の交渉を試みる要なし。唯だ對手が人格者、即ち精神的存在者なるが故に、吾人は精神を以て之に當り、精神をいやが上に伸ばして之に達せんとするなり。宗教は人格と人格との交渉なり。然れども神の人格が吾人の人格と全く同じと思ふは又誤れりとせざるを得ず。天地根本の實在は無限なり。至上なり。故に有限なる人の人格と同じとするを得ず。されど少くも吾人の人格の實質の如く、知と意とならざるべからず。故に吾人の神の觀念は人格的精神なりといふなり。

二、神の存在

天地根本の實在として、人格的精神果して存在するか。此は證明の出來るこ

となりや。人類は何に由て神を信ぜりや。思ふに人類の思想に神意識の起りたるは、人が周囲の現象を見て、自己の精神的天性により無意識の内に其の背後の實在を思想し始めたるよりなるべし。されば人は初より信ずべき理由を知りて信じたるなり。唯だ彼等の知識幼稚なりしだけに、其の理由の自覺せられたる所も幼稚なりしのみ。然れども人類に神意識始まりて以來、此の意識は次第に強くなり、遺傳せられ暗示せられ摸倣せられて、漸く人類の意識に深き痕を印し、堅き形をなし、人は先天的に神を思ふに至れり。故に神の信仰は今や一般に理由なしに人に抱かるゝに至りたり。多くの人々は此を以て其の天性に導かれて神を信ぜり。諸宗教の開祖は決して神の存在をまて證明せざりしなり。彼等は之を前定して道を説き、教を立てたり。信ずる者も彼等に由て神の存在を知りしに非ずして、存在せる神の内性と、其の自己等との關係を知りしなり。されば基督教の聖書にも有神論なく、基督信徒も有神論を知らぬ者多けれども、神の存在を信ずる理由を有せぬにはあらず。彼等は自ら意識こそせされ、理由ありて信じ居れるなり。今其の理由を吾人の知れる限りに於て擧げ、かくて神

の存在の證明とせんに、

吾人は第一には形而上學的に考へ、實在の根底として神を想定し、第二に科學的に考へ、自然界の現象より推して神の存在を論じ、第三に心理學的に考へ、吾人精神の本源、又其の活動の根本、又其の活動の對象として神の存在せるを認むるなり。

第一、形而上學的に考へ、實在の根底として神を想定す。吾人の接する所の事物は千差萬別なり。其れ／＼其の意味を有し、自らにて一の全體をなし、獨立し居れるが如しと雖も、實は自存せるものなし。何れも他に依て存し、何れも轉遷して終に其の存在の状態を變ず。其の存在の状態を變ずるも自らに由て變ずるに非ずして、他の力に由て變ずるなり。然も如くの斯く他倚他存的の事物が全體として宇宙を構成し、相互の間關係あり、聯絡あり、單に集合するのみならずして、一の關係的全體をなし、此に所謂「コスモス」を作れり。

されば宇宙の箇々の事物は、互ひに相倚りて存し、其の終局は其の根本たるものに依りて存すと思はざるを得ず。庭に在る石は地球ありて存す。石は其自

身にて石といはるれど、地球の含める成分にて成り、地球の一部分に過ぎず。生しても地球の中に生し、崩れて砂となりても地球の中に在り。地球は又この物質の世界の中に在りて、石の地球に於けると同じ關係を物質の世界に對して有せり。凡ての物皆な斯くの如くして他に倚れり。されば凡てのもの、倚りて存する終局は必ずなかるべからず。これ吾人の如何にしても思はざるを得ざる所なり。

而して宇宙間には唯だ物質のみの存するに非ず、精神存在せり。吾人の一人は一の全系をなせる精神にして、かくの如き精神は、世界あつて以來無數なりとなす。此の精神は物質とは全く其の成分を異にせり。物質との關係も密なれども、精神は物質あつて始めて存すといふものに非ず。物質と伴ひ相並びて存せり。斯くの如き精神實際存在して、之もまた自存的のものに非ず。自ら生ぜんとして生ぜしに非ず、自ら欲するまゝになり行くものに非ず、他に倚て生じ他に倚て存せり。然かのみならず、之もまた箇々の精神互ひに相關係して、社會をなし、歴史をなし、人類をなせり。されば此等箇々の精神の凡てが倚りて

存する根本必ず存せざるべからずと思ふは、思想の必然の到着點として已むべからざるなり。

然れども物質の事物の根本と、精神の事物の根本とが、相並びて存するといふことは、これ又思想の必然の要求として到底あるべしとは思はれず。デカールの思想は此までに止まりたれど、人は此にて思想を止むる能はざるなり。宇宙の根本たるもの二元ならば、宇宙は混亂して到底成立すべくもあらず、況や秩序あり、條理あらんや。完宙は一元に由て生じ、一元に倚て存在せざるべからず。此の一元は何なるべきか。近年の唯物的一元論は之を物質なりとし、殆ど凡ての哲學者及び宗教者は之を精神なりとす。

唯物的一元論はヘッケル等の唱ふる所にして、宇宙の本體は物質と勢力となり。而して勢力は物力と威力なり。物力とは物理的化學的の勢力にして、威力とは生命意識の力なり。此の物力威力は共に物質の含有する力なり。斯くてヘッケルは宇宙は物質のみにして、物理的化學的勢力は勿論、生命も精神的活動も、皆な物質の有する力の致す所なりとす。然れども物質果して精神の如きも

のを含有せりや。一元論者自身も物質なる者の原を以て元素よりも、原子よりも、電子よりも、尙微なるものにして、吾人の想像も及ばず、無に等しきものなりとせるを見る。斯くの如き無に等しき物質が、如何にして此の不可思議極まる所の精神を起し、世界を震動する宏業を立て、宇宙の玄微を穿つ學問をなし、世界を萬世に動かせる感化を起す所の大精神を胎みたりしかを思へば、殆ど餘りの空想的臆説なるに呆れざるを得ざる心地す。否精神のことは言はずもかな、同じく物質にして非常に複雑なるものが、其等無に等しかりし原より自然に發展せしと云ふことすら頗る理に合はぬ心地するなり。

故に宇宙の根本たる一元は、寧ろ精神的ならざるべからずと言ふ人多し。勿論物質が精神より出て來るといふことは、未だ明かにせられざることなり。然れども物質を存在すと思ふものは精神なり。精神が之を無しとすれば、物質は無きこととなる。物質に意義を附するものも精神なり。物質の秩序あり條理ありと思ふも精神なり。物質を支配するの力あるものも精神なり。されば精神の方が主にして物質は客たり。故に天地の根本たる一元は精神なりとし、或は物

質の世界は此の大精神の顯彰なりとし、甚だしきは物質界は此の大精神が斯かる世界ありと思へる其の想なり。物質の世界は實在せずとする者さへあり。

斯く宇宙は一元なるべきも、物質を其の本元とすれば精神解釋せられず、精神を本元とすれば物質の實在さへ疑はんとするに至り、何となく物質と精神の二元並び立てるやに非ざるかを思はしめんとする程なるが、これは理の容さる所ゆゑ、一元ならざるべからずとして考ふれば、此の物質の全體及び精神の全體を統一して一體なるもの存すと思はざるを得ず。宇宙といふは物質界及び人の精神界を合はせたる全體のことなるが、此の宇宙全體も斯くの如く、精神と物質と並び存して、尙其の以上の統一を要し、宇宙全體も尙他に倚りて存在するを示すものある以上は、之を宇宙よりも大なる一元に歸せざるを得ず。即ち宇宙に内在すると共に、宇宙を超越せる一元に歸せざるを得ざるなり。

而して此の宇宙に内在すると共に之を超越せる一元は、又必ず人格ならざるべからず。吾人は存在を物質と精神の二つより成れりとせり。他に尙異れるものありや知るべからずと雖も、吾人の理解には此の二つの外思はれざるなり。

存在は物質と精神とし、存在するものは其の何れかなりとすれば、宇宙の本體は人格なりとせざるを得ず。何となれば、物質も精神も共に統一せられて宇宙といふ一全體をなし居ればなり。宇宙の物質的の事物、千差萬別なりと雖も、悉く終局に於て統一あり。精神また物質と成分を異にし、其の小體系の數も其の活動の状態も、千差萬別なりと雖も、悉く一致ありて、終局は統一せらる。而して精神界全體も物質界全體も亦統一せられ、全宇宙に於ては背馳矛盾虧裂を見ざるなり。斯くの如き統一は獨り人格にして始めて存する所。故に吾人は宇宙の根本たるものは、物質をも精神をも一つの全系統に統一せる一の人格なりと想定せざるを得ざるなり。之を神と言ふは此故なり。

形而上學的に考へて、宇宙の根本を神と同一にすることは、神を抽象的のものとし、其の人格者たる觀念を失はしめ、且つ吾人箇々の精神との關係を部分と全體との關係となす恐れあるを以て、近來の神學者は此の論證を輕んじ、若くは棄てんとする傾向あり。されど吾人には尙神は絕對なりと思はるゝなり。神もし絕對ならずんば、我等は神の以上に更に神を求めざるべからず。何とな

れば神を絕對とせざれば多元論となり了りて、宇宙の問題全く解決する能はざるに至ればなり。神と絕對とを同一としても、之に由りて神の人格者たる觀念を犠牲にするを要せず。其他基督教信仰と衝突なく、又何等の弊害を起すを覺えず。此は尙後に論ずべし。一九三一、五、一二。

第二、科學的に考へて神の存在を推論す

自然界の現象は、如何に論ずるも人類をして神を意識せしめし基となりしものに相違なし。庶物教、活物教の時代は言はずもかな、人は自然界を見て神あるを思へり。クゼノフオンの書中には、ソクラテスが自然界の現象に由て堂々神の存在すること、其の慈愛とを説きしを記せり。舊約全書の詩人も諸の天は神の榮光を顯はし、大空は其の手の工を示すと歌ひ、パウロも夫れ神の永能と其の神性とは造られたる物に由りて、創世より以來悟り得て明かに見るべしと言へり。今日の科學の助によりて、吾人の身體の一部たる眼球のみを研究しても、其の深奥なる組織をなせるには驚かざるを得ず。一莖の草の花を取りて、之を生物學植物學的に研究し、更に之が色等に付て物理的に研究し、更に又其

の形と色等に付て美學的に研究せば、其の末終に如何に感ずるか。之を神あるに由て存すとすると、之を全く無心の物質と勢力の自ら致す所なりとすると何れが理に合へりや。然るに自然界には斯かる現象無數に充てり。此に於て、ペーレーの『自然神學』やバトラーの『類推學』等も現はれしなり。此等は今日より見れば既に陳腐なりと雖も、然も其の自然界を以て神の顯現とし、之に由て神を證明したる根本の主義は、何時までも棄つべからざるなり。固より古き自然神學の論ずる如く、餘りに宇宙を藝術品視するは、多少控ふべきことにもあらん。個々の生物の個々の機能の外界に適合せることまで、悉く神が直接に指を加へて作りたるに由ることと信ずるの要なからん。進化といふ事は確に事實ならん。然れども廣き所より見て、宇宙は關係せる全體にして、之に統一あり、之に目的あることを認めざるを得ずとし、進化といふことのあるも、實に宇宙は進化するやうに計畫せられ居れるを示すとなし、其の斯くの如きは、統一をなし、目的を立つるものあるを證すとし、統一をなし、目的を立つるものは獨り人格者なるが故に、此に人格者ありと結論するは、最も自然にして、又

最も満足を與ふる論理に非ずや。

一、今自然界の現象を推して、神の存在の證を立つるに、其一は因果の理に由て神の存在を推定することなり。結果には必ず原因ありとは、自明の理として一般に承認せらる。然るに宇宙は確に一の結果なり。之に原因なかるべからず。宇宙に始ありしとせば勿論之には原因なかるべからず。若し始なかりしとしても、之が現在の宇宙となれるには必ず原因なかるべからざるなり。而して其の原因や必ず其の結果に相應せるものならざるべからず。無より有の生せぬ如く、結果に相應せざる原因より一定の結果の出て來らん理なし。或は結果が大にして原因の極めて少なる如く見ゆる場合ありと雖も、實は此の場合に原因と認めらるゝものは原因の一部にして、隠れたる所に尙原因あり。其等の原因集まつて其の大なる結果を引き起せしに外ならず。故に若し一原因の外に他の原因なかりし時には、其の唯一原因は凡ての結果を起すに足るだけの原因ならざるべからざるなり。宇宙の原因たるものも必ず之に相應せる原因ならざるべからざるなり。

宇宙間の事物は悉く原因と結果の連鎖なり。個々の事物は必ず之に相應せる原因あり。此を以て無神論者は此にも一流の論法を用ひ、事物の原因は事物にして神に非ず神を要せずと言へり。成程雨の降るは空中に昇れる水蒸氣が寒冷の氣に遭ひ凝結して地に落つるに因り、風の吹くは一方の空氣が熱して膨脹し他方の冷かにして濃厚なる空氣平均を得んとして其方に流れ行くに因り、苗は種子を蒔きしに由て生じ、果實は花の開きしに由て結へるに相違なく、宇宙は斯かる因果の集合、因果の連続たるに相違なし。然れども人心は斯くの如き因果の理に由て宇宙の事説明出來たりとは思ふ能はざるなり。斯くの如き因果の理は、局部く、個々の事物をは説明し得べきも、宇宙全體を説明することを得ず。人の心は尙求むらく、宇宙局部く、斯くの如き個々の因果あつて、斯くの如き全體の宇宙成り立てるは抑も何に因てなるかと。即ち人は宇宙全體の原因、終局の原因たるものを求めて已まざるなり。

此に至れば此の大原因は、既に自然科学の闡明の領分を超えて、哲學の研究の領分に存せり。抑も科學は宇宙の事實を調査研究し、其の真相を發見し、其

の原因を詳にす。之に由て或る物と或物との共通點も發見せられ、或事と或事との齊一點も顯彰せられ、斯くて事物の法則なるもの明かとなる。哲學に至ては更に科學が斯くの如くして蒐集したる材料を綜合し、之に由て一般的原則を推斷し、事物に關して吾人の抱くべき觀念を定立す。されば科學の明にし得る所は所謂器械的原因のみ。器械的原因を超越したる形而上的原因なかるべからず。此は哲學的に考へて始めて心に捕捉せらるゝなり。人は宇宙の事物の原因の終局には、第一原因なかるべからざるを思ふ。

既に第一原因に想到すれば、吾人の心は最早其以上の原因を求むること能はず。或は思へらく、原因には原因ありて連鎖の如ければ、第一原因また其の原因を有せざるべからずと。此は常識の淺基なる作用に由て起る自欺なり。元來第一原因といふは、吾人の思想上の必然的歸着點にして、吾人自らが初より終局的のものとして立てたるものなり。然るに第一原因の原因を求むるに至らば、既に自己の思想體系を取り崩したるなり。吾人は原因の終局たるものを第一原因と稱し、斯くの如き終局あるべきは人心の必然的要求なりと言へるなり。

斯くの如き第一原因の無かるべからざる事は、凡ての眞面目なる思想家の齊しく考ふる所なり。スペンサーは宇宙の祕義は多くして、思想するに従て益々不思議となり行けど、其中に思想家に取りて唯だ一つ絶対的に確實なることをあれ、己れが萬物の源たる無限永遠のエネルギー(勢力)の前に立てりといふ感これなりと言ひ、ヘッケルは宇宙に顯れたる萬物の相當なる原因は「本體の法則」なりと言へり。吾人は「本體の法則」を宇宙の大原因として取ることはざることに前に言へるが如しと雖も、此の説も一の大原因たるもの、存在するを思はざるを得ざるより起りしものなるを見る。近世の絶対唯心論に至ては此の思想は特に顯著なり。絶対唯心論にては、凡て人の意識生活は其の根柢に宇宙的意識あるを示すとし、思想及び存在者の統合たる一の思想又は意識ありて、凡ての個々の思想及び存在この上に存らふとせり。此れ又其の説の當否は兎に角、第一原因の思想の明白なる表彰なりとす。實に第一原因の思想は人類共通の明白なる原理なり。之を信せざらんとするも難きなり。第一原因確に無かるべからずとして、さて其の第一原因は如何なる性質のものなるべきか。

小なる原因が大なる結果を起す能はざる事は前に言へり。故に原因は其の結果と相當せざるべからず。然れども結果は其自身にて原因を十分に示すとは言ふべからず。原因の全體が一の結果に顯はれたりとはすべからず。結果は原因の全體を顯はすには餘りに小にして、又原因に似させぬこと多し。多くの場合に然るものなるが、例へば机の原因は机よりも大なり。然れども机の大なるもの、若くは机に似たるものとは言ふべからず。全く机には似もつかぬ大工なり。吾人は机を見て、其の平板を知り、其の脚を知り、其の此等の組み立てられたるを知る。然れども其の成りし原因は此等知る物の以上に、以外に、存在することを推論す。されば原因は結果に相應せるものと思へども、結果に由て直接に知るよりも大なることを思はざるを得ず。

斯く原因は結果に由て直接に知ること能はずと雖も、結果は原因を顯はせるが故に、結果を知るに由て原因を推斷確信することを得。机は木や金屬より成れども、之より推して机以上の工匠の作れることを確信す。即ち工匠は机の中に其自身を顯はせるを見るなり。彼の如何なるものなるかは机の中にて讀まる

なり。而して結果の種類が高等なれば高等なるほど、其の原因は此に自らを顯はすこと多く、簡單なる机よりは裝飾用の机、或は之に施せる彫刻などは益々其の原因の面目を語りて、吾人に明かにする所著しきものならずや。

宇宙の大原因たるもの、性質も、宇宙に由て十分に知ることは難し。宇宙自身より以上に出でざる均等原因や、宇宙に似たる原因に非ざれば、第一原因とすべからずといふ論は非なり。第一原因は宇宙よりは大きなもの、宇宙とは種類の異なるものあらん。されば第一原因を全部そのまゝに知り得ることは望むべからず。確に吾人の知り得ぬ所の方却て多かるべし。否知るといふことが單に吾人の五官の經驗するものゝみに限らるゝならば、第一原因は確に此の種の知識の領分外に在るべし。さりながら縦し直接に知り得ぬにせよ、結果たる宇宙に由て確に其の如何なるものなりやを推定し得べし。何となれば第一原因は其自身を其結果に顯はし居ること當然なればなり。さながら工匠が自らを其の結果たる机に顯はせると一般なるべし。

扱結果たる宇宙は如何なるものなるかといへば、前にも言へる如く宏大至極

にして、而して其の内部は關係あり整齊あり、諸の組織の整然として、而して諸の構造の複雑なるを見る。之が原因たるものは如何あるべきか。唯だ之のみにては吾人は工藝品を推して其以上に材料以上の原因あるを信じ、建築を推して其の全體の目的には木以上の原因あるを信ずるに、此の大宇宙の第一原因たるものを物質以上の精神なりと推定し、此の精神の活動に由て宇宙成れりとすることを以て、單に通俗なる巨大番匠説として唾棄すべきか。況や此の宇宙間には靈妙なる精神なるもの存在せり。吾人は皆之を有して、自然界を知識し自己を意識し、又絶對を思想す。之に由て回天の事業も目論まれ實行せられ來れり。否此の全天地を有りと意識するものも此の精神なり。斯くの如き精神の原因や、低く小さき原因にて事足らんや。又之を精神又は精神以上のものと信せざるを得ざるなり。更に又宇宙に發展あり。生物に進化あり。人類に上昇あり。宇宙は大躰に於ても、内容に於ても、只管向上膨脹内長の途を歩めり。其の源たるもの、單様低劣貧弱にして斯くの如きことあるべからず。無限大の原因あつて、宇宙は始めて無限に發展すべきなり。斯くの如き第一原因を何と名づく

べきか。名は好むまゝにせよ。されど神とは宇宙の根本たる人格的靈者なりと定義し置きたる所を以てすれば、此の第一原因は即ち此の神ならざるべからずとするより外に思考の途なきなり。一九三二、五、一八、

二、宇宙の解すべき事に由て神あるを推定す。吾人の前に展開せる宇宙は甚だ宏大深遠なりと雖も、而も能く吾人に由て解せらるべし。之を解するには、吾人の裏に在る理性を以てす。吾人の理性を用ひて宇宙を解すれば、さしも不可思議なる宇宙も、濡れ紙を一枚つゝ剝ぐが如く、次第に隅の方にまで解かれ行くなり。即ち知る宇宙は吾人の理性の性質と同じ理を以て組み立てられ居れることを。吾人の裏なる理性と、吾人の外なる宇宙の理とは、同性質にして相照應せるものなり。吾人は此を以て宇宙の事物を研究もし推論もするなり。若し吾人の裏なる理性と、吾人の外なる宇宙の組織とが、互に異なる原則より成らば、吾人の理性は以て自己の内部のみを解くに足るものたるべきも、自己以外には一寸も適用出来べからず。忽ち支梧を感じて、宇宙は全く吾人には解す

べからざるものとして留らん。唯だ吾人は宇宙の理また吾人の理性と同種類にして、吾人の理性を突き入れて宇宙を解すべしと確信するが故に、奮つて凡ての學問をなし、研究を試み、思想を企つるなり。

斯くの如く宇宙が吾人の理性を以て解すべき理由は何なるか。或は言ふ人は自己の印象を綜合して概念を作らんとする時、直ちに自己の理性の型に入れて之を作るが故に、宇宙に理あるが如く見ゆるなりと。勿論何物も或意味に於ては心を離れて存在せず。宇宙の合理的なることも吾人の心の之を然か思ふに由て始めて實となるとは雖も、其は認識論の一議論にて既に現象を實在として認めたる以上は、現象の合理的なることは、單に吾人の主觀的觀念にはあらず。人類の理性の未だ生ぜざりし時より、宇宙は合理的なりしとせざるを得ず。吾人は自らが宇宙を合理的に思ひ做すに非ずして、實に其の合理的なりしを發見するなり。宇宙の理は客觀的に存するなり。宇宙の理が人の主觀と對立して存在するは確なることなるか、ピユヒネルの如きは、更に一層反對の方に廻り、其の哲學的見地の上より、人の理性は全體を寫す鏡なり。無限の過去より外界

との間に絶えず交はされたる交渉より出て來れる最後の結果なりと言へり。人の理性が全然外界の感化に由て鑄成されたるものなるかは知れねど、斯くの如き容子も確にあるべきは疑ふべからず。意識が知らずくの間、外界より影響せられ、之を寫せる鏡となり、終に自分の方より反つて外界を思想して、之を理解するに至りたる趣も必ずなきに非ざるべし。若し斯くの如しとせば、吾人に理性あるは、宇宙が初より合理的なりしが故にして、宇宙間に大なる理の遍在貫徹せることを示すものと謂はざるべからず。

吾人の理性に由て理解せらるべき理が宇宙に遍在貫徹せりとせば、宇宙にはまた吾人の理性と同種の理性存在するなり。而して理性は意識の統一の最高なる作用の一なり。動物に於て幾分その係を有すると雖も、理性として劃然たる面目を有するものは唯だ人格に於て之を見るのみ。人格者にして始めて理性あり。然らば宇宙の解すべきことを以て、其の組織の裏面に人格者の存在を推定するは最も安全なることに非ずや。宇宙解すべからずんば是れ吾人の理性とは異なるもの、作用に由て存するなり。宇宙吾人の理性を以て解すべくは、これ

吾人の理性と同じ種類の理性に由て組織せられたるに由り、此に吾人々格者と親類的のもの、存在を推定せずして已む能はざるなり。埃及にて繪文字の碑を發掘せし時、アツスリアにて楔形文字の板面を見出だせし時は、世人は殆ど其の解すべからざるに呆然たりしならん。時代を隔つる三千年四千年、人去り國亡び言語滅して尋ぬるに由なかりければなり。然れども學者は絶望せざりき。たとひ如何に時代を隔つるとも人類の殘せしものなり。人の心を以て之を解し得られぬ理なしと信じ、之が研究を重ねて今やまほよそ此等の古文字を読み得るに至れり。宇宙は一の大なる書物なり。哲學者之を読み、科學者之を読み、詩人之を読み、平民之を読み。讀て理を知り、意味を知る。此の宏大なる書物は實に宏大なる思想を表示せるなり。之を以て吾人と親類的なるもの、著作と見ることは、最も道理に合へりとすべからずや。吾人は宇宙の解すべき事より人格的の神の存在することを推定するなり。

其三、宇宙に目的的存在することに由て神の在るを推定す。目的とは意志の

自ら立てたる行動なり。何事かを爲さんと欲して爲すことなり。意志なき自然の行動は、目的行動に非ず。故に目的あるときは之を立てたる意志あることを證す。宇宙には器械的に動く自然の出来事のみならず、目的に由て動く目的行動あり。吾人の行動も目的のある行動なるが、此の行動も宇宙間の行動なり。然れども宇宙間には、吾人々類の立つる目的の行動あるのみならず、人類的目的以上の目的あり。

先づ人類の歴史は宇宙に人類の立つる目的以上の目的あるを示す。人類は固より自己の意志に由て行動す。アレキサンデルは國を立てんとして國を立て、ブルタスは羅馬を救はんとしてシイザルを殺せり。改革者等が身命を抛つて國家の改革を企つるが如きは、最も明白なる目的を立て、行動したるものなり。此等人類の目的のある行動に由て人類は進歩せり。然れども歴史の全體より見れば、此等人類の立てたる目的は、更に世界大の大目的の上に浮びたるものなるを知る。時として人類は東の方に行かんといふ目的を以て行動して、却て全體を西の方に進むる助をなせることあり。人類は自ら無意味に行動したるに、其

れが歴史の大發展となりたる例は枚舉に遑あらず。特に人類の幼稚なる時には、何等一定の高尙なる動機も目的もなく、唯だ本能衝動に従つて進退したるに、後より之を見れば尙將來の進歩に向つて動き居れり。かくて大體より見て人類の歴史は常に高さを指して昇り來れり。時として進退もあり、迷失もあり、墜落もあれど、全體の上よりは決して亂雑にあらざりき。此れ豈に人類界に一般的目的の存するを示すものに非ずや。

生物の進化も亦明に一般的目的の存在を證するものなり。生物自身が其の本能乃至は意識に由り、自らの目的(廣き意味の)を達せんとして行動することは勿論生物其物の爲す所と言ふことを得べけん。然れども全體に進化するは全體に目的あるが故なり。下等なる生物は勿論、稍高等なる生物と雖も、自ら向上せんと欲して行動するに非ず。然も彼等の行動や全體の進化となる。一粒の細胞が核子より首めて分離を起し、二つとなり四つとなり、終に無數に至りて生命體系を組織する途行すら、其最初より向上の途を取れり。其の最初より一の目的を指せり。斯く一個の生命體の成長に於て、一種族の發達に於て、將た生物

全體の進化に於て、皆な一の終局を目ざしつゝ向上するを見るとき、此に何等の目的なしと言ひ得るか。生物自身は盲目的なれども、其を超越して或る目的があり、生物は自然に其の目的を達せんとして行動しつゝありとせざるを得ぬならずや。事物が目的に適合するといふことは必ずしも機關が外界に適合すとか、物と物との相互の關係が甚だ面白しとか云ふことのみには非ず。其等も宇宙間に目的ある證にはあらん。然れどもよし機關と外界との適合は、全く生物自身の成せる所なりとしても、又物々相互の關係の都合よきは唯だ自然の勢力の淘汰によりて現出し居れるものなりとしても、然も此等の全體の上には尙目的の存在せることを疑ふべからざるを感ず。されば進化論の如きは、決して宇宙に目的あることを反證するものに非ずして、却て宇宙に目的の存在することを證明す。彼の専攻の生物學者などが、生物のみを一心に研究し、前をも後をも注意せずして、生物は自ら進化す其以上に何物も存せずと唱ふる如きは、自らを知らざるの甚だしきものなり。宇宙に目的あるは諸の科學の報道する所を綜合し、之を基礎として立てたる解釋なり。哲學說なり。一部専攻の學者が目的

論を笑ふ如きは、斥候より復命せし一兵卒が、參謀本部の作戰計劃に出づる大軍出動令を笑ふと一般不當も甚だしきものなり。總じて唯物論は思想を中途にて打ち切るより起る。事物を離れ／＼に考ふるか、又は専ら或る事物のみを考へて他を顧みざる時は唯物論にて満足すべし。然れども事物を綜合して考へ、全體より考ふる時は、人は到底唯物的解釋に止まる能はず。されば進化の如き事實を見るときは、進んで目的の存在を認めざるを得ざるなり。

宇宙全體に於て又目的の存在を見る。此は形而上學の領分に屬すれども、また此に附言するを妨げず。シェリングもヘーゲルも、宇宙は理に合へる發展なりとせり。理ある發展は目的を有するに由て存す。スペンサー又宇宙の進化を論ぜり。宇宙は全體として一の目的を以て進行しつゝあるなり。否宇宙自身が既に目的たることを示し居れるなり。

目的は意志の立つるものなるに、斯く到る所に目的を認め、其の目的は理に合へるを認むる以上は、宇宙は合理的意志のなしたるものなりと言はざるを得ず。合理的意志は人格に於て始めて存す。宇宙に合理的目的の存在するは、即

ち宇宙全體を合理的意志の結果とする人格者の存することを證す。我等の定義せし人格的の神の存在することを證す。吾人は此に於て目的の存在より神の存在を推定することを得と云ふなり。一九三三、六三。

吾人は宇宙現象より神あるを推定す。此の推定は實在と一致するものたるを疑はざるなり。或は此は單に推定にして實驗的證據の存するに非ざるが故に、神は宇宙現象に由て知られたるに非ずと言ふものあり。實驗的證據とは、濁れる空氣の中にパクテリヤあるを顯微鏡に由て證し、太陽の光が七色の集合なるを三稜鏡に由て證する如きを云ふ。神の存在には斯かる證據なし。然れども實證なきものは存在せずと云ふは誤なり。エーテルの如き電子の如き、科學者未だ其の實驗的證據を捉へ得ず。されど理まさに在らざるべからざるものとして之を信ず。事物の法則とか原理とかの如きものに至ては特に然り。されば宇宙を實驗的に検査して神が五官に捕へ得ざれば無しといふべからず。宇宙の現象より推して理まさに然らざるべからざれば之を信ぜざるを得ざるなり。現象の

直接に證明するものは現象其自身なれども、又必ず現象以上のものを推定せしむ。工藝品を見れば、單に之を物質の集合とも見ず、單に或る形式の權化とも見ず、此物を超越して其の背後に人格あるを推定す。推定なりと雖も動かすべからざるなり。故に宇宙の現象は人格的の靈なる神あるを示すと論ずるなり。

第三、精神の存在と其の活動に由て神の存在を證明す。

吾人の經驗する所のものには、單に物質的の事物のみならず、又精神的の事物あり。吾人の内部にも又外部にも心的活動なるもの立てり。此の心的活動は何に依て存するか。實に精神若くは靈あつて存するなり。精神の存在に付ては常識を以てすれば殆ど疑ふの餘地なし。吾人は肉體の以上に精神を有し、肉體の感覺する所を精神に由て思想し、更に精神の欲する所を肉體に由て行ふことを自覺し、又肉體の發達に由て其の益々健全に活動せんことを希ふと共に、精神を修養して精神の活動の愈々盛ならんことを願ふ。此の自覺と此の希願とを有せざる人は蓋し極めて稀なるべし。古の希臘の學者より既に肉體と靈魂の存

在を教へソクラテス、プラトーンに至ては靈魂不滅をさへ美はしく説けり。希伯來の人民猶太人の如き極めて唯現象主義の信仰者なりしも、亦肉の以外に「ネフェシユ」「ルアク」など稱するものあつて、人をはじめ生物を生かすの氣息となれりと信じたり。近世に至つて物質と精神とを明白に區別し、兩者並存するを説きたるはデカールトなり。スピノザに至ては宇宙を一の實體とせしも、此の實體は思想と延長の両面を有すとして、物質精神の共に存するを説き、カントの超越哲學また現象以上に事物の實相の存在を説いて、精神に重きを置き、フイヒテ、ヘーゲル等の各派の唯心論に至ては、更に甚だしく精神を重んぜり。平民の信ずる所も、學者の説く所も、精神の存在を實とするに於ては一致せるなり。

然れども精神の實在を否定したるものまた無きに非ず。或は精神といふもの別に存在せず、唯だ肉體にて感覺し、此の感覺を認覺したるもの、迅速に繼續するが故に、此に自己とか精神とかいふもの存在するが如く思ふなり。されど精神と稱するものは實は感覺の集合總計なりと説くものも出て、十九世紀の中

葉唯物論の最も盛なりし頃には、フォグトは心的活動を以て腦髓の分泌となし、宛がら胃が胃液を分泌するが如く、腎臓が尿水を分泌するが如く、腦髓は思想を分泌すと唱へ、モレシヨットは思想は腦髓實質の運動より起ると唱へ、此に無精神論を唱へたり。然れども吾人の精神は決してヒュームの言ふ如く、認覺の集合のみとは思ふ能はず。感覺認覺は必ず相關係して此に一體系をなせり。此に統一あり。此の統一ある體系が即ち吾人の精神なり。吾人は自ら意識を統一す。吾人は肉體の感覺の集合のみならず。肉體を支配す。即ち肉體以上に超越せり。此の肉體以上に超越せる一系體の意識が即ち吾なり精神なり。又精神が唯物論者の言ふ如く物質の分泌若くは其の運動に起因せざることは、今日に於ては殆ど何人も認承することゝなれり。若し夫れ精神は物質の有する一種の力なりと唱ふる一元論に至つては、もはや物質以上に精神なるものゝ實在を認めたりと言ふも可なる位にて、唯だ之が物質を離れて存せずとするのみ。若し此の論に従ひて精神は唯だ物質に伴ひてのみ存在するものとしても、實際に於て深遠なる活動をなし、偉大なる影響を起し、自然界を征服使役し、物質を支配

しつゝあるものたるは明なり。此點に於ても唯物論者は自説維持の必要より物質的決定説を唱へ、精神こそ物質に支配せらるるれ、物質は精神に支配せられず、精神は如何にしても物質的必至の力より自由なること能はず、物質を精神が支配して動かす如く見ゆるものも、實は物質の要求あつて、精神これがために動けるのみと論ず。若し斯くの如くならば、精神は全く物質の所産にして、物力に由て捕捉せられて自然的に動くに外ならざれども、然も人の經驗は自己の意識を自らに由て統一を試み、自らに由て或る方向に意志することを得ることを自覺せしむ。人は自己自身に由て決定せらるれども、物質の力のみにて全然意志を左右せらるるものに非ざることは、大多數の倫理學者神學者の一致する所なり。既に斯くの如くなれば、吾人は物質を超越して意識の統一を有す。即ち肉體以上に我といふ一の全體を有す。此れ精神なり靈魂なり人格なり。實に世界は此の人格を産み出ださんために産の劬勞をなせり。人格の淵源は實に其の發する所を遠く低きに有す。抑も生物が此の世界に存してより、其の感覺衝動の發達進化の方向の指す所は人の精神人格の產出てふことにあり。下

等なる生物の感覺衝動は意識の極めて單純幼稚なるものなりしが、進んで動物の意識となり、此に自他の別も生じ、此に自發の行動も生じ、終に吾人々類に至て、此の意識は殆ど完全に發達して、明白なる自意識となり、自己を他より區別し、自己の統一に由れる目的を立て、自己に由て行動を起すに至れり。精神は實に生命進化の絶頂なり。否生命の進化は此に至て寧ろ生命以上の一の全體なるものを生ぜしなり。

諸の心的活動は此の精神の作用に由て起るものに外ならず。或は事物の關係を究め、其の間を一貫せる法則を見出だし、此に道理を辨ふる如きは、確に精神の作用に由て爲し得る所なり。或は行爲に善惡の價値を附し、價値あるものと無きものとを辨別するも精神に由り、更に辨別せる所に従ひ、自己の中心より選んで何れをか取るは一層精神の作用の明白に顯はれしものなり。自他の區別を立て、自ら自己を意識するに至ては、尙奧妙なる精神作用ならん。此等は動物の意識にも幾分其の萌芽は存し居らんかなれども、未だ人の如く完全に又純粹に意識の作用を發揮するものはあらざるなり。此を以て深き思想の哲學者

は何れも我といふものを以て最も確なる實在となす。ロックにせよバークレーにせよ、フイヒテにせよ、ハミルトンにせよ、経験を以て最も確なる實在となし、凡ての思想之を基として起るとしたるは、皆な實に精神の實在牢として動かすべからざるを證するものなり。

精神かくの如く實在し、斯くの如く活動す。吾人は之に由て直接に神の存在を證明し得るを覺ゆ。

其の第一には靈界の統一に由て神の存在を證す。吾人は自らが感覺認覺を統一せる一の靈なることを知れり。吾人は肉體を有し、肉體に由て活動すと雖も、吾人の自己なるものは肉體を超越して存在せるなり。肉體は吾人の自己を表明し、吾人の自己の用をなす。されど吾人の肉體は我が肉體にして我にはあらず、我は即ち肉體の裏面呑寧る其の以上に實在すと言ふを得べし。斯く吾人は自らが肉體の以上に在ることを思ふと共に、又吾人の周圍の人々も悉く自己と同一の靈なることを信せり。他が實在するや、他人の靈が我と同じく存するや。之

を認識論の論理に由て證明せんとするには種々の困難もあり煩雜もあり。されど吾人は常識を以て他人も確に自己と同じく靈として實在することを信じ、空も疑ふ所あらざるなり。他人存在して我と同じく靈たり。其の肉體は其人の表顯、其人のものにして、其の人は肉體の以上に在て統一せる自己なりとし、斯くの如きもの幾千萬人幾億萬人ありとすれば、天地は眞に奥妙極まれるものならずや。吾人の目前に展ひたる物界は、實に宏大にして其の趣また多様複雑なるに、此の以上に億兆の人格の此の物質の世界を超越して存在せりとなす。吾人は莊重不可思議の感に打たれずんばあらず。實に物質が集まつて物質の世界を造れる如く、吾人億兆の靈は、此の以上に超越したる所に一の靈界を作れるなり。然り物質の世界の上に靈の世界存在して廣く擴かれるなり。

吾人の自己は肉體の以上に在て、統一をなす所のものとすれば、吾人自らは實に靈界の存在者なり。人の本體は物質を超越せる靈界に在て、其所より此の物質の世界に顔を出だせるなり。肉體は即ち吾人が靈界より物質界に覗ける窓口たり。此の世界より超越せる靈が此の世界と接着せる觸點なり。吾人の爲す

所の事は物質界に源を發せずして靈界より來るなり。従つて其の影響する所は物質界のみに非ずして靈界なり。たとひ物質界に如何なる大波瀾を起すとも、其の運動靈界より來らず又靈界に響く所なくんば、其は人類には殆ど價なき出來事なり。之に反して假令物質界には殆ど見るべき結果を來たさずども、靈界を震撼すること大なれば、其の事業は不滅のものなり。吾人が一杯の水を小さき者に與ふるは、物質界に於ては、單に一方に在る少許の液體を他方に移せしと云ふに止まらん。されど與ふる者が心から愛に溢れて與へ、受くるものが心から感謝して受けなば、此の小なき事が靈界に起せる波瀾は大なるものなり。場合によりては却て三井三菱の慈善事業の起す波瀾より大なるとあるも知るべからず。故に古來高潔なる人格は勉めて物界よりは靈界に大なる事業をなさんと企てたり。彼等は物界にては小なりしも靈界にて偉大なりき。孔子にせよ釋迦にせよ。其の當時には必ず見るの榮なき人なりしならん。時人は彼等の爲す所を見て、最も少なき事としたるべし。確に大宰相が宣戰媾和の權を揮ひ、大事業家が一舉して世界を震動せしむるに比ぶれば、彼等は眞に見るに足らざり

しなり。然も彼等は靈界に寄與したり。靈界は彼等に由て動かさるゝこと大なりしなり。ナザレの耶蘇の如きは、物界にては蓋し最も微なる一人なりき。僻邑より出てたる工人の子たり。身邊には無知の小民を集め、人に責められ罵られ、何の成したる事もなくて十字架にかけられ終れり。物界には殆ど無きが如き人物なり。然も彼は靈界に擴がれり。彼は千載の磐として、潮干に纒に頭を現はす沖の石の如く、表面にこそ見えざれ隠れたる所に無限の廣袤を有したり。吾人實に靈界に住みて、吾人の受る事悉く靈界に影響すとせば、又自ら勉めて物界のみに花々しく著はれんよりも、多く靈界に寄與して此生を送ることを心がくべきならずや。

其はさて措き、吾人は斯くの如く靈界の存在者にして、億兆集まつて靈界を作れることなるが、此の靈界は單に人格の集合にあらず、關係ある躰系なり。物質の世界すら個々の事物の唯だ集合したるにはあらず、事物各々相關し、物質全體は此に一躰系をなして所謂宇宙を造れり。まして靈界に於て支離滅裂ならんや。全體に關係なからんや。否靈界の關係てふものは、非常に緊切綿密に

して、其の程度物質界に於ける其の比にあらざるなり。

先づ吾人各自の人格の相依れる様を見よ。人格それ自身に於て一の全軀なり。之は決して分ち割るべからず。吾人は各自獨立して自主自由なり。然も吾人は決して自己のみにて此世に在る能はず。自己が祖先あつて始めて存するは言ふまでもなく、既に生を稟けたる後と雖も、また他の人格あつて始めて生存す。若し人を獨り離して全く他と交渉なからしめば一日も生きるに堪ふべからず。人類の性格の如きは、他人あつて始めて發達し、他人と相待つて始めて其の美を成す。人道といふものは一人の人格中に全きを求むべからず、人類といふ集團に於て之を見出だすのみ。吾人は父あつて始めて自から孝道ある人たるを得。子あつて始めて父たる徳を有するを得。夫あり妻あつて、此に人情を全うす。友人あり國家あり世界あるは、即ち吾人の人格を完からしむる所以ならずや。吾人は一人の一人に非ずして、全軀の一人なり。靈界は此に於て非常に緊密なる一軀系なることを記せよ。

次に斯くの如き關係ある靈界には感化といふ不思議の事實あり。個人の精神

は一人一人自主自由なるに、然も一人の品格は他人に感染するなり。靈界は生きたる身軀の如し。一方より滋養を取れば全軀之に由て育ち、一方より毒を流し入るれば全軀これに由て害を蒙る。一人徳あれば、其の徳の及ぶこと郵致して信を傳ふるよりも敏なり。思想の如きも常に流通して極まりなし。其の動くや潮の流るゝに似たり。一人感ずる所、他また之と同じく感ず。靈界は統一して生ける有機的軀系をなせり。

且つ又人格の相互の内容には一致あり。其の意識する所何れも同一様なり。理は萬人に一貫して、道理は一様に道理とせられ、不道理は一様に不道理とせらる。善に對する欲望また萬人に共通し、意志の目的として善を選はんとせり。凡て人情に東西古今の別なく、宛から人の靈なるものは、或る型に據て造られたるものゝ如き様なり。

斯くの如く凡ての靈は約束せるものゝ如き有様にて、相集まつて靈界をなすとせば、之は必ず凡ての人の靈の上に大なる靈あるに由らざるべからず。人は自ら企てて靈界の一員たる容子を維持せるにはあらず。既に然か云ふものとし

て存在せしめられしなり。靈界に統一あるは必ず之を統一するものあるに由れり。靈界が宛から一個の靈の如く、思想一上一下し、知も意も一貫するは其の根底に一つの大きな精神ありて、之が思想に由て思想し、之が理に由て立ち、之が意に由て動くか故ならずんばあるべからず。ケールドは一個一個の意識は其の根底に一般的意識の存するが故に存すとすに非ずんば解すべからずと言ひしが、必ずしも個人の靈は一般的大靈の局部的意識にはあらざるべきも、兎に角、個人の靈は其の根底に一般を包みて之を統一せる大靈あつて始めて存すべきなり。吾人は自らの靈が斯くの如き絶大の靈の中に根を下し葉を出たして、始めて靈的呼吸をなしつゝあることを感ず。吾人の個人的の靈は神の大靈の中に在て生き動き存らへつゝあるなり。舊約の聖者が神もし息を引き去り玉はゞ、凡ての物立ちころに死せんと言ひしは實に眞と覺ゆるなり。

吾人は人の靈は他に由て存し得べきものなること、並びに靈界に關係あり一致あり、必ず此の全體を統一するものゝ存することを思はざるべからざる點より神實に吾人の靈の根底に在り、靈界を統一せる一の思想の思想者あることを

信ずるなり。

靈界は斯くて人と神との人格に由て造れる世界なり。人のみの住む所ならは尙限りあり。然れども絶大の神と相待ちて造れるからには、神と人と相合つて此に無限界を成せり。人は實に其の靈に由て此の無限界に住めるものなり。此の無限界より有限界に顔を出たせるなり。人が自ら物質以上の世界の住者たるを知り、神を見出だして之と共に住むは、自ら無限界の人となれるにて幸福甚だしと謂はざるべからず。彼が神を見出したる時は、實に別世界を見出だしたるなり。其までは五尺の身、此の物質の世界にのみ在りしに、其よりは物質世界の彼方に靈界の無限に亘たるを見出だし、自ら靈に於て此に住めるを見出だせるなり。されば其の關係する所も又無限なるを知るべし。曾ては自己の爲すことが單に外部物質の世界に影響を及ぼすを見たり。善をなしても惡をなしても、其の及ぶ所は物質界の境の内のみ。然も神を見出だしてよりは、其の爲す所は波を起して物界を超えて靈界に響き入り、神の靈の中に大なる印象刺激を與ふるを見る。或は物界や或は人間界にさへ、殆ど全く何等の利害を與へざる

事も神の心の中には、至て痛切なる波瀾を起さしむることもなしとはせず。凡ての標準は此に於て全く異らざるを得ざるなり。

其の第二には吾人に至上を仰慕熱望する性あるに由て神の存在を證す。人類は一樣に向上心を有せり。人類の靈は上を指して羽叩きせり。吾人は動物より進化したるものとして、吾人の肉體は此世界の物質と同種族にして、其の欲求する所も亦禽獸と同じき所あれど、吾人は靈者として物質を超越し、物質の力より自由のものとなりて立てり。吾人は進化の階を登り盡して、其の絶頂に立ち、今や天に足を踏み入れんとせり。吾人の片足は物界に在りて片足は靈界に在り。吾人の背後には物質より系統を引き、動物より血統を引ける尾骸骨存すれども、吾人の面は無限界に向ひ、天に接せり。而して吾人の此の特性は吾人に向上心を與へ、人は常に高さことより更に高さ事を思ひ、終に至上のものを思はずんば已まざるなり。此の至上は即ち何れの方面より思想しても終に神に歸着す。人は至上のものとして神を思ひ之を慕ひ之に向つて上らんとして已む

こと能はざる也。吾人に此の至上を思ふ心あるは、即ち至上者たる神あるに由るものなり。

其の理由として先づ吾人に至上を思ふ心ある上は必ず之に應ずるの實在なかるべからずと云ふことを思はざるべからず。凡て此の世界は正直なる世界なり。世界の事物は相関係適合して毫も吾人を欺くことなし。吾人に目のあるは、此の目に由て視らるゝ所の色あるか故なり。吾人に理性のあるは、此の理性に由て考へらるゝ所の理が吾人の外に存するが故なり。若し外に色なくば吾人には初より目なかりしならん。若し外に理なるものなくば、吾人には初より理性なかりしならん。よし之あるも有名なるマンモス洞穴の魚の目を失へる如く、之に對照する目的物なきが故に其用なく終に萎微して失せ了りしならん。此れ進化論的に考へても分明なることなり。然るに吾人には一樣に至上を慕ふ心あり。幻の影を追ひ、浮雲の榮華にあこがるゝ者をば、人は之を醉生夢死の徒と呼び、此等の不定無常の事物の上に、今一層常住なるものを求めんとの心切なり。或は平凡なるもの野俗なるものゝ以上に善を慕ひ義を求めつゝ、一層また一層高

きものを求むるに至り、終に神に於て終局の至大なるもの、自己の靈を底まで
飽かすものを見出だし、之を自己に得んと勉む。人の心は此まで上り極まらず
してはある能はざるなり。是れ萬人億人の情なり。人類普遍の要求なり。或は
人に由て此の情は非常に強きものもあるべし。或はさほどになき者もあるべし。
此は其の境遇や遺傳や自己の心かけによりて生じたる差のみ。中には全く斯か
る要求を感ぜぬ人もあらんとはいへども、此は千人中の一人二人にして、人な
みならぬもの、有躰に言へば精神的の不具者のみ。大抵の人は神を慕ふ心を有
す。或は道德の發達したる人は、善を慕ひ義を求むる心より、至善至義なる人
格者を目的として慕ひ寄らんとするなるべし。或は形而上學的に思辨する人は、
萬物の本源、宇宙の根底に於て絶對者を認め、之に思想を歸着せしめんとすべ
し。或は初より宗教的の人は、直接に神を認め、之を崇め之を愛すべし。何れ
も至上のものを求むるに相違なきなり。斯かる要求の鈍り居りて、平素は唯だ
漠然と思想し、一向に心に統一を有せざる人と雖も、或は危難の際、死生の間
を出入する時、若くは一身一國の大事に接着し、自己を反省して、平素自己を

圍繞し自己の人格を埋没せる諸の關係より自己を引き離し、獨り自己を赤裸と
して歷々と己れ自身を意識する時に於ては、此の至上を思ひ、或は之を崇め之
に依るの心勃然として起り來るが常なり。斯くの如く人類には普遍的に神を慕
ふの心あるに、正直なる此の天地として、之に應ずる實在の無き理由あるべか
らず。若し實在なくば天地は吾人を欺くものにて、吾人の理性の如きも決して
信ずること能はざるに至るなり。特に至高を慕ふ心は又人情の至高なるものな
り。之に應ずるの實在なく、之を絶望に終らしむる理あらんや。確に吾人々類
一般の切なる宗教的要求に應ずる神あるや疑ふべからず。吾人は吾人の人類的
要求より考へ、必ず之に應ずる神あるを信ず。

次には吾人に高尚至美の願望の起り之に由て人格成長し社會發達し人類進歩
するは、確に其の源に神の存するが故なりと信ず。凡て人の意志は自由なるも
のなれども、全然獨立して如何様にとも其場／＼にて自ら向ひ行くといふもの
にはあらず。意志は物質にては決定せられず。物質の必至の力に由て全然左右
せらるゝものにはあらねど、意志の源たる品性のためには決定せらる。品性よ

り獨立せる意志なきが故に、品性に決定せられぬ意志なし。善人は心の善き庫より善を出だし、悪人は心の悪しき庫より惡を出だす。羨黎より無果花を取れず、荆棘より葡萄を取れぬなり。然るに人類には至美至高なる願望ありて、常に之を達せんとして盡力せり。其の源は何所より來るか。無論人の品性中に存するなり。然れども斯くの如き品性が人類に存するといふは不思議なり。人類は動物より進化せりと言はる。動物中にも多少人の道德といふもの、萌芽は存すと雖も、人の如き道德の觀念、至上の理想の如きもの固より有ることなし。然るに人類に於て斯くの如き強烈なる願望存するは、動物より遺傳せしものに非ずして、此の物質の世界よりは無限に高さ所より來りて人類の心に入りしとすべからずや。若し動物にありし道德の萌芽が、人に至て進歩し高潔なる觀念理想となりしとしても、然かく人類に至て高く湧上りし觀念理想は、其の源を高さ所に發したるものとすべからずや。即ち源高くして其が低く流れて動物界の中を通じ、人類の靈に於て再び高く噴出したるものにあらずや。人類に最高の觀念理想あるは、其が實に天より發したるが故に、また人に於て天にまで上

らんとする故にて、宛がら淀橋貯水池より鐵管にて東京市中に引きたる水が、噴泉に於て高く上るが如きものなり。

無論人類の今日は既に動物に非ず。動物より進歩し、其の單純なる物質的存在者たる地位より脱化せり。人は自身に由て或意味に於て事物を創造し得るに至れり。然れども精神の如きは關係的のものたるが故に、全然獨立して事物を創造し得ず。夢に見る所と雖も、全く自己の經驗と無關係なることは在らざるなり。當今の心理學は人に無意識境ありて、此の無意識境は絶えず他のものより刺激せられ感化せられつゝあり、其れが何等かの機會によりて終に意識境に入り來り、此に心狀の變化を來たすと説けり。奇想天外より落ちし如く思はるゝことも、實は自己の無意識境には長き間の昵近たりしなり。人類の精神と其の經驗とは斯くの如き性質のものなるに、人には或る道德上の大奮發あり。曾て人類の世界の習慣ともなり居らず、又實利の上より見れば敢て左ほどの必要もなきに、人の心には俄然として至高の念入り來り、之に感激して起つて事に當ることあり。吾人の日常の生活にも斯かる事多し。特に年若き時などは、精

神の向上抑ふるも抑へ難く、志士は容易く一身を國家のために抛ち、聖者は其の全自己を神と人とに献く。是れ實に通常人にも幾分味はるゝことなり。斯かる高尚純潔の者は之を自己と同じ高きなる人類界の所産としては餘りに不釣り合ひなり。利己の氣瀾蔓し、獸的貪婪の充溢せる世界が、斯かる精神を産み出ださんことは頗る困難なり。之を吾人を圍める神の靈の中の志氣動いて、吾人の靈の無意識境は先づ之に動かされ次て其の者わが意識の中に入り來り、抑ふ可からざるものとなるとする方頗る理に合へりとせずや。若し吾人平凡者の奮發立志精進が之を説明するに力弱しとせば、彼の大道徳者等の一代を思ふべきなり。プラトンの前にプラトリーなく孔子の前に孔子なし。基督に於て特に然り。道徳の理想や、道徳の志氣が、彼等の心に起りたるは、人類世界の海より流れ入りしに非ずして、實に天より彼等の心に閃めき落ちし故ならずや。彼等に由り人類界には其れまで有せざりし道徳行爲及び道徳理想が始まりたるなり。斯くの如きは明に靈界中人類以上なる天より、神の心より、此の大精神の落ち來りたるを示すものなり。

宗教心の如きに至ては更に多く其の神より來れるを示す。吾人が純粹なる宗教心を起すは、此の世の力に動かざるゝとして解すべからず。宗教心は物質の以上に靈を認むるなり。有限の上に無限を認むるなり。關係的のものゝ上に至上至高のものを認むるなり。之を認めて之を慕ひ、之を思ひ之と合一せんとす。此の心抑も何所より出づべきか。動物の子孫たるものゝ中より出でしとしては餘りに不思議なり。否確に人類自身の精神より出でしには相違なきも、之も人類の精神が其の源を至高なる所に發するが故とせざるを得ず。意識は神より發するが故に、無機物に於て休息し、動物に於て眠り、人類の靈に於て醒めたるなり。醒めたる意識は自らを意識す。人は自己を意識すると共に、必ず自己の源たる神を意識するなり。デカートが神あるは自己あると同時に意識せらるといふやうの事を言ひしは、此の點に於て眞なり。實に意識は人類に於て頂迄にまで發達し、自己を意識すると共に、自己の本源たる神を意識せり。神意識は人類の歴史に溪流の如く起り居れるなり。特に希仰來人の歴史の如きは、神意識發達の正則の順序を示せり。アブラハムに入りモーセに入り預言者に於

て發達し終に基督に至て其の意識は全く神意識を以て蔽はれたり。誰か此等の
人々の神意識を見て、平面低き人間の世界より攝收せられたりとするぞ。特に
神の子耶蘇の神意識を見て、何人か天に在す父の此に動けるを認めぬ者ぞ。吾
人に宗教心の興起あり激揚あるは確に神の靈の吾人を包んで、吾人を刺激せる
を證す。彼の信仰の急に熱くなり、個人も教會も一變して神の靈に充たさるゝ
如き事あるも、斯かる理に由てなりと信ず。吾人は決して一般のリバイバルと
か個人の大激揚とかの凡てを一時の狂熱のみとして排斥したることを敢てする
能はざるなり。

吾人は斯くの如く、人類に神を求むるの心の一般的にして痛切なるは神の必
ず存するの證なりとし、又人類に道德的宗教的向上のあるを以て遠きか近きか
神に淵源すとなし、此に神の存在するを信ず。

第三には吾人に宗教的經驗あるに由て神の存在することを信ず。吾人には至
高なる神を求むるの心あるのみならず。又直接に神に觸るゝことを經驗す。或

る種類の心質の人、又或る特殊の場合に於ては、神に觸るゝ經驗は宛がら五官
の經驗と異らぬ如きことあり。網島梁川氏の見神の經驗や、パウロの基督を見
たる經驗、或はジェームス博士の「宗教經驗の種類」中に擧げたる神の現在の
經驗に關する多數の實例の如きは其なり。然れども之ほどに著しく、又之ほど
に實驗的ならずとも、普通の宗教者は其れ／＼之に同じき經驗を味ひつゝあり。
吾人が誠を以て祈るとき、吾人は唯だ空を撃つが如き心地せず、神の殿かなる
現在を覺ゆるなり。此等は無信仰者に言はせなば様々の理由を以て其の據るに
足らぬを論じもすべし。然れども肉と靈とは其れほど縁の遠きものに非ず。肉
は靈を動かし靈は肉を動かし、其の交渉感化互に密なるものなれば、靈の存在
が吾人の五官に一種常ならぬ感覺を起さしむることも全くなしとは言ふべから
ず。

然れども斯かる五官の經驗に幾分にも依れることを全く證とせずとしても、
吾人は尙多く神あつて始めて起り得る所の經驗をなしつゝあり。前に言ふ如き
神意識が次第に吾人の裏に明白確實になり行く事實の如き、又之が人類の歴史

中に發達し來りし途行の如き、是れ實に純然たる精神的の宗教經驗なり。アウグスティヌスの『告白録』を見れば、肉慾を以て充ち、知識を以て填まりたる彼の精神の中に、柔かき一道の神意識生し、初に於ては壓迫せられ蹂躪せられ居りしもの、或は母の涙、友人の死等に由て促され、次第に發展して、終に明白なる覺醒に及び、心狀の一轉換を來たし、先の放縱なる青年學者は、高潔なる聖者となるに至れり。バンヤンの自叙傳『溢るゝ恵』また同じ經驗の徑路を示せり。己が意のままに行動せし彼は、不圖神の事を意に介するに至りしも、尙此世に屬ける慾の強くして心を神に専らにする能はず、然も友人の關係等によつて神の意識は彼の胸臆を壓倒し來り、見るもの聞くもの一として彼の悔改を促さざるなく、終に大煩悶の末、何故とはなしに豁然として神の恵みの己れにも滴るばかりなるを感じ、此に全く神に依頼して平和を得るに至りたり。其他古今の聖者篤信家の例を引かば、此の種の經驗は擧げて數ふべからざらん。彼等は其の精神が神に動かされ、神の力に由て新生命に導かれしことを明に經驗せしなり。吾人また此の種の經驗を有す。余輩の如きは少時より教育の結果とし

て全く無神論者なりき。然も基督教に接して、吾人の接める所は物質の限りある世界のみならず、此の物質の世界の彼方に靈の世界の無限に亘れるを知りたり。物質のみ實在せず靈の實在ありて、神は吾人と共に在すことを知りたり。新しき理想は明に示され、人生の歸趣は定かに顯はされたり。斯かる變化は唯だ神を信じ、神あるに由て始めて起り、神あるに由て其の結果の永續すること信せり。これ凡ての基督信徒の經驗する所なり。尙基督信徒外の人と雖も、信徒を傍より觀察して之に認むべきは其の品性の變化ならん。確に神を信じて其の人の精神潔まり始め、知らずくの内にも別人となることあり。舊より善良なる人物も、其の品性の根底の異なる基礎に立ちて善良の性質一變するに至る。此等も神を信ずるに由りて存する經驗なり。其他神に愛せらるゝ經驗神に隨らるゝ經驗、神に導かるゝ經驗、神に赦さるゝ經驗、神に祈を聽るゝ經驗等直接のものより、大事に接して恐れず惑はず、死生の間に處して泰然自若たるに至るまで、何れも神在るを信じて存する所の經驗なりとす。

斯くの如く人は神の存在することを經驗し、又神あるに由て存する經驗を有

す。之を如何に解釋すべきか。或は言はん、其等の経験は主観的内密的のものなるが故に、少しも神の存在の證として頼むべからずと。固より此等の経験のみを以て神の存在の證とはする能はず。然れども他の證明と相待たば、此は有力なる一證なり。個人の経験は頼み難きものなきに非ず。然れども其の経験が現實の世界に確實なる結果を生ずるとき、又其の経験が人類一般の経験なるときは、之を主観的のものなればとて、證明の根據弱しとはすべからず。若し斯かる種類の精神的経験を疑はば、人類の思想知識は殆ど信すべからずとせられしるに至らん。然るに宗教経験の多くは人類に普遍のものにして、又其の結果は現實の世界に種々の確實なる事實となり居れり。之を疑ふは之を信するよりも不道理なりと思はる。之を類推するに此に青年あり、或る高潔なる人物の許に在つて多年薪水の勞を取りし後、其の郷里に歸り、父母友人に證し、て、我はもと品性陋劣の匹夫なりしが、先生に接して、其の高風に薰化せられ、其の清徳の次第に身に染むを覚え、我が精神は此に生れ更りし如くなれりと言はんに、若し其の行狀言語に於て確に之を證し居らんには、父母友人たるもの、誰

か之に答へて、其は汝が主観的の思ひ做しなりと言はんや。彼は其の青年の容貌も音聲も凡て舊のまゝなるを見れども、見えざる所に確に大變化の起りしことを信せずんば已まざるべし。此の變化は青年の精神的経験に屬すれども、而も確なる一の事實なり。神に付ての経験また見えざる事實なり。世人や、もすれば物質のことのみを事實と心得、精神のことは事實ならぬ如く思惟す。甚だしき誤謬なり。現今の諸學者は齊しく「経験は事實なり」と唱ふ。神を信する経験も事實なり。神の活動を經驗する経験も事實なり。而も大なる結果を現實の世界に及ぼす事實なり。此の事實あるに、之を起せる神なしと言ふべけんや。神より外に此の事實を起し得るほどのものは存せざるなり。吾人は人類の宗教経験より神の存在を證す。

人は天性の要求より神を信じ、決して信すべき理由を認めたる後に之を信じたるには非ざれども、然も吾人が今日神を信する理由を求めば、以上の如きものあるを發見するなり。吾人は自己等の神を信するは、以上の如き理由あるを以て、決して迷妄にもあらず、誤謬にも非ず、吾人の信仰は十分の根據あるこ

とを信ずるものなり。吾人は斯くて思想必然の到達として神を思ひ、宇宙の現象に由て神の存在を推論し、又精神の存在及び活動を證として神あるを信ず。

三、神と世界

吾人は宇宙内の諸原因の以上に終局の大原因なかるべからずとし、宇宙現象が吾人の理性を以て解するを得るは、吾人の理性と同種の理性に依て存在するが故ならざるべからずとし、又宇宙に目的的存在する以上は、此に目的を立つる意識存在せざるべからずとし、之を人格的靈者たる神の存在に歸納し、之と共に吾人が多くの同類と相集まつて物界以上に靈界を作り、互に相關係して孤立すべからず、共に齊一なる理や性を有するは、此の靈界が統一せられ居れるを證すとし、又吾人に至上を仰ぎ理想を慕ひ神を求むる心あるは、一は其自身神あるが故にして、一は神の活動刺激に由るとなし、最後に吾人が神あるを経験するは、神あるが故なりとして、此に人格的の靈者たる神の存在を論斷したり。

斯くの如く考へ來れば、神が宇宙の本源、従つて吾人の本源たることは、言

ふまでもなく吾人に明なり。何となれば吾人の推論は、宇宙現象や、吾人人格の決して自立自存せざるを認め、其の奥に尙其の本源の存すべきを考へ、而して此に確に之あるを明にしたるものなればなり。然れども本源といへばとて、宇宙や吾人の唯だ必然的に發出したる源といふを意味せず。吾人は如何にしても其の完全至極なる意識たることを思はざるを得ず。完全至極なる意識とは、凡ての經驗を統一し、又自己より目的を立て、活動する所の意識これなり。神もし斯くの如き人格者ならずとせば、宇宙の事決して解すべからざるなり。吾人が先に考へたる所は、悉く斯くの如き人格の神の存在に歸着す。

さて人格的の神存在するとすれば、神と宇宙及び吾人との關係は如何。神は宇宙及び吾人の本源なりといへば、大體に於て此の問題は明なるが如しと雖も、之に付ては古來様々の觀念あり。之に由て宗教生活に千里の差を來たす。故に此に今日の人々の裡に存する此の觀念に付て聊か論ぜんに、

初めに一言すべきは多神的の觀念なり。人に似たる神多數存在して、吾人の運命を支配すと信ずるもの是れなり。此は既に教育あり、若くは思想深き人々

に對しては、殆ど一言の論辯を待たずして明なることゝ信ずれども、聊か其の要を認めたる理由なきに非ず。此年の夏駿河の海岸に休養中、土地の基督教會教師某氏、一日或る小學校長を訪ひて道を説きしに、校長は、己れは多神教を以て小兒を教導する方却て面白しと思ふと言へりと余に物語りしことあり。これ一小學教師の説なれども、世の中には尙多神教を信ずる人もあるべく、又自ら之を信ぜざれど多神教の非理なる所以を説明するに困しめる人もあるべく、乃至は己れ信ぜざれど政策として、多神教を以て民心を教化せんと思へる人もあるべし。然れども最後の人の如きは由々しき誤謬の見を抱くものなり。若し不道理の教ならば、如何に人力を以て信仰を強ふるとも、決して長く人民の心に之を保たしむる能はず、却て一世をして偽善者たらしむ。若し成功せば人類知識の發達を害し、人性を賊し、延て國家社會を危ふくするに至るべし。不道理のものならば、たとひ一時は經國の道具に用ひ得るとも、斷然之を廢するが眞に遠慮あり熱誠ある人の態度なり。抑も多神教の不理なるは、之を以てしては、宇宙全く解釋出來ざるに由て明なり。宇宙の解すべきは、獨立せる多くの

心の作用の集合ならで、一の心の作用なるが故なり。宇宙全體に目的ありと見ゆるは、全體の上に一の心が在て目的を立つるが故と見るの外なし。宇宙の終局の原因は多數なるべからず。一つにてこそ終局原因なれ、多數の神々ありたらんには、天地は支離滅裂ならん。若し多數の神々ありても、尙宇宙に統一あらば、更に其の神々の以上に一大主君なかるべからざるに至る。故に多神者も次第に發達すれば、大統一者を思想するに至るなり。されば多神教は人類宗教思想の幼稚なるより生じたるものなり。人類の幼稚なる時は、世界は其心に支離滅裂なる事物の集合なりき。彼等は統一といふことを知らざりき。個々の現象を個々の力に歸したるより多神教起りしなり。然れども宇宙は一の理にて貫く、根底は一の心ならざるべからずとするに至れば、多神の思想は朝の霧の如く消えざるを得ざるなり。

多神論は多少の思想あるものゝ初より顧みざるものとして之を論外に置くとして、神と世界との關係に付ては此に二つの見方屹然として對立せり。甲は超越神論の見方にして、乙は汎神論の見方なり。兩者互に其の根據を異にし、其

の説の全組織を異にせり。第一の超越神論は神の存在を認め、神の人格者たるをも認む。然れども神の宇宙を造りしは、宛がら大工が家を建てたる如く、時計師の時計を造りしが如くにて、今は宇宙と全く離れて立ち、之を自然に委して、毫も之に干渉もせず交渉もせず、天啓といふものも存することなしと主張する論なり。ペーコンやホップスの哲學は此論の先驅をなし十八世紀に入りて愈よ英國にて繁昌し、ボーリングブローク卿に至りて、極端に達し、急に衰微せし時、ウエスレー派の基督教信仰復活運動起りて終に屏息せり。此論も確に一種の神と宇宙との関係の見方なり。然れども此は思想緻密なる者の到底容るゝ能はざる基礎に立てり。此論に従へば實在は全く眞二つに打ち割られあり。一方には神が立ち、一方に世界立てり。此の間は全く交渉なし。此を以てか二元論となる。よしや大初は宇宙も神の造りしものとしても、其後に於ては獨立して相對立せるが故に、確に二元論なり。されば二元論の有する凡ての矛盾と弱點とを有せざるを得ず。即ち斯くの如く、神と宇宙とが相對立して、各々獨立的に進行するとせば、宇宙の事は又解すべからざるなり。形而上的に考へて、

然る事は有り得べからざるなり。尙又此の論に従へば、論理上多くの難問を生ず。其の一は斯くの如く神と天地と分離して在る以上は、人は到底神を知り得べからずとするに至る是れなり。超越神論が終にヒュームの懷疑説にまで到達せしは此故なり。其二は害惡の實在を看過せんとするに至ることなり。此の論者は好んで世界の完全なるを説く。マシュー、チンダルの如きは其の標本なり。蓋し神すでに此の世界に干渉せずとすれば、此世界は初より完全に造られしとせざるべからざればなり。然れども此は世界の事實に對して故らに眼を閉ぢたるもの。世界には害惡實在するに相違なきが故に、彼等の如く神の全く世界より離れたるを信ずるときは、自己の境遇事情は、此れ自然的必至のものにして、其の内に何等精神的の意義あるに非ず、又人間の願望は勿論、神の意も之を如何ともする能はざるを感じ、宿命論者となり厭世者となるに至る。されば神と宇宙及び人類の關係に關する超越神論の見方は、極めて不道理にして又人生に有害なる者なり。

然らば乙の方なる汎神論の見方は如何。凡ては神なり神は凡てなりといふ論

を汎神論いふ。此の論は遠く印度の古代の宗教家や、希臘の古代の學者より唱へられ、支那にも古より在りたり。其の論理の整へる、其の人心を魅するの力ある、逆も超越神論など、同年同日の談に非ざるなり。近世にて汎神論の始祖とも稱すべきをスピノーザとなす。スピノーザの説に従へば、自立自存のものあり。之を觀念するには毫も他の物の觀念に依らずして、其自身のみを觀念し得、これを實體と云ふ。實體は唯一にして即ち神と同一なり。此は無限にして何とも形容すべからず。之を形容するは、之を限定する所以なるを以て、無限となさざるべし。而して此の實體をば其れ自身を思議すべからず、其の屬性をのみ思議すべし。屬性は實體自身が有するものには非ず、之を思議する吾人が實體に被するに過ぎず。吾人は此の屬性を「思想」(精神界)と「延長」(物質界)の二つと考ふ。二つの屬性の原が神の中に在るに非らず、唯だ吾人は此の二屬性ありと思ふのみ。此の二屬性は互に獨立し、毫も一方が他方の原因とならず。實は一の實體の両面なり。此の両面ある實體に無數の様式(相)あり。個々の事物は此の様式なり。様式は海の面の波の如く、神を離れては存せず、神の

中に生起す。凡ての物は皆な様式として、一の實體の中に必至的に生起す。實體即ち神は決して意志なし。自ら目的を立て、行動せず。凡ての相は其の性の必然より出て来る。身軀も精神も別物にはあらず、共に一實體の相なり。善も悪も根本に差別なし。神の中には悪なし。若し罪にして實在せば、神は其の作者なり。元來善とは吾人が自己に有益なりと知るもの、悪とは善を得るに妨げとなると知るもの、謂なり。人間の一個人も勿論神の實體の相に外ならず。故に其の意志も他定的なり。人が自由なりと思ふは自己が他定せられ居れるを意識せざる故なり。

スピノーザの説は汎神論の最も徹底的なるもの、最も思ひ切たるものにて、其の説は物質的なれども、却て後世の融合を事とし、人格の觀念等を混合せる唯心論的汎神論よりも、主張截然たるを見る。スピノーザの説によれば、神は全然存在といふもの以外何物にもあらず、勿論人格者に非ざるなり。人格とは前に言ひし如く、自己の經驗を意識し、又自らより意志を立つる所のものなり。スピノーザの實體は人間箇々の意識より以外何等意識なく、凡ての事物は其の

中に必至的に生起するなり。故に此の實躰は人格に非ず。然れども吾人は前に宇宙の根本たるものは人格者ならざるべからざることを認めたり。之を人格者とするに非ずんば宇宙は解釋出來ざるなり。スピノーザが無意識の實躰を宇宙の根本に置きしは、此を以て順る人の理性に不満足を與へざるを得ざるなり。論理に於てスピノーザの汎神論に此の弱點あると共に、之が實際の信仰及び道徳に及ぼす影響は頗る寒心すべきものあり。人間の個人を唯だ實躰の様式に過ぎず、其の靈は實躰の理性の生起に外ならずとするが故に、人は自己の人格の意義を失ひ、他人の人格をも輕んじ、權利とか義務とかいふことを重んぜざるに至る。又自己の意志はみな他定せられて自由なしと云ふが故に、善も惡も自己のなす所に非ずと考へ、道徳の責任を感ぜざるに至る。野狐禪の徒に敗徳度し難き輩の多きと同じ結果に陥らざればあらざるなり。

汎神論が人の經驗と最も反對し、其の實際生活に於ける適用の妨礙となりつゝある最重要點は人格の觀念と兩立せざることなり。此を以て現代に近づくに従ひ、汎神論的哲學者も人格の觀念と矛盾せざらんと勉め、近年に至て益々其

の勢を加へ來れり。此の傾向は既にヘーゲルに於て存す。ヘーゲルには神はもはや單なる存在には非ず、單なる實躰にはあらず、靈なり。彼は之を絕對の思想となしぬ。然り思想者と言はず思想といへり。此の思想は永遠的に自己を實現して發展す。絕對は自己を實現するため自己を分ちて客觀的自己を立て、時間空間と結合して自己を限定し、自然界となる。而して一旦かく分裂せる自己は再び自己に歸り、人類に於て自意識の靈となれりと論ぜり。スピノーザが世界の現象を大平等なる實躰の相なり差別なりとしたるに反して、ヘーゲルが世界を思想の發展とし、此の發展には始終理が根本となり法則となり、又目的となり居れるを説き、神は自己を客觀に置くと論じたるは、此れ即ち人格の神の觀念の方に一步を踏み出だしたるものなり。されどヘーゲルの哲學は、宇宙の發展を單に思想的論理的のものとし、明白に人格の觀念を容れざりしが故に、直ちに甚だ弱きことを感ぜらる。彼について、絕對の原則は理にはあらず、意志なり、然も盲目なる必至的の意志なりとするシヨールペンハウエルを出だすに至れり。確に宇宙を以て思想の合理的發展とのみ見るは、餘りに經驗を無視し

たる感あるを免れざるなり。勿論ショーペンハウエルの説は極端にして、次て出でし學者等之を修正し、理と意とを融和するに至りしが、ヘーゲル哲學の弱點は兎に角補れざるべからざるものなるが故に、所謂新カント派又は新ヘーゲル派と稱するもの現はれ、宇宙は關係せる全體なり。之には統一あり。統一ありとするは意識の作用なり。宇宙の統一は此の統一を意識する絶對意識、永久意識あるが故なりと論ぜり。此に於てか絶對は神なるのみならず、人格的の神とせらるゝに至りしなり。

斯くの如く神と世界との關係に付ては、超越神的に見ても不道理なり、汎神論的に見ても不都合あり。然らば如何に見るべきか。此れ今日の思想の難問題なり。超越的に見れば人格の觀念を保ち得る代りに最も明白に道理に合はず、汎神的に見れば、論理は立つ代りに人格の觀念を犠牲とす。然れども吾人は前に言ひたる如く、宇宙は物質界と精神界の總計なり。神は無限なる精神にして、全宇宙の尙ほ倚る所ろたり。宇宙を一コスモスに統一せるものなり。彼は宇宙に内在すれども、亦宇宙を超越せりと信ず。故にクラークの説明せし如く、之

を木に於ける生命の如きものと見ずして、人の身體に於ける心の關係の如きものと見るべしと言ふを以て最も眞に近きものと思ふ。

然れども尙難問あり。宇宙を物質のみとすれば、神と之との關係は身體と心の如しとするを得んも、宇宙には人の人格あり。之と神との關係は如何。ヘーゲルの系を引ける學者は、人の精神は神が人に在て意識の體系を作りたるもののみ。故に其根底は一般的意識たる神なり。吾人の一個人は、神の一般意識の上に、暫時的に現はれたる部分的意識なりと言へり。されど此は人の經驗と合はず、人は自己を一般意識の海の上に現はれたる波の如く思ふ能はず、自己は自己に於て全體系なりと思へり。且つ此の派の説にては、道德責任の感を失ふこと依然たるを以て、近く十年ほどの間に、此の久しく勢力ありし哲學説に反對して、人の人格の全きことを主張する一派現はれたり。尙勢も盛ならず、其の説も定まらざれど、兎に角人心の要求は人の人格を神の假現なりと見る説に満足する能はざるを證せり。吾人は吾人の人格は其自身にて全系をなせるを信ず。然れども又神を以て凡ての人の人格の總計とも、宇宙全體の總計とも思ふ

能はず。神も一の人格なり。神は宇宙に充在し、又超越せるものにてありながら、神も人格、吾人も人格としては、道理合はぬが如し。神と吾人の人格と相對的に存在すれば、神は有限にして、宇宙は多元なり。神宇宙に充在するが故に、吾人の人格神の中に在りとするれば、吾人の人格を神の化現とするか、神を單に宇宙の總計とせざるを得ざるやに思はる。此れ哲學の惑ひ、又哲學者的神學者の惑ふ所なり。唯だ吾人は思ふ。神は宇宙にて盡きず、宇宙よりも大なり然も宇宙に充在す。吾人の人格も確に神の中に在るに相違なし。吾人の人格は其の根底は確に神の上にある。然れども人格たる吾人と對しては、神は又人格なり。神の人格は人に對して神の自己を意識する意識の躰系なり。人の人格は神の中にありて、神を客觀に意識する人格なり。此の人の人格は其自身にて全系をなし、永久に消失せざるべし。神を永久に客觀すべし。故に罪は此の人の人格が自ら作れるものにして、自ら神に反して意志する間は、罪は存在すべく改めて神と合して意志するに至て罪は消失滅絶すべし。然れども此の人格は尙神の中に在り。神の人格は吾人と對立すれども、絶大なり。吾神の全體は吾人

が神の人格と思議せるものよりも無限に大ならざるべからず。吾人が神の人格と思ふものは相對的にして有限なる如くなれども、神自身、神全體、神の神格、即ち吾人の思想に餘る神の人格それ自身は、無限にして宇宙よりも大、吾人を包容せるものならざるべからずと。

吾人は此故に神が吾人の内にも在りて、常に吾人に活動せるを信ず。吾人が自己の内部を省みるとき、己れの人格の背後に神あり、己れを空うして透明とすれば神を見ることを得るを感ず。

第三章 神の知識

- 一、神は知り得べし
- 二、神の知識の發達(神の知識は普遍的なり——天才の出現——猶太民族——預言者——基督)
- 三、神の顯現の進行現啓は活動なり——現啓の様式——人格に由れる顯現——耶穌基督に於ける顯現)
- 四、神の知識と聖書神の顯現の蓄存——顯現の表號としての聖書——インスピレーション説——聖書の價值)

人格的精神たる神存在す。故に人の方よりは之を知るの知識あり、神の方よりは自らを顯はすの活動あり。かくて其の關係明かとなりて、宗教生活といふもの現はるゝなり。されば宗教は形式的に神存在するを思想するのみならず、其の内性を知り、かくて之との關係を整へざるべからず。故に宗教に於ては先づ神の知識といふことあり。又之あるを要す。

一、神は知り得べし

吾人は人格的の靈者たる神の必ず存在することを確にしたり。而して之を確

にし得るは、吾人が神を知り得るが故、又神が吾人より知られ得るが故なり。吾人が前章に擧げし所の神の存在に關する諸議論の如きは、神が吾人の知識と交渉する所あるが故に起るものにて、既に此等の議論を立て得る以上は、明かに神は吾人の知識の對象たるものなるを證するなり。何となれば神もし吾人の知識に超絶して、到底知るべからざるものならば、吾人が百千の議論を重ねるとも、決して之が存在を證明する能はざるべければなり。

然れば彼の絶對的不可知論の如きは、其の成立の理由を見ること能はざるものとす。絶對的不可知論とは、吾人々類の知り得べきものは、吾人の感覺する所のものに限り、之を超絶するものに至ては絶對的に知ること能はず、神の如き超越的のものは、到底吾人の知ること能はざるものなりと唱ふる議論なり。此の説はヘルバート、スペンサーに由て代表せらるゝものなり。スペンサーは曰く、此の宇宙に力として顯はれたるものは、吾人の全然思議すること能はざるものなりと。然れどもスペンサーの此の短き斷言は、既に其中に矛盾を有せり。若し全く思議すべからざるものならば、其れが力として顯はれたるを知ら

ん理なし。既に力として顯はれたるを知る以上は全然知られ得ざるものには非ざるなり。スペンサーは絶對的不可知論を唱へつゝも、其の書中到る所に、之を永遠とか絶對とか無限とか力とか勢力とか呼び、又此の力發展して宇宙をなし、終に人の靈魂となりて湧き出てたりと言へり。此れ實に明かに此の力は吾人の幾分か知り得べきものなるを證明するものに非ずや。吾人は感覺するより以上のものも知り得る能力を有することは前に論じたる所の如し。

此の種の不可知説は最も多く科學者に由て唱道せられたり、不可知説の名が既にハックスレーの造れる所なり。蓋し科學者は實驗を重ねざるを以て、實際五官を以て經驗する能はざるものをば、悉く其の存在を否定するか、否定せざるまでも證明すべからずとするは、勢ひ已み難きものならん。然れども五官を以て經驗する以上に精神の經驗あり。有形の事實と共に無形の事實あり。よしや解剖刀の尖に現はれずとも、顯微鏡の面に映せずとも、其は確なる實在なり。吾人は論理により思辨により將た信仰により靈的經驗によりて之を知り得るなり。科學者の如きも不可知論を唱へつゝ、實はノスタクヌ(知識徒)よりも一層大

膽無謀なる知識を抱けるなり。例へばプロテイル(最原微物)の存在を唱へ、其の開展發達の順序を叙するが如き、宛がら見て來し如く述べれども、實は全然論者の腦中に創造せる物にして、同じ腦中に仕組みたる筋書に外ならざるに非ずや。若し物質に付て斯くの如き推理思辨をなして差支へなしとせば、其よりも廣き範圍より集めたる、其よりも多種なる材料によりて、推論することは決して不道理にはあらず、其の推論に由て得らるゝ結論は決して架空のものに非ず。之を吾人の知り得る目的物として毫も危ふきを感じざるなり。

斯く絶對的不可知論は成り立つべからずとして、此に尙他の一種の不可知論あり。吾人は有限なり。絶對もしくは神は無限なり。有限を以て無限を知るべからずと言ふものは是れなり。此は實に道理あることなり。吾人の神を知るは、あたかも群盲の大象を議するが如き感なきにしもあらず。神はたして吾人が知る如きものなるや否や、疑はゞ疑ふの餘地は無きにもあらぬべし。然れども吾人は神に依て存在するものなり。吾人の本源は神なり。精神は勿論、肉躰も悉く神の中に生き動き存らへつゝあるものなり。然れば吾人自らが神の一部もし

くは神の化工にて既に神を顯はせるものなり。此は有限なれど無限と關係せり。有限と没交渉ならば無限にはあらず。有限を離れて無限は存せざるなり。然れば無限は有限なる吾人の意識に觸れつゝあり。有限なる吾人の理性は無限の内容を理解しつゝあり。吾人が主觀的に反省する所、主觀的に觀察する所、確に無限の内面ならざるべからず。無限なればとて知り得られざるものに非ざるなり。否無限なればこそ有限者によつて知り得らるれ。何となれば無限は何所にも何者とも交渉す。有限と有限こそ時として没交渉に終り、終に互に知り得ずして已むことあるべきなり。無限なる神は無限なるが故に吾人有限者に由て知らるゝなり。唯だ神果して吾人の知る如きものなりやと問はゞ、其は唯だ吾人の能力の欺かざることを信ずるに由て、之を然りとすと答ふるの外なし。吾人は宇宙と相對しても、自己の甚だ微小なるを感ず。月明の夜赤壁に浮べば、身は大海の一粟なるを感ずるといふが人情なり。而も此の微小なる自己の能力はよく此の大天地大自然の理を解し得ることを信じて勉強し、其の解したる所は眞に有りのまゝなりと信じて行動す。神は宇宙よりも大なれど、尙吾人と没交

渉にあらぬ限り、吾人が自己の能力を以て、彼れに付て知り得る所は、眞に有のまゝなりと信ぜざるを得ざるなり。

然ればとて神は悉く知り盡くし得べきものに非ず。有限なる吾人、如何に神と交渉密なればとて、之を全く知り得ん理なし。吾人は宇宙に付て尙最大部分を知り得ざるなり。吾人の近圍に在るものに付て尙多くを知り得ざるなり。否自己といふものさへ吾人の知らぬ所多く隠れ居れるなり。況や神をや。神は絶大なり。吾人の思想に超越す。吾人は又一種の不可知論者たるを失はず。彼の神に付て隅より隅まで知識せる如く言ひ做し、最も深奥なることを手に取る如く語る者の如きは未だ眞に神の大なるを思はず、自己の小なるを覺らざるものなり。唯だ吾人は自己の能力を活用して、神の内面を觀、吾人の精神的眼力の達する限り之を知らざるべからざるなり。

吾人は神を知り得べく、神は吾人に由て知られ得べし。此に於て吾人には神に付ての知識あり。而して此の知識は人類全體より言ても、又個人より言ても吾人々類の知識の發達と神の方の天啓の發展とに由て、次第に積蓋せられ養育

せられ擴張せられ高擧せられたり。斯くて神の知識明白となり、圓滿となりぬ。

二、神の知識の發達

神に付ての知識は、外部と内部との兩面の知識の結合なり。人は自然界の現象に對し、此に神の存在することを知れり。之と共に自己を顧み、自己の意識の背後に大なる意識の生命流れ、自己は其の流れに養はるゝ柳の如くなるを思ひ、背後を顧みて此の大意識と面を合はせ、此に神を知れり。而して此の自然界に存在する神も、自己の裏に見らるゝ神も、勿論一の神にして、唯だ之に接するものゝ立場が異なる所よりするのみなるを知れり。斯く人は二面より神を知りしなり。其の何れか主にして何れが従なるか。又何れが先にして何れが後なるか。此の點に至ては大にしては民族、小にしては一個人の、或は氣質、或は境遇の差別に由て異らざるを得ざれども、兎に角此の兩面よりの知識結合して、神の知識を成せしに相違なきなり。

此の神の知識は、人類が普遍に有する所のものなり。人すてに意識あるからには、早かれ晚かれ此の知識には達せずして已む能はざるなり。人の意識は靈として感覺以上に統合し思想す。此の意識の發展して愈よ其の精緻に入るに従つて、唯だ思想の目的たり信仰の目的たる純靈的存在たる神は、益々確に其の知識に入らざるを得ざるなり。或は尙人類として文化發達せず、其の精神未だ物質より獨立して十分人類たる活動をなす能はざる野蠻人の如きは、時として神に付ての知識の甚だ劣等粗惡ほとんど無に近きものあるやも知るべからず。然れども此は精神の發達せざるが故にして、其の發達して、物質を超越せることを思想し信仰し得るに至らば、必ずや一層良好なる神の知識を抱くべきこと明なり。或は不幸にして一種僻したる境遇に在り、一種偏したる教育を受けたる者は、又神に付ての知識を抱くことなきやも知るべからず。然れども何事にも知識の無くなれる人あれば、強ち神を知らぬ人のなしとも限るべからず。唯だ之に由て人類間に於ける神の知識を無きものと言ふべからざるなり。人類は一般に神の知識を有し、此は精神の開發と共に、益々明瞭的確に發達しつつあるなり。世界各種の宗教は、中には始終同平面に停滯せるものもあれど、大抵のものは兎に角次第に神の知識の進歩したる跡を留むるを見るなり。

神の知識は斯く普遍的にして、一般に幾分の進歩を示すものなりと雖も、然も、單に自然的に起りて自然的に發達したるもの、若くは單に民族間の習慣として發達したるもの、みにては、其の内部の觀念甚だ幼稚にして極めて粗雑なるを免れず。此に天才を待て神の知識は始めて大發展をなす。元來宗教が既に前に言へる如く純粹なる精神の活動なり。唯だ靈者たる人類に於てのみ有するものなり。而して純粹に精神的なることは、尙物質に捉はれ感覺に拘泥する凡人に於ては、十分に發達すること難しとなす。思想は常に非凡なる人才に由て平面を高くせらる。一般が習慣的に定めたる平面をば、非凡者出て、一隅を切り開き、更に高き所に人の思想を達せしむ。道德觀念にても然り。唯だ習慣が道德たる間は、社會は別に道德的天才を要せず。唯だ政治家あらば足れり。然れども理想といふものを考へ、人類が絶対に意志の目的とすべきものは何なるかと探し求むるに至れば、天才あつて理想の塔尖を指し示すまでは、低き平面に低徊せざるを得ざるなり。されば人に理想を教へたる道德者の如きは、確に一の世界創造者たるなり。神の知識また然り。神の知識は純粹に靈的の知識な

り。之を知るは肉によらず。實に思想なり、觀念なり、信仰なり。故に天才現はれて之を指し示すに由て、一般人民は其までよりは一段高き思想、觀念、信仰の世界に入ることを得るなり。斯く言へばとて、道德や神は主觀の影なりと言ふには非ず、此は實在なり。實在なれども之に付ての知識は純粹なる精神の活動に由て得らるゝものなるが故に、天才に由て開拓せらるると言ふ也。

天才なるもの、實在することは思ふに、何人も疑はざるべし。彼は凡人に優れたる才能を有し、凡人の爲し得ざる所を爲し、凡人の感ずる能はざる所を感ず。譬へば吾人が大音樂堂に於て種々の樂器の合奏を聴くとき、吾人の耳に入るものは唯だ一の大きな洪水風雨の如き音なり。稍發達して漸く音色を別ち、之に美妙を感ずるに至る後と雖も、尙其の調和の如何に整々たるやを知ること難し。然れども音樂の天才あり。田舎の隅より出て來り、蛙の聲、鳥の啼音のみに馴れたる耳を以て、直ちに此の合奏の美を感じ、之に現を忘れ、甚だしきは奏者の極めて微なる過ちにすら、樂の調子の亂れたるを感覺す。或は又美術の天才あり。吾人凡人の見るときは、野山の景色は一様に青と見ゆ。故に吾人

試みに繪具を取つて之を寫生すれば、畫は形といひ色といひ、似も着かぬ物となるを、天才は一見して形の遠近と大小と主従とを感じ、色の一様なるが如くして實は無數の差あるを感じ、刷毛を取て之を書き、立ところに生けるが如きものを書き出だす。實に此等の天才は凡人の見ることに能はざるものを見、凡人の聴くことに能はざるものを聴き、之を自らの力に由て顯はし出だすなり。而して是等顯はし出だされたるものは、凡人には見えず聴えず、最大多數者には無と思はれ居れるものなれども、實は無に非ず却て確なる實在なり。天才は實在を有のまゝに感覺知識し、之を顯はし出だす所のものなり。

神に付てまた天才あり。其の靈性凡人より先に進みたるものなり。彼等は其の進みたる靈性に由て、平凡なる一般人民の經驗すること能はずして、然も確實なる實在たる靈界のことを知りたり。彼等は凡人が物質を見る如く鮮かに靈の眼を以て神を見たり。彼等は凡人が自然界の因果を知る如く靈界の行動の因果を知りたり。凡人には何等の感覺を與へざる事の中に彼等は神の意の動くを見たり。凡人には何等の痛苦を與へざる事に於て、彼等は神の嘆きと怒りと

を見、神人の疎隔宗教の破損を見たり。凡人は輕んじて一顧をも與へざる罪人の涕に於て、神人の調和、其の赦しと救ひとを見たり。彼等は此の見えざる眞理を感覺經驗して之を凡人に教へたり。釋迦も確に斯くの如き宗教的天才の人なり。彼は神人の關係の如何にあるべき筈のものかを見たり。人をして此の理想に到らせんとしたり。凡人は彼に教へられて、神を知り、自己と神との關係を知りしなり。マホメットも此の種の天才の一人なり。其他諸教諸宗の開祖、若くは其の中の大人物は、必ず凡人より以上に其の天才に由て神に付ての知識を有し、従つて獨特の宗教を有したる人々なり。唯だ此等の知識が皆な悉く完全なりやと言はゞ其は別問題なり。天才と雖も完全なる知識を有するものに非ず。唯だ凡人より優れて實在を感覺すること敏く明かに且つ確なるのみ。

此等天才に由て人類は次第に神に付ての知識を開拓せられ、次第に神を知ること増し加はるに至れり。若し此等天才なかつせば、人類の宗教は恐くは自然宗教にて終りたらん。彼等の功績や没すべからず。或意味に於ては彼等は確に宗教の開祖たると共に、人類世界の一創造者なり。或る意味に於ける教主たる

なり。されば吾人は吾人が神の知識を有することに付ては、諸の聖人尊者に謝せざるべからざることなるが、同じ理由を以て全心の感謝を注がざるべからざるべく覺ゆるものは、猶太國民及び其の預言者等に對してなりとす。

猶太國民は實に宗教天才の國民なり。吾人は個人に宗教的天才あることを言ひしが、猶太民族を見ては又國民に宗教的天才あるを見出だすなり。彼等は他の凡ての事に於ては劣等の民族なり。然れども宗教に立ては無比の民族なることは萬人の齊しく認むる所なり。希臘人は文藝の天才なりき。羅馬人は政治法律の天才なりき。猶太人は實に宗教の天才なり。今日の世界を造れる三大宗教は彼等の中より出てたり。彼等の宗教と雖も、原初より高等なるものには非ざりき。然れども彼等の中に神に付ての知識、不思議なる勢を以て發達せり。彼等の祖先は何時の頃よりか、超越的の神を知りたり。此は劣等なる自然宗教、即ち活物教又は庶物崇拜に比して、大なる知識なりき。如何にして此の知識を得しか。傳説は其の族父アブラハムが周圍の下等なる宗教の民族の間に在て、神より召されて特に其の子孫のために設けられたる國に向て移住せることを言

へり。蓋しアブラハムなるもの同人種同民族の中にて特に宗教的才能優り、或時期に於て天來の光を感じ、神に付ての知識鮮かになり、此の神を心一杯に拜するを得る地の存することを信じたるものならん。兎に角イスラエル民族は彼等がヤーウエと叫ぶ所の絶偉大能の神を知りたり。彼等は幾個の分族より成り、各分族の間には氣質の差、習慣の差ありて、嫉妬、排擠甚だしく、衝突常に絶えざりしが、然も此のヤーウエを知たる點に於ては、全民族共通し、其の埃及より出づる時の如きも、此の一點に由て結合し統一せられたり。而して此の知識は立法者、預言者等に由て次第に益々加へられぬ。立法者はヤーウエの性質に付て一層明に知識する所あり。此の知識に従ひてヤーウエの心を表はしたる命令法律を編みたり。預言者等は一般の人民が唯だ一通り神を知りて之に事ふる間に、一層明白に神の心を見、一層痛切に神の感情を感じ、一層確實に神の取らんとする途、人の取るべき道を觀たり。斯くて法律者も預言者も、其の神に付ての知識を一般人民に與へ、總て此の知識は一般イスラエル民族の神の知識たるに至り、斯くて彼等は神に付ての知識に相續的大發展をなし、終に

此の大發展の後自ら又非凡無二の宗教的天才たる耶蘇基督の神の知識の現出するに至り、完全透徹、世界を照らすの光とはなれり。今日に於て世界が神に付ての知識を明白に有し、基督信徒は勿論、基督信徒ならざる人まで、神といへば直ちに崇高絶大にして然も慈愛の無限なる存在者を觀念する所以のものは、實に猶太民族の間に發展し、耶蘇基督に至つて完成せる神の知識より與へられたる賜あるが故ならずや。

げに神の知識は人に於て自然に得られ、而して宗教的天才に由て新らしく開拓して一層に加へられ確にせられ、無比の天才耶蘇に由て完全に達したるなり。

三、神の顯現の進行

神に付ての知識は、人が其の自力により、次第に神を知り、之に由て人類界に神の知識生じ又加はると共に、他の一面には、神の方より人に向つて接近し、人に觸れ、人類界に活動するに由て、人また神を知り、神の知識人類界に於て其の的確を加ふるなり。此の神が活動して人類界の活動に入り、人類の知識に觸るゝことを稱して神の顯現もしくは天啓など、云ふ。

神は確に存在す。然れども單に存在するのみならず、自己の經驗を統一し存在を意識する靈者ならざるべからず。然れども唯だ自己の經驗を統一し、存在を意識するのみならず、又自らの内部に目的を立て、自ら活動せざるべからず。神、人格者なるからには此の知と意とは必ず併せ具はらざるべからず。若し單に宇宙全體を意識するといふのみならば、其は人格者とはいふべからず、よし人格と名つけても其の人格は人の人格ほどに統一力なきものなり。此れシュイペンハウエルの意志説が、ヘーゲルの汎理説に慊らずして起り、後の學者に至て融和せられし所以なり。シュイペンハウエルの説くやうに衝動的の盲目なる意志が天地の根本を成すにはあらざるべけれど、又ヘーゲルや其の亞流の人の説くやうに、専ら理のみにもあらざるべく、天地の根本たる大實在は知なると共に意なり。即ち自から意識して發動する所の理性ならざるべからず。天地は確に發展せり。確に進化せり。其の源には無限の動力潜めるや明けし。神は愛なりと言はれし如く、神は活動せる實在なり。

既に活動す、其の活動は即ち自己を現はすものなり。凡て人格者の活動は悉

く自己顯現なり。吾人の一舉一動も悉く自己の顯現なり。唯だ吾人の行動は外物に由て決定せらるゝことありて、自己を有のまゝに顯現すること能はざる場合ありと雖も、凡ての終局たる神に於ては何等外物に決定せらるゝことなきが故に、其の活動は悉く自己顯現なり。廣くしては宇宙の發展進化は、此れ神の自己顯現なり。稍狭くしては人類の進歩の歴史は神の自己顯現なり。宇宙其物が神ならぬにしても、其の存在すること、其の發展とは確に神の活動にして、即ち神を顯はすものなり。吾人が宇宙の現象に據て、神の存在を證し、又其の性質を考へ得るは、即ち宇宙が神の活動なるが故、此の活動に現はれたる神を知るに外ならざるなり。

然れども宇宙の現象其自身は物質なり。神にして人格者ならば物質に由て自己を十分に現はせしとすべからず。勿論吾人の身體容貌言語舉動が吾人自身を現はせるごとく、宇宙現象も之と同種類の現はし方に於て神を現はすと雖も、吾人の身體は直接に吾人自身を示さず、時としては身體と精神とは反對の方向に發達することもあり。容貌と心とは相表裏することもあり、舉動も心ならず

行ふこともあり。以て十分に吾人を現はさざる如く、宇宙現象また神を現はすには多少の疎縁を感ぜしめ、甚た不完全なる顯現物たるを思はしむ。神、人格者ならば自らを十分に現はすには又人格に於てせざるべからず。抑も人格を現はし得るものは人格のみ。思想するとか、愛するとかいふことは、唯だ人格に由て現はし得るなり。

極めて不完全なる引例たれども、此に非常に高德の君子あり。人これを訪ひて教を乞はんとする時、或は其門に入りて、邸宅の何となく高雅の體を具ふるに心動かされん。或は其の室に入りて床の掛物、置物等に由て、其の人の床しき性格の幾分流露せるをも覺えん。然れども此等は尙極めて其人を弱く現はせるものなり。眞に其の人を現はす所のものは、即ち其の人より出て來る愛なり。善の行爲なり。愛ある義なる人格は、實に吾人を愛し、吾人に對して義なるに由て知らる。吾人は其の人に愛せられて其の人の愛の人なるを知り、其の人の智慧に接して其の人の智なるを知る。斯くの如く神の義とか愛とか智慧とかいふことは、悉く人格の徳性なるが故に、君人は實に神に愛せられ神に働きかけ

られて神の如何なるものなるやを知るなり。而して古より預言者、聖者の如き其の品性の眞に高潔清美にして、千載の下尙景仰措く能はざらしめ、崇敬の的となりつゝあるものゝ如きは、確に神が儼然として在し、其の遍在の力充實の力に由て是等の品性を溶化し、此に其の榮光の中に是等を輝かしめたるものにして、此れ神が働けるものなり。されば此は神の現はれたるものに非ずや。即ち預言者、聖者の品性及美行の存在するは、全く天の神の活動に由てにして、神は即ち此に自らを現はしたものに外ならず。吾人は預言者聖者に愛せられ化せらるゝに由て、最もよく神を知るなり。

之と共に神は其の品性の美を遍ねく充實し活動して此に預言者聖者の品性を現出せしのみならず、彼は又人類の意識に直接に觸るゝとをせり。之も固より活動のある時は必ず存すべきとなり。神は靈なれば其の活動も靈的なるが故に吾人は五官に由て其の活動を感ずる能はずと雖も、又吾人自身の靈に於て其の活動を感覺せずして已む能はざるなり。前に言へる所は人の品性が神に由て化せらるゝを客觀的に見て、之を神の顯現とせしなるが、又吾人は主觀的に吾人

の品性の神に由て動されつゝあることを感覺す。昨是は即ち今非たり。神を知らざりし前の自己と神を知りし後の自己とは著しく異なる所あり。自己には或る新しき力を得たるを感ず。過去の人と全く別人となれるを感ず。此の變化を起せしものは神にして、此の活動に由て現はれたる所に性の如何なるものなるやも明かなり。道德的意味の顯現を離れて單純なる神の顯彰も亦吾人に感ぜらる。アブラハムの經驗は確に神が其の内性を新たに顯彰し、其の恵みの神、其の力の神、其の信すべく恃むべき神なるを示したるなり。モーセの經驗、預言者の經驗みな之に同じ。神は吾人の意識に直接に自己を顯現し、吾人をして神を知らしむるなり。

而して此の人格的顯現、即ち人の品格の美を鑄治したる活動に由て、自己を顯はしたる事、及び人の靈性に直接交渉する活動に由て自己を顯はしたる事は、又ナザレの耶穌に於て其の絶頂完境に達したるを見る。誰か耶穌を見て其の品性の美に心を打たれざるものぞ。たとひ如何なる持説の人と雖も、之のみは決して推諉するを得ず。彼の品性は吾人の直接の觀察を以て批評しても確に天上

的なり。確に神的なり。今より二千年前、國の開化さほど美はしからず。國運またさほど盛ならず。國勢特に衰替極まりし猶太に於て、一村ナザレより出てたる耶蘇に、彼の如く至大至高なる品性あり。萬世を動かし之を改造する成化ありしを見ては、人は遍在して人の靈性を常に薰陶感化しつゝある絶大の神の活動を認め、此活動に現はれたる神を認めざるを得ざるなり。之と共に耶蘇は自ら直接に神に接したり。耶蘇には神は面と面と合はせて自らを現はしたり。此れ大天才耶蘇と、常に活動する神との間に必ず有るべきことなり。耶蘇には神は遠からず實に己れの父なりき。己と常に俱に在る者なりき。否己れの語るは神の語るなり己れの行ふは神の行ふなりといふ意識に堪へられざりき。耶蘇ほど明白に神を知りたる人なし、神を見たる人なし、否神を意識したる人なし。故に耶蘇が神に付て教へし時は、彼は人類界に神の知識の最明最強なるものを與へしなり。實に耶蘇に於て神の人格的顯現は其の最高點に達し、此に神を其のまゝに示し居れるなり。

以上論ずる所に由り、余輩は神の知識は人の方に於て自然的に存して自然的

に發達し、終に宗教的天才の能力によつて明白を加ふることを見、又神の方よりの顯現は宇宙及び歴史に於ける神の活動、人格の品性の美に於ける神の活動、及び人の靈性へ直接活動することに於て存するを見、此等の顯現は悉く耶蘇基督に於て其の頂點に達することを見たり。基督教の尊きは實に此の故なり。余の論によりても、神の顯現は必ずしも基督教の中に限られたるに非ざることは明ならん。宇宙にすら神の顯現あらば、基督教外の諸の宗教にも神の顯現せること論ずるまでもなし。然れども何所に基督教の如き明白にして完全なる神の顯現を留むるものありや。吾人は基督教に於て始めて神を知識するを得るなり。若し基督教なかりせば、世界に於ける神の知識は如何なる状態にあるべきか、之を想像するだに戰慄に價す。而して基督教の神の知識は、歴史的のものなりと雖も、一にナザレの耶蘇に於て其の結論をなす。されば一人のナザレの耶蘇なかつせば基督教の神の知識は存せず。世界は永く神に付て暗昧なりしならん。耶蘇は其の教に於て、將た其自身の人格に於て、神を人類に知らしめたる唯一の人の子なり。

四、神に關する知識と聖書

吾人は自己に神を知り得るの天性を有し、神は又其活動に由て吾人に自らを現はしつゝあれば、吾人は習はず學ばずして神を知り、宗教を完うするを得べきが如し。然れども宗教は前に言へる如く天才の教導を要し、神の自己顯現は預言者聖者等に於て最も明かに、而して此の天才は耶蘇に於て極まり、此の神の顯現は基督に於て完美するものなるが故に、吾人は耶蘇に接することによて始めて人の力の及ぶ限り神を知り得べし。基督を措いては吾人の神の知識は暗中摸索に似たるなり。吾人は基督を吾人の眼前に仰ぎ、其の神に付て教ふる所を傾聴し、其の神の顯現せる人格に親炙し、其の有する神意識に同情し、此に眞に神を知るを得べし。此れブシユネルが其の「基督に於ける神」の中に極力論明せる所なり。されば所謂顯現なるものは、活動を離れて示されたる幻象的のものに非らず。實に活動が即ち顯現なり。世に天啓もしくは神の顯現てふとを、神が特別に興行物を示すが如き者と考ふる人あり。甚だしき非事なり。神は展覽會をなさず。其の世界に働き、人類歴史に働き、人の品性に働き、人の

意識に働き、其にて自己を現はせり。故に宇宙も歴史も人生も實に神の顯現の蓄存所なり。之を外にして神の顯現を知る能はざるなり。

而して此の神の活動顯現をば、一個人として宗教的天才たり、國民の一人として歴史的に遺傳せられ修養せられ進歩したる天才たる人々が、自己等の文章言語を以て、文書に記録したるものを猶太教及び基督教の聖書となす。故に聖書は第一には神の活動によつて人の精神に起りたる經驗事實を、其人が自ら有のまゝに記したるものと、第二には神が世界の歴史に立ち入りて活動し、又個人の精神の上に活動したる事實を、他の人が客觀的に記したるものとの二種あり。預言書、律法書、詩歌、書翰、未來記の如きは第一種に屬し、舊約の諸歴史、基督の一代記、使徒の行爲録の如きは第二種に屬す。然れども此の區別は勿論極端まで試みるべきものに非ず。基督の一代記や舊約新約の歴史を記録し行く間にも、著者は自ら神の活動に接して大いなる發明をなし、大いなる生命を感じ、其の記叙を自己自身の得たる此の天啓を以て彩色したることも明なり。預言書詩歌等の中にも、唯だ傳説歴史や他人の經驗を繰り返したるのみに

て自らはさほど深切なる實在に觸れ居らざるものあるも事實なり。されば聖書の諸文書に斯かる類別を試みることは極めて大體の上より見ての事なるが兎に角聖書全體は以上二種のものより成たりとするを得べし。此を以て聖書を読むときは神の顯現に接す。吾人は福音書を読み唯だ乾燥なる事實の羅列を見るに止まらず、唯だ智慧深き諸の教訓の箇條を知るに止まらず、將た著者等の感情思想を觀るに止まらず、福音書中に活きて現はれたる人格を見ることを得。其の人格の生活を見ることを得。此の人格は神の活動、其の生活は神の顯現なるが故に、吾人は福音書を読み其の紙背に神の活動顯現に接するなり。書翰や預言書を読みても、之を書きたる著者の靈に於ける神の活動斯くの如き書を著はさしめたるを見、此に神の現に働ける跡を認め、神此に自らを顯はせるを見るなり。聖書の其他の文書みな同じ。而して此の神の活動顯現は、單に聖書の中に存するに非ず。聖書は之を示したるのみにして、神は遍く自らを顯はし、永遠に活動しつゝあるが故に、吾人は聖書に顯現せる神に自ら直接することを得。聖書は神の顯現を永く人に表明し、人の眼を開いて、神の自らを顯現せる

神を知らしむるものなり。

されば聖書といふ書冊が神の顯現したるものには非ず。其の言が天よりの聲の速記には非ず。神の顯現は何所にも超物質的なり。神は星か雲かを以て手づから蒼天に神は愛なりと書き示さぬが如く、又石の碑面や紙の面に自ら天の奧義を文字にて示すべくもあらぬなり。古より此點に付ては頗る誤謬の見の多かりしを見る。猶太教徒は勿論多くの基督信徒も、聖書の天啓を餘りに物質的に考へ、神は著者の手を取りて自らの心を書かせたりと信じ、聖書の表はせる内面の實質意義を忘れ、唯だ其の外表面現象のみに拘泥せり。彼の聖書は神が一字一句毎に其靈氣を吹き入れたるものなり。故に一字一句決して誤謬あることなしと云ふ説の如きも、もと人類には宗教の如き無形の事に關しては、何等か信仰の據り所とする權威を求むる情あり。聖書は神の言とせらるゝ者ゆゑ之を無謬の權威として之に頼らんとするより起りしものにて、特に宗教改革の時、プロテスタンの徒が、羅馬教會の唱へ來れる法王神權説に反對し、法王の心は必ずしも神の心に非ず、之を權威として頼るべからず、神の言は唯だ聖書に在り、

聖書こそ萬事を定むる唯一の權威なれと論し、斯くて聖書の權威を極度まで揚げ、誤りありては權威とならぬものから、一字一句も誤りあるべからず、神これに靈氣を吹き入れたればなりと唱へしに由て、此の説は益々勢を得、之に由て却つて内には聖書解釋に種々牽強附會の説を出だし、外には基督教の眞發展に多くの障礙を來したり。然れども聖書は決してさる窮窟なるものには非ず。現に幾多の誤謬もあり矛盾もあり不完全もあるなり。其の二三の例を擧ぐれば創世紀の初に、神は六日にて天地を造れりとある如き、又其の天地創造の順序の如き、今日の學問より見れば全く有るべからざることなり。又同じ創世紀の中に同じ事を重ねて記せる所に、互に記事の相異せる所も多く、列王記と歴代史とにては同じ事を異様に記せる所多く、此に矛盾あることを見るべし。且又其の道德思想の如きも、古き文書ほど低くして今日より見れば非難すべき點多し。聖書が一字一句神の靈氣の吹入に會て出來しとすれば、神は自ら誤謬あり矛盾あり道德不完全なるものとせらるべく、甚だしき不敬となるべし。聖書は人の書きしものなり。故に時代の經驗知力より全く獨立する能はず。畢竟す

るに其時代の宗教的天才等が、神の顯現に觸れ、之に動かされ、之に由つて書き留めたる神の活動録なり。

聖書もし誤謬矛盾あり又不完全なる思想ありとせば、吾人は之を排棄して信ぜざるべきには非ざるか。聖書完全なればこそ尊けれ、不完全ならば價なきに非ずやとは此れ自づから出て來る疑問ならん。然れども凡て書物は其の目的の何なるやを考へ、其の目的を達せしむるに於て適當なると否とに由て其の價値を定めざるべからず。例へば生物學の事を教へんとする書にして、たとひ文法上に些少の誤謬あり、若くは政治論の上に多少の誤りありとしても、其の價値は少しも減ずることなきなり。聖書の目的は宗教を教育し振興せんとするにあり。即ち人をして自己と神との關係を全うせしめんとするにあり。其の教ふる眞理は此點の眞理なり。聖書もし此點に於て大いに誤る所あり、若しくは少しの力もなしとせば、其は全く價値のなき書物なり。然れども若し此點に於て誤ることなくば、たとひ他の點に多少の誤謬あり矛盾あり不完全あるも、其は毫も聖書の價値を損ずる理由とはならぬなり。而して聖書は神人の關係を明にし、

之を正しうする道を教へ、之を正しうする力を呼び起す點に於ては、實に世界無比の書物なれば、誤謬あるにかゝはらず至大なる價值ありとす。

且つ又聖書の多少の誤謬矛盾等に付て考ふる時にも、新舊約の成立相異を明になし置くこと肝要なり。舊約聖書は頗る長き年代に渡れる文書の蒐集なり。最古の文書は紀元前八世紀頃に編輯せられしものにて、其の内容は殆ど記憶すべからざる過去よりの傳説法律詩歌等なり。最後の文書は紀元前二世紀の中頃のものまで及びべり。斯く長年月の間に加はり加はりて舊約全集といふものを成すに至りたるものなるのみならず、其の過去の歴史を記すや遠く隔たれる後世よりなせり。世界の初や人類創造時代の事を誰も見たるものはなし。其後の歴史と雖も然り。唯だ傳説に従つて書き成したるなり。されば人間たる限り之を全然正確に傳へんことは有り得べからず。時代の思想と誤謬とを有し、又後世の眼を以て過去を觀たる色は拭ふべからざるものあるなり。新約聖書の歴史的部分は頗る之と趣を異にす。基督の一代を傳へたる部分、及び使徒の行爲を傳へたる部分は其の事實の起りたる時代を距ることさまで遠からざるなり。基

督信徒の傳説及び信仰は基督に親炙せる直弟子等之を著はせりと傳へ、最も研究を積みたる批評にても、之と距ること遠からず。されば新約の記事は舊約の記事のやうに遠き後世人の録したるものには非ざる也。故に誤謬ありとしとも、其は著者等自身が事實を誤解したる故にして何かの事實は起りたるものとせざるを得ざるなり。舊約の歴史的部分と新約の歴史的部分とは斯くの如き差あり。舊約の歴史に自己の主觀的敘述が多ければとて、新約の方をも之と同一視すること能はざるなり。勿論新約歴史も著者の主觀的思想のために色とらるゝ事深し。されど色彩の背後の事實は新約に於ては史實なり。舊約の天地創造や人類初代史の如く、民族若くは個人の信仰傳説のみを材とせしものとは異なるなり。何か故に基督教の聖書を以て天啓の至れるものとなすやと言はゞ、他に理由なし、唯だ讀て神の顯現に接し、之に導かれて神との關係を正しうせんとし、終に之を正しうしたり神に救はれたりといふ確信に達するが故なり。此の幸福を與ふるもの聖書を除いて何所にありや。現に無數の人は之に由て此の幸福を得たり。今日にても吾等一樣に得つゝあるなり。此れ實に聖書の大特色なり。

天啓と言はれ、神これに顯現すと信せらるゝ原因なり。されば聖書の特色は其が實に神の顯現たる面目と實力とを有する點にあるなり。

然れど聖書は尙他に幾多の特色あり。何れも尋常の書に有り難きものなり。其一は前に言へる如く、一代一時の作に非ず、實に殆ど千年間程の間に現はれたる文書の蒐集なることなり。其二は其の種類の雑多なることなり。一の群書類従なり。其三は著者の種類變化多きことなり。王者あり農夫あり、學者あり漁夫あり、祭司あり醫士あり。其四は其の文章用語の簡潔卒直なることなり。曲筆の跡の如きは殆ど見當らず。斯くの如き特色を有するに拘はらず、此の浩瀚なる聖書は、大體に於て一の目的を有し、其の内に一致ありて、人を神の靈の前に齎らすなり。又奇といふべき書ならずや。

斯く聖書は宗教的の價値に於て世界無比の書物にて神の顯現を示せり。舊約より既に然り。而して神の顯現は耶蘇基督に於て大成せられたること前に言へるが如し。聖書は神の顯現を示すものなるが故に、神の顯現の頂點たる耶蘇を吾人に示し、此に神の顯現の燒點を表はせり。其の前の顯現及び其の後の顯現

は、此の燒點を挾むて完全なる歴史となり、始めて一貫せる意義を有するなり。故に之を言ひ換ふれば、聖書は耶蘇基督を以て極上せる神の顯現を吾人に表はす所の書物なり。

さて斯くの如く、人類に於て發達し得る神の知識の頂點に達したる耶蘇又神の顯現の燒點となりし耶蘇は如何なる人物なりしか。其の歴史の事實は如何。其の知識に由て人に教へし所は如何。其の神の顯現として此世に活動せし所は如何。乞ふ之を次章に説かん。

第四章 歴史上の耶蘇

- 一、神の知識進歩の絶頂と神の顯現の進行の絶頂としての耶蘇
- 二、基督の歴史的人格たること(不思議に大なりし一代——歴史の事實たりし人格——神話説)
- 三、基督一代記の材料(聖書——聖書に關する批評——パタロの四書論——同觀福音書——約翰傳)
- 四、耶蘇の國と時代(猶太民族——其の歴史——基督の時代)
- 五、耶蘇の一代(施洗者ヨハネ——耶蘇の受洗——耶蘇の素生と經歷——耶蘇の活動——其一、救訓——其二、實行——其三、弟子等の教育——其四、宗教の實現——最後——十字架——葬)
- 六、耶蘇傳首尾の記事(復活及昇天——奇蹟的誕生——誘惑——復活に關する諸説明——復活否定の困難——復活を信する信仰の宗教に於ける地位——其他の奇蹟)

人間の方より神を知る知識の進歩は耶蘇の神意識に於て其の絶頂に到達したり。神の其の活動に由て自らの内性を顯はすことは、耶蘇基督の品格と意識に於て其の燒點を發揮せり。此に於て耶蘇を見るときは眞に神を知ることを得、神の知識こゝに全きを得るなり。

而して神の知識は宗教の要なり。宗教は神人の關係を正しうする生活なる故に、凡ての事この要の點より發出し、此の要の點に基を置けり。神を知ること明かならずして宗教明なる道理なく、神を知ること誤り居りて宗教の亂れざる筈はなきなり。多くの淫祠も迷信も將た狂信も、其の本は神の知識の不完全なること若くは誤れることより起れり。

されば最上なる神の知識を與ふる耶蘇は、同時に最上の宗教を與ふるものにして、若し耶蘇なくば最上なる神知識なきと同時に、最上なる宗教なく、人類は永く劣等なる宗教に自己の精神全體を托し、實在との關係に於て、暗夜に不知案内の途を歩むと同じき状態に在るべきなり。

近頃我國の學者の中に、儒教佛教は勿論、基督教も同しく不完全なり。故に凡て之等を研究し、公平に其の凡てのもの、短を棄て長を採り、以て我國體に適合せる哲學的新宗教を造らざるべからずと言ふ人あり。眞に意氣の壯なること推服に餘りあり。若し其の言ふが如く、凡ての宗教より其の長所のみを抜き來つて、之を一體系に組み立て、其にて一般人民の道德的努力の原動力を與へ、

宇宙人生の秘義に解決を與へ、貧しき者の富、悲む者の慰め、失望する者の獎まし、死なんとするもの、光となり、順境に在る者の聖徳の活力となることを得ば、其にましたることはなし。何人か耶蘇教とか佛教とかいふ如き、一見偏れるやに見ゆるものよりも、宗教といふ汎くして道理の整へるもの、出づることを欲せざらんや。然れども深く考へ見よ。國民宗教の如きものは別として、基督教にせよ佛教にせよ、其の起るときは決して耶蘇及び其の徒の特別の宗教釋迦及び其の徒の特別の宗教を起さんとして起りしに非ず、此の宗教こそ天地の至理、凡ての宗教の根本たる真理を此に集中したるものなれと自信して起りしなり。されば此等の大宗教は縦には數千年間の時代に貫き、横には世界萬國に涉りて、何人が信じても差支へなき性質を帶へるものなり。其れが偏りて不可なりと言はゞ、我國の學者等が今日諸宗教の長所を切り取り貼り寄せて新宗教を造りたりとて、又同じく不可なり。其も一宗派に相違なければなり。而も其等の學者等は好んで我國體に適合する宗教を造らんと云ふ。各國の國體なるものも、一種の真理の結體には相違なかるべきも、特に我國體の原理よりのみ

出發し、特に我國民のみ信奉すべくして、他國民の信奉すべからざる宗教を造るとありては、其の結果は頗る奇怪なるものならん。世界に持ち出だして、如何なる高等文明の人民をも、其の信條の下に跪かしむべき宗教にして始めて永久に存在すべし。一國の特殊法律の如く、唯だ民族習慣に基礎を置きたる宗教は決して生命あるべからず。世界は愚か國人の心をも服せしむる能はず、唯だ一種の教育を以て國民の多數を闇愚に留め置くこと、威力を以て國民を脅迫すること、に由てのみ其の存在を維持すべきのみ。斯かる思想にて宗教の新造などは思ひも寄らぬこと、餘り法外の野心と言ふの外なきなり。且つ夫れ宗教は先賢古哲の言を抄集すればとて、其れにて成り立つものに非ず。よしや立派なる教義は出來たりとて、之に何等の生命も力もあるものに非ず。宗教は實に神の知識の發達に由て得られ、其の知識は非凡なる天才の存在に由てのみ明かに與へらる。基督の如く釋迦の如く、神を善く知識し、又基督に於けるが如く、釋迦に於けるが如く、神其人に活動顯現してこそ、始めて世に宗教を立て得べけれ。斯くの如き經驗なくして、唯だ天才等の教へたる所を拾ひ集め、之を自

己等の矮小低卑なる精神に由て、自己等の好むまゝに排列せしめて、何の宗教か出て来らんや。勿論基督信徒が佛教思想を容るゝことの如きはあるべし。何となれば基督信徒は、基督教信仰に由て神と關係せる凡ての點の整へらるゝことを信じ居るべければ、佛教思想も之と衝突せざる限りの真理は、其の裏に包容し居るべければなり。佛教徒にして若し確信ある者あらば又同じく斯くの如きものあらん。唯だ容易に新宗教を立て得るが如く思ふは、己を知らぬ學者の夢想として一笑に附すべきのみ。先例決してなきに非ず、諸宗教の長所のみを取て此に眞理に合へる宗教を立てんといふ者は、近世にては歐米をはじめ印度にも日本にも屢々現はれたることもあり。今尙存在するもあれど、然も彼等の學說努力の跡は、唯だ基督教神學者の度量見解を廣くせしめたるといふことの外、果して何程のものありや。我國の學者の説も基督教徒に此の種の教訓をば與ふることならん。されど學者の研究や編輯に由て一宗教が成らんことは、到底望むべからざるが如し。(此邊重複せし所あり、原稿訂正の際の過誤に由る)

吾人は唯だ耶穌に於て活きたる宗教の完全なるものを見出だし、耶穌に由て

宗教を種と斷言するを踴躍せざるものなり。固より宗教といふものは、神の知識といふものよりは廣きものなり。されば吾人が耶穌に由てのみ得る所の生命に付ては、神の知識といふことの以外、尙之ありと雖も、茲には唯だ此の點のみを論じて可なり。而して此點は懸て宗教の出發點たり基礎たるものなれば、神の知識が耶穌に由らざれば全きを得ずとすれば、全宗教も耶穌に由らざれば全きを得ざること勿論なり。

何が故に耶穌を完全なる神知識の活現とし、耶穌をのみ稱揚し信仰して、他の賢人天才をば顧みざるか。釋迦もツアラツストラもマホメットも同じき宗教上の權威を有せざるか。曰く、彼等も確に宗教的大天才なり。神の或る顯現なり。人類の靈性は彼等に於て、靈的に長大足の進歩をなし、天のことを非凡に感覺經驗したるものと信ず。之と共に天は彼等の靈と微妙に交渉し、至善なる神は彼等の裏に深切なる活動をなせり。されば彼等に於て神の顯現し居ることも疑ふべからず。神宇宙に遍在し、宇宙の主たり宇宙に活動せば其の然るは勿論なり。彼等の人格は、其の性格に従つて周圍に遍在せる神を吸收し其の意識

を統一せり。見よ佛教は恒河一帯の地方に淵藪活動せし神意識の結晶統一に非ずや。釋迦は實に此の統一をなし得し大意識の人格なりしなり。ツアラツストは印度の西方よりベルシャ一帯にかけて磅溥たりし神意識を統一して其の火教を大成せり。マホメットは亞刺比亞の曠野の民族に普遍なりし神意識を自己に於て統一してイスラムを起せり。天啓が獨り基督教のみに存して、他の宗教に絶無なりとする如きは、此れ神の遍在活動の信仰と衝突するものにて、却て基督教の精神に反するものなり。然れども基督教は神の顯現と人の神知識の精華なり。此の兩方の進化の絶頂なり。人類の宗教的知識は基督教に到達せざれば已まざるべきなり。神の顯現は基督教とならざれば已まざるべきなり。然らば基督教と他の宗教とは唯だ程度の差を有するのみなるかと云はゞ、或意味に於ては然り。或意味に於ては然らず。元來完全と不完全といふことが程度の差とも言ふべく又種類の差とも言ふべきものなり。例へば植物も動物も意識あり人も意識あり。人は生物進化の頂點に達したるものと言はる。人と動植物との差は程度の差なり。然も又種類の差あり。人の意識は意識の完全なるものとな

れり。此の完全なる意識は不完全なる動植物の意識とは實に種類的の差あるなり。進化の中間に在る神知識と、進化の絶頂にある神知識との差は、完全なる神知識と不完全なる神知識の差にして、實に程度の差とも種類の差とも言はれ得るなり。而して完全といふことは決して其れ以上進歩せざるに至りしことを意味せず。言語其物はさる意味に取らるゝとしても事實は決して然らず。人の意識は完全なれど、人類原始以來非常なる進歩ありき。赤子の意識は勿論、人としての意識を具ふるに至りし後と雖も尙進歩あり。宗教また斯くの如く、基督に於て宗教の完全なる形式範疇與へられ、人類は此に完全なる宗教を得たれども、個人の成熟又は人類の進歩に由て、其の内容は益々複雑に深遠になり行き、斯くて基督の與へたる形式範疇を充たし、基督の具へし宗教を底まで再現するなり。

何に由て基督の神知識、及び基督に於ける神顯現を以て最も全しとするか。此に至れば比較宗教の問題なり。此に之を論ずるの必要を感せず。何となれば吾人は此の書の諸項に於て、基督教信仰の重大なる點をば、屢々他の宗教の信

仰と比較して之に批評を試みつゝあればなり。唯だ大躰に付て考へても、例へば神に付ての觀念の如き、其の世界及び人類との關係の觀念の如き、罪の問題の如き、救の問題の如き、未來の信仰の如き、他の宗教の其等の點を拉し來つて基督教と比較せば、如何に基督教宗教の明白徹底し、知をも情をも満足せしむるに於て他の宗教に優れるかを見ることを得ん。勿論基督教宗教といへども、人間間に知られ行はれ居れるものなり。無限萬有にはあらず。故に或る特殊の點に於ては他の宗教中に基督教よりも秀俊なるものあるや知るべからず。或は佛教の如き無數の經本を有する宗教は、其の經本より好句を拾ひ集めて編輯したらんには、基督教そのまゝの教義も組み立て得らるゝやも知るべからず。近頃の青年佛教徒の説教や著作などを見るに、眞に基督教に極似せる警句金言を引き、基督教の福音そのまゝの佛教を傳ふるものも無きに非ず。強ち無を有と云ふにあらねば、答ひべきとにもあらざるべし。然しながら其れにては最早佛教にはあらず。文字や一句くこそ佛教の寶藏より持ち寄せたれ、其の宗教の躰系は基督教かさなくば其人自身の宗教なり。つまり佛教の柱や板を持ち來

つて基督教の家又は自己流の家を建てたる譯なり。宗教は金言集や警句集には非ず。一の躰系なり。之に生命あり。斯くてこそ宗教たる力はあるべけれ。此の躰系として完全なるもの、明白なるもの、人心に徹底するもの、救の力となるものは、基督教以上何ものかある。基督の起せる宗教は宗教の進化の頂點に達せるものにて、従つて他の宗教の完うせんとする所を完うし、之を得るとき人は宗教を圓滿ならしめ得べきなり。

基督あつて基督教あり。基督なかりせば人は到底基督教を得べくもあらざりしなり。而して基督教は宗教の進化完成せるものなれば、基督なくば人類は完全なる宗教を有せず。今日に比すれば程度に於ては勿論、種類に於て異なる宗教に其の精神を托せざるを得ざりしなり。

扱て基督が知識したる神の知識は如何なるものなりしか。彼に於て顯現せる神の顯現は如何なるものなりしか。基督この知識と此の顯現とを以て起せる宗教は如何。吾人は進んで是等を究めんと欲す。然れども是等を究むるに先たち、斯の如き宗教の開祖たり基礎たる耶蘇基督其人は如何なる人格なりしか。之を

明になし置くの要あり。故に此に耶蘇基督の生涯に付て簡単に證記述んと欲す。

基督の史的人格

基督の一代ほど研究の價値の豊なるはなし。基督の一代は結果の無盡藏の源なり。道德歴史家レッキは基督に由て世界の一變せることを認め、ニーチエも基督は物の價値を顛倒したりと論ぜり。多くの宗教家の感化は大抵單なる宗教生活の上に留まり、多くの道德家の感化は大抵道德觀念の上に殘れるのみなり。釋迦の如き人格と雖も、其が國民の生活を以前のブラマ教生活より變ずること如何程なりしかを思へば、未だ以て至深の感化を與へたりとはなし難き節多し。我國に於ては佛教の感化は、却て支那印度よりも深きが如けれども、此れとても國民の全生活を一變せし程には非ざるなり。プラトの道德觀念の如きも、基督教と結合するまでは、道德觀念としても活力を有すること少く、況や一般社會の生活を變化することは極めて薄かりしなり。耶蘇基督に至ては即ち然らず。身は賤民として取り扱はれ、短命を十字架上に終り、殆ど何の見るべき榮もなく、何の仕出來せし手柄もなきやうなりしも、其の感化は世界の

根底にまで入り行きて、終に世界を覆へしりたり。今日に於ては如何に拒まんとしても彼は確に文明世界の精神界の王なり。光榮ある文明は確に彼の一代より發流せしなり。我國の如きも彼の一代に由て融化せられ、生命を得し所あるなり。今日の世界の光明的方面を支配するものは、勿論エドワード七世の心にもあらず、ウイルヘルム三世の心にもあらず、實に耶蘇基督の心なり。日本國民の如き、中には耶蘇を厭ひ、勉めて其教を排斥せんとする者ありと雖も、耶蘇基督の心は彼が目にする書物の中、彼が耳にする講演談話の中、彼が交はる友人親戚の中に、深き泉の如くなりて潜み、不盡の流れをなして生き、常に知らずくの中に彼を動かしたつゝあるなり。佛教の説明も基督化せられたり。儒道の講釋も基督化せられたり。美術も音樂も直接又は間接に基督の心を匂はせつゝあり。道德の如きは基督教化せられたるもの、最も著しきものなり。基督が善とせしものは善とせられ、基督が悪とせしものは惡とせられつゝあり。古來の道德にして基督の道德と衝突するものは次第に擯斥せられ、基督の重きを置かざりしものは漸く輕んぜられ、甚だしきは基督が當時の事情によつて言

ひ及ぼさしりし道徳は、道徳の目録より消えんとまでじつゝあり。見よ耶蘇の感化は、歐米にては人民の全生活に徹底して之を一變し、之を基督的となし、我國また之と同じからんとす。斯くの如き感化の源を究め、其の如何なる人格が斯くの如き力を發生するやを知るは、如何なる傾向趣味事業の人にも、頗る重大なることに非ずや。況や耶蘇基督は神人の間に付て、世界の人を教へ、又之を實際に救ひし唯一の人なり。而して神人の關係を正しうするは、人生最急最要の務たりとせば、萬人一様に此の一人を凝視し、其の人となりと其の事業とを明かにするの要最も切なるなり。

此の無比なる一代は餘りに人間の常態と隔絶せずや。餘りに影響せし所著大にして、其の源はとても人間界に有り得べしと思はれず、寧ろ神話傳奇小説に於て見得る所の假想人に近からずやとは、實際的の心意の人の時として問ひ出づる所なり。短く言へば、耶蘇といふは果して世界に存在せし人にや、或は基督信徒が想像に由て生み出だしたる影法師にはあらぬかと云ふ問なり。此の疑問の出づるも一應に無理ならぬことなれども、此は唯だ耶蘇の一人の感化の結

果影響のみを見て、其の餘りに宏大なるに眼の眩みたるが故に疑ふ者にて、其人もし仔細に立ち入りて耶蘇の一代を調べ、其の人と爲りを研究したらんには、耶蘇といふ人物は案外に吾人と近く、其の一代記は極めて堅實なる記録なるを感せずんばあらざるべし。若し基督なかりしとせば、此の世界の歴史は如何にして不可思議となりたりて、到底解釋する能はざるに至るなり。源なくんば末は出でず。礎堅からずんば大建築は成るべからず。基督もし無かりしとせば前に挙げし如き世界の大變化は何に由て起るべきぞ。基督もし存在せしとしても、聖書に記されたる如き人物ならず。其より甚だ低き人格なりしとせば、此れ脆弱なる礎の上に、大伽藍を建て得たと一般のみ。決して其の理あるべからず。凡て人格の感化といふものは、其の人格其自身の品性より高くなるを得ず。師は非常に偉大にして、弟子は其れほどならぬが常なり。されば基督が初より無かりしとせば、無かりし基督が大感化を與へしといふこととなる。基督ありしとしてもさほどの人格ならざりしとせば、此れ小人物にして自己よりは無限に大なる感化の結果を世に起せしこととなり、此に甚だしき背理を生ず。

基督は確に聖書に記されたる如き人格、否其よりも偉大高潔なる人格として、曾て此の世界に存在せしに相違なきなり。若し基督存在せざりしならば基督教は全く虚なり。何となれば基督教は實に一人の耶蘇の人格に依屬せり。耶蘇基督の知りたる神を信じ、耶蘇基督に活動したる神に接するが基督教の根本的宗教なり。然るに基督なかりしとせば、基督信徒が知る神の知識は單に人の推測なり。基督は派實在なるが故に彼に於て見らるゝ神は唯だ人の空想の神なり。此に至れば非基督教は全く思想のみとなり、哲學と同じく之より救の力、即ち人の神に歸るの活力を仰ぐこと能はざるなり。然れども基督の史的の人物なることは、今日に於ては殆ど何人も異論なしと云て可なるべく、吾人は耶蘇は今より二千年程前に曾て足此土を踏みし人なることを信じて疑はざることを得るなり。

ストラウスが基督の一代に付て神話説を唱へたるは今より七十餘年前のことなり。彼は其の『耶蘇傳』に於て、福音書に記される事は、無意識より成れる思想の製造物なり。初代の基督信徒の思想を形にしたる記號なり衣裳なり。其の

根底の實在は極めて小さなるものなり。耶蘇といふ人物ありて、ナザレより出て、ヨハネより受洗し、猶太を巡りて説教し、終に敵の爲に殺されたり。然るに彼の弟子は猶太人にして想像に富めり。其の舊約の豫言や傳説に付ての信仰と其の師の生時の事の回想とは、此に混同合躰して、次第に基督の事跡の周圍に集り、終に之を國民の久しく待ちたるメシヤ(救主)なりとなし、此の信仰を以て基督の一代記を書きたるなりと説き且曰く此の神話は歴史的に誤謬なれども、思想上には實在なり。夫れ神が人と爲るといふことは、即ち神の自己顯現なり。人道は自然及神靈てふ父母の子なり。人道に於て無限は有限と一致せり。人道は清淨なり。決して死する時なく、天より出て、また天に昇るなり。此の神の人、即ちインカーネーションを信じて、人は神の前に義とせらるべし。然れども此のインカーネーションは決して一個人に於て存せず。「人」に於て存すと。

ストラウスの説に従へば、福音書の耶蘇は曾て在りし人の寫生畫にあらず、在りたき人の畫なるなり。耶蘇の一代の影響の餘りに大なる、とても實際人間

界に在りし人と思ひ難ければ、之を單に理想化したる畫として解釋し去らんとするは頗る常識に適ひたる見解なるに似たり。然れどもストラウスの説は殆ど四面楚歌の聲の裡に埋められて初め多少の隨從者ありしも至て短命なりき。彼に反對せし者の中には、批評力の欠陥よりせしものもありしも、其の説は又偉大なる神學者哲學者等の嚴重なる批評を受くるに價せしこと勿論なり。彼は基督傳を史的に見すして哲學的に見たり。彼は事實を究めずして徒らに思辨したる。其の奉ずるヘーゲル哲學の立場より基督の一代を説明し、基督の一代を此の哲學にて説明し得る型のものとなし了れり。されば彼の説は毫も確固たる根據を有せず。唯だ勝手なる前提を置きて、之より演繹したるのみ。彼の先聲パウロも或點に付ては同意見なりしも、ストラウスが歴史に頓着せざることを咎めたり。彼の缺點は歴史的研究のなき所にあり。歴史的研究に由らて、唯だ抽象的に思辨的に批評を加ふるは、歴史に活ける大關係を有する基督教及び其の開祖の研究としては甚だ力なきものたるなり。此の耶蘇一代記の神話的説明は單にストラウスのみの試みしものに非ず、彼の前にウオルフやニーブールは希臘

もしくは羅馬の神話より脱化し來りしにあらぬかと疑ひ、オットフリート、ミエレルは神話は必ずしも全然架空ならざる材料より生ず、虚實兩要素の含まることあり、有史時代と雖も出來得ぬものに非ざることを言へり。ストラウスは此等の説を大成し、神話といふ語の意味を廣く用ひて自説を立てしなり。

然れども此等の神話説は、一には歴史を不可解のものとし、二には聖書文學の歴史的批評と衝突するものなり。基督教會といふ世界大の精神的王國が、唯だ或時代の或特殊の少數者の夢より出て來りしことは許すべからざることなり。實質は至て短小なる人物を、理想裝して幾百千倍の大人物としたるものが、此の現實なる世界を一變し、其の凡ての物の價值を顛倒したりとは、常識の容るゝ能はざる憶想なり。却て斯かる憶想をこそ夢とは言ふなれ。且つ又群衆の精神は如何にしても時代の色を帯びざるを得ず。時代の思想觀念に捉はれざる時代精神あるべからず。否時代精神とは即ち時代の思想觀念なり。而して時代の思想觀念は、何れの時代と雖も未だ曾て完全なる境に達せしものなし。必ず時代の罪惡缺點無知等に色つけらる。其の精神の結晶したる文學をた決して此等

の色より潔白無垢なる能はず。故に或る時代に理想の人物を思想しても、其が永へに人類の理想として仰かるゝことは難し。人類は間もなく前人の理想を追ひ抜くなり。例へば三國誌の人物は、著者時代の理想を以て古人を衣裳したるものなりき。然も今日誰か書中の人物を吾人の理想として仰がんとするものを、八犬傳中の人物は著者時代の理想の人なりき。然れども僅に百年を経る内に吾人の理想はいたく之を追ひ抜けり。耶蘇傳と雖も此の種のものなきに非ず。準聖書と稱せらるゝものゝ中の耶蘇の性格行爲は、屢々吾人を默然悞然たらしむるものなり。耶蘇一代記の繪畫また屢々吾人に不快の感を與ふるものあり。然るに聖書中の耶蘇に至ては、注意して精神を讀むときに、讀む者をして一向に異人傳を讀む如き心地せしめず、極めて自己に近く、自己と同感同情の人物に接する思ひせしむるのみならず。一方には其の人格玲瓏高潔、今日も今後も何時までも人類の理想たるものを啓示せるを見る。顧みれば聖書の書かれし時は二千年に近き昔なり。二千年の下、世界の大變遷、人類の大進歩、思想の大推移を経過し、全く別天地となり居れる今日、尙聖書中に示されたる人物は

品性の理想として毫も缺くる所なしとせば、之を時代の少數者の思想より産み出だせしものとするは頗ぶる道理に合はぬ話なり。必ず聖書に見ゆる如き人格實際に存せしが故に、聖書に傳へたる如き事跡傳へられたるなり。耶蘇は確に曾て此世に存在せし人なるは勿論、又必ず聖書に傳へられたる如き人物として存在せしものなること、疑ふべくもあらぬなり。

耶蘇の一代記は固より詳細を盡くせるものに非ず。若し今人をして當時にあらしめば、精を穿ち微を捉へ、耶蘇三十餘年の生活を傳ふること至れり盡せるものあらんが、當時の弟子等は唯だ簡短に其の印象せられし耶蘇を傳へたるのみ。故に耶蘇の事跡隅より隅まで明瞭ならんことは到底望むべからず。吾人が耶蘇一代に付て有する知識は極めて僅少なり。然も其の僅少なる知識と世界に於て存する實際の人格的影響と、吾人自らの經驗とに由て、耶蘇の一代は動かすべからざる事實なるを認むるなり。

基督一代記の材料

基督の一代を知るの材料は新約全書の外になし。基督と同時代の猶太の歴史

家ヨセフスの書中に基督の事記されありと雖も、此は後人の偽作なること明なり。而して此の唯一の材料たる新約全書は、勿論基督自ら書きたるものにもあらず、命じて書かしめたるものにもあらず、又基督の昇天後直ちに一代記を造らんとして書きしものにもあらず、又其の一冊も著者自らが聖書といふものとして萬代に残さんと欲して書きしものにもあらず。基督昇天後數十年を経たる後、基督直接の弟子もしくは之と接近せし者どもが、手々に所々にて自己の説教に代へて書きて讀ましめたるものを、信徒等寫しては又傳へ寫し、其等弟子等の文書の寫しを各自一冊に綴り集め、之を尊き書として崇め讀みたるより起りたるにて、今日吾人の手に在る如き新約全書なるものが初より存せしにはあらず。彼の二十七冊が新約全書として聖書の正典たるに至りしは、何時なりしか劃然時代を明にする能はざる位なり。

故に聖書は基督傳を知るに信すべき材料なり。若し基督昇天後直ちに二十七冊の聖書が出来て、其を以て基督教を教ふること今日の教會の如くなりたらんには、其の聖書は却て疑ふべきものなり。又九人乃至十數人の使徒や弟子等が

一堂の下に會し、今日の新聞編輯室に於けるが如く、協同して各自基督の事跡を書きしとすれば、又斯くて出来たる聖書も眉に唾して讀むべきものなるべし。然るに聖書の成り立ちは前に述べしが如く全く之と異れり。文書相互の間に着眼點文辭用語の差の著しきは勿論、多少の相異、矛盾まで存するは、却つて文書の誠實にして信すべきことを證するなり。

然れども聖書は批評せられたり。近世に至るまで聖書は其の傳説し來れるまゝに、馬太傳は使徒マタイにより、馬可傳は使徒ペテロの弟子、又バルナバの甥マコにより、路加傳は使徒パウロの弟子なる醫士ルカにより、約翰傳は使徒ヨハネによりて書かれ、所謂パウロ書翰は皆なパウロにより、ヨハネ書翰はヨハネによりて書かれたるものなりと信ぜられたり。然るに十八世紀の終りに近づきて、獨逸のレッシングは同觀福音書馬太馬可路加三傳を云ふより前に尙其の材料となれる原文書存したるべく、福音書は後人が其の原文書を根據として著はしたるものならんと考へ、英國のエドワード、エツアンソンは、約翰傳の著者は第二世紀のプラトール派哲學者ならざるべからざるを論じ、十九世紀に入

りてアイヒホルンは又同觀福音書の、共に或る原文書より材料を取りある事を指摘せり。其より後聖書文書に對する研究批評は勃然として興り、さしも神聖犯すべからず、一言一句謬るべからざるものとして信仰せられし聖書も、少しの遠慮容赦なく、縦横に解剖せられ、推斷せられ、今より七十年程前チューピングン大學のフェルデナンド、クリスチアン、パウルは、基督教の初代、教會には分裂ありて、一方には猶太主義を固執せるペテロの派あり、他方には世界主義を唱導せるパウロの派あり、互に對峙して相争闘したり。然れども此の勢は固より永續すべくもあらず次第に調和の傾向を來たし、終に一大公教會の建設となりて、諸派其の中に併吞せられたりと觀察し、之を標準として聖書諸文書の著作の年代を推定し、諸福音書は皆な使徒時代後の所作なりと論じたり。此に至て聖書に關する長き間の信仰は攪き亂され、基督一代記は出所に於て信を置くに足らざるものとなり了りし觀あるに至りぬ。

然れどもパウルを以て始まりしチューピングン學派の批評は、却て基督の一代を確實の事實として信ぜしむる結果を生み出だしたり。其の時より以來、聖

書は益々研究せられ、且つ基督は一個歴史に存在せし人物として研究せらるゝに至り、其の結論はいよいよ聖書の出所の確なること、耶蘇の事跡の確實なることを證明したればなり。

パウルは諸福音書を悉く使徒後の時代の書としたるが、假に此の觀察を正しとして、福音書を重んずべき材料に非ずとするも、基督の一代を語る確實なる文書尙残れるあり。即ちパウロ書翰なり。或人はパウロ書翰は第五福音書と稱すべきものなりと言へり。而してパウルが純粹に使徒の手に成れりと斷定したるものは實にパウロの四大書翰、即ち羅馬書、哥多林前書、同後書、加拉太書なりき。パウルが純粹にパウロの手に成りしとせしは此の四書のみなりしも、彼の後、チューピングン學派の人々は、次第に非パウロ書翰の數を減じ行き、最後には唯だ教會書翰、即ち提摩太前後書、提太書のみをパウロ作に非ずとするに至れり。然れどもパウロの手に成りしもの唯だ四書のみなりとして、之を讀過し行くに、書中記す所は一の耶蘇のこと、其の教の辯護及び説明に外ならざるを見る。

パウロの四書翰に従へば、彼の同時代に耶蘇といふ人物あり。大なる教を教へ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブなどいふ弟子を有し居たるが、終に十字架にかけられて殺されたり。而もまた多數の弟子等の間に復活し、使徒等に現はれ、最後に自己に現はれたり。而して耶蘇は既に人々のクリオス即ち主にして、又自己の主なり。自己は實に基督の奴隸、基督の意のまゝに動きつゝあるものなり。此の主といふ語は、希伯來語のヤリウエ(又エホバ)と同等の意義を有するものにして、耶蘇を主と呼ぶは即ち彼を神ヤリウエと同等視したることを示す。確にパウロの書翰は、彼が認めて神と爲せし所の一人物、現實の世界に存在したることを證す。此等の書翰の書かれたるは、紀元五十八年前後にして、即ち耶蘇世を去りて後、三十年前後の事なるべく、パウロは自己の書中に記せる基督の事跡は、其時なほ讀者の知れる者の中に見証者の存することを言ひ、又使徒等の多くは尙存在し居れることを示せり。

さればパウロの四書翰のみにも、基督の存在せしこと、其の事跡の幾分と、其の人格の無比なりしこととは、動かすべからざることとして知らるゝこととなるが出所の確なる文書は必ずしも以上の四書翰に限らず、聖書批評學の隆盛となりし結果は、福音書についても、其の信すべき書なること愈々明白にせられたるなり。パウロは自己の立場より考へ、福音中真先に出來たるは馬太傳なり。此れペテロ派の聖書にして猶太教的傾向を有す。次に出來たるは路加傳にして、前者に對抗し世界主義を唱へ居れり。馬可傳は前兩者の衝突せる點を悉く剪裁し、調和の精神を以て出てたるものなりと言ひしが、爾來内には聖書自身の内容を研究し、外には第二世紀の早き頃より、第四世紀頃までに至る諸の師父、もしくは名の知られざる人々の文書の、直接に今日に残れるもの、又は他の人の文書中に引かれて残れるもの等を精細に調査し、學者の説は此に略一致を來たして、大抵の人は諸福音書の第二世紀著作説を否定し、且つ結論して曰く、基督の一代記にして、最先に現はれたるは使徒マタイが當時猶太人の國語たりしアラム語にて著はしたる「ロギア」なり。此書は現行の馬太傳の本となれるものにて、現行馬太傳よりは無論簡短なりしものゝ如し。此の「ロギア」を材料とし、他の材料をも共に蒐めて、希臘語にて基督を傳したるが現行の馬

太傳なり。されど此は何人の編輯になりしか明ならず。マタイの「ロギア」にて現はれしを馬可傳となす。馬可傳は初より希臘語にて記され、凡そ現在の同書の如き形なりしならん。馬可傳がマタイの「ロギア」より材を取りしや又全く獨立したる文書なりしやは議論定まらず。されど此の二つの福音書は、使徒の傳へし基督の一代にして初代の教會に到る所に用ひられ、基督の一代を知る權威として尊重せられしが、此にまた第三の福音書現はれたり。即ち路加傳にして其の述作や、後れたれど尙正確なるを失はず。二世紀に入りては既に聖書として世に承認され居たり。此書は前の二福音書より取りし所もあれど、又前の二福音書に記されたる所より以外の事にして、初代の教會の間に傳へられたる基督の教訓逸事をも收め居れりと。

以上同觀福音書に關する批評の結論は大抵一致せしと見て可なるが、議論尙紛々たるは第四福音書約翰傳なり。約翰傳も十八世紀の末に至るまでは一二の古代の異端者の外殆ど之を疑ふものなく使徒ヨハチの作なりと信ぜしが、近世の批評眼は同傳記叙の調子の同觀福音書と著しく異り、其中の事實にも多少の

不一致あることを看取するに鈍ならず。エドワード、エヴァンソン先づ四福音の不一致を唱へ、ヨハチ傳を二世紀のプラトイ哲學者の作なりとし其れより後其の使徒作なるを否定するの傾向漸く生じ、ストラウス、パウエル、ツエルレル、シユウエグレル、カイク、ホルツマン、シユミール等はそのヨハチの作ならぬを主張し、マイエル、エワルド、ツアーン、ワイス、バイシユラツハ、ゴードン及び英國の諸大家は其のヨハチ作なるを唱へ來れり。之を使徒ヨハチの作に非ずとすれど、使徒と同時代に在りし長老ヨハチの作なりとする人あり。ハルナツクやドブシユツツ等これなり。然れどもサンデー等ヨハチ著作論者の唱ふる如く、約翰傳は千數百年間少しも疑はれずして使徒ヨハチ作と信ぜられ來りしものにて、近世の批評も未だ此の信仰を打破するに足る反證を擧げ居らざるは事實なり。然れども公平に考ふる時は、約翰傳著者の問題は眞に大なる難問題たるを免れず。之が批評は將來尙ほ瀕出すべく、吾人は虚心に之を迎へて、眞理を取るの覺悟なかるべからず。さは言へ、約翰傳は又一個の基督を知るの材料として極めて有力なるものたるを否定する能はず。ヘルデルもファイヒテも

シエリングもヘーゲルもシユライエルマツヘルも、其の基督觀を約翰傳より汲めり。而して著者に付ての議論は以上の如く區々定まらざるが、今や著作年代は早きに置かるゝ傾向あり。初は二世紀後半の書とせられしが、今や使徒作否定論者も之を二世紀の早き頃に出でしとし、ハルナツクやドブシュツ等之を長老ヨハチの作とする人々は紀元八十年乃至九十年に出來しと論じつゝあり。されば約翰傳は少くも初代の基督信徒の信じたる耶蘇基督觀なりしと言ふまでもなきことなり。勿論約翰傳中の細節末梢まで悉く史實として信すべきかと言はゞ其は別問題なり。約翰傳は基督を既に神の獨り子と信じ、此の主觀を以て基督を觀、其の一代を此の信仰を以て色彩したるものなることは明なり。然れども吾人が諸福音書を見て基督を知るは、唯だ其の出生や行動や運命を知るのみに非ず、其等と共に其等の根底に在る所の一大人格を知るなり。紙背に存在し、史的事實の奥底に存在し、今尙靈的に存在する所の耶蘇基督其自身を知るなり。約翰傳は基督の外部的行動進退を知るの材料としては、或は著者主觀の影に曇らされたる點なきに非ざるやも知るべからずと雖も、基督其人の人格を

知るの材料としては、他の福音書と相待て極めて力あるものなるを見る。此は約翰傳を讀む者の齊しく感ずる所なり。

吾人は此等の材料によりて殆ど二千年前の史的人物たる基督を知ることを得。即ち彼の行動と性格と其爲せる事業とを知ることを得。思ふに世界の大宗教家中、基督ほど明白確實に史的の人物として知らるゝ者なく、基督の一代ほど研究講明せられたるものはなし。彼は多くの他の宗教の開祖の如く、神話傳中の人に非ず、又誇大に傳へられたる人に非ず、實に現實なる世界に住み、常識を以て其の一代を傳へられたる人なり。其の傳は歴史的に批評して信すべきものなり。其の人格が現實の世界を一變するの力となり。其の宗教が世界の人心を確乎として支配せる又偶然に非ざるなり。

耶蘇の國と時代

耶蘇基督は歴史上の人物なり。彼は他の人の如く生れ、他の人の如く活動し、他の人の如く此世を去れり。彼は過去の時代の後に生れ、未來の時代の前に死ねり。彼は決して星の世界より落ち來りて、萬事の全く異なる所に寓し、又星

の世界に去りし人に非ず。人の母より生れ、人の血液は勿論、思想の遺傳をも受け、時代の刺激を受け、自らも亦幾分時代を動かし、終に世界をまて影響したる人なり。されば耶蘇を世界の歴史より抜き出して觀察することは、即ち耶蘇を眞に解するの途にはあらず。耶蘇の思想を全く過去に關係なきものとして考ふることは、即ち眞に耶蘇の思想を解する途にあらざるなり。然れば耶蘇の一代を解するに當りては、其の出て來りたる民族に付て、又其の時代の状態に付て深く考究する所なくんばあるべからざるなり。

耶蘇は猶太民族より出たり。少くも猶太民族の血統たることを自信し、猶太民族の特色を誇りとなし、他くまで之を維持せんとしたる家族より出でたることは明なり。猶太民族は前に言へる如く宗教に於ては獨特の知識能力を有せる人種なり。其の國家は既に存立を失つてより程久しかりしが、然も民族の特殊の精神は、尙耶蘇が呱呱の聲を擧げし時にも瀾るものありたり。

猶太人はイスラエル民族の正嫡なり。イスラエル民族はもとユリアの内に入りて牧畜を事とせしが、次第に水草を逐ふて南に移り、終に埃及領に滲入し、

其所にて次第に繁殖せしが、高等なる文明を有する埃及人は、彼等を使役し、壓迫して其の苦に堪へざらしめしかば、彼等は終に一人傑モーセに率ひられて埃及を出で、亞刺比亞の曠野の間を水草を逐ふて彷徨すること幾十年、此間に土着の人民と或は争ひ或は雜婚し分族の數は十二となりぬ。(暫く學者の説に遵ふ。)而して此等分族は、各々幾分血統を異にし、習慣を異にし、精神を異にせしが故に、互に嫉妬し反目し甚だしきは争鬪せしが、唯だヤハウエを神とし拜する點に於ては、彼等皆一致し居たり。埃及より出でても此のヤハウエの名に於て統一せられてなりき。かくて彼等は曠野を北に進み、終に死海の北岸よりヨルダン河の兩岸に跨れる一帯の地に入り、此に其の居を定めたり。彼等は此地に入るに當りて、或は先住民と戦ひて之を逐ひもしたれど、而も先住民は其の數に於ても遙に彼等に優り、其の兵の精なることも又彼等を凌ぎ、其の文明の程度に至ては、迎も彼等牧畜の流民と同日の談に非ず、此を以てイスラエル民族は、次第に彼等先住民と同化し混合したり。彼等の數は俄に幾十倍となりぬ。然れども宗教に特殊の能力を有し、又非常なる熱情を有する彼等は、其の

ヤールウエ教を以て精神的に此の混合民族を征服したりたり。ヤールウエ教は此の新民族全族の宗教となりぬ。

斯かる内に地中海沿岸に躊躇して、次第に勢力を張り來りしペリシテ人との接觸は始まり、民族的競争は起り來れり。イスラエル民族は益々ヤールウエに頼り、其の力に由りて敵國外患に當らざるべからざるに至り、ヤールウエ教は此に益々國民間に力を得、終にイスラエルの神ヤールウエを説き、専ら之に頼りて他意なかるべく、外敵を之に由りて退くべきを唱ふる預言者なるもの現はれぬ。斯くてヤールウエ教と國民感情とは相一致し、終に神の選べる王者の出現となり紀元前十一世紀にはダビデ十二族を統一して、此にイスラエル王國を造りぬ。されば王朝時代の初にはヤールウエ教は非常なる繁榮を致したり。ダビデは稀有なる敬虔の人にして失意にも得意にもヤールウエを忘れず、其の子ソロモンの代に至りては、王宮と共に大神殿を建築し、以てヤールウエを崇め拜するの心を顯はしぬ。ソロモンの子レホボアムに至りて、收斂多きに過ぎし結果民心離散し、十二族中の十族は分離し、エロポアムを奉じて北方王國を造り、僅に二族のみ

猶太王國として残り、相對峙して或は相戦ひ或は相携へしが、斯かる中にもヤールウエ教は南北兩方に於て益々其の形を整へんとし、多くの傳説、習慣、法律年を逐ふて加はり居たり。

紀元前八世紀の前半、北方王國は其れまで常に禍ひとなり來りしスリアに勝ち、非常なる繁榮を致し、之と共に道德の墮落甚だしかりしが、此は却てヤールウエ教を促して、靈的方面に一轉歩せしむる原因となりぬ。即ちアモス、ホセアの如き預言者現はれて、神はイスラエルのみに私せず、全人類を審判す。イスラエルたとひヤールウエと特別の關係あればとて、其の關係は毫も頼むに足らず。正義を忘れ、公道を棄て、而して悔い改むることを知らずんば、神は怒の火を下して立どころにイスラエルを罰せんとすと叫べり。果せる哉この預言は適中し、紀元前九世紀の初より北方チグリス河畔に興隆の勢を張り居りしアツスリアは、南に向つてスリアを捲席し、終に手を伸ばして北方王國を亡ぼしたりぬ。此れ紀元前七百二十二年の事なり。後に残れる南方王國には、イザヤの如きミカの如き多くの預言者現はれて、北方の滅亡に鑒み、唯だ一の神ヤールウ

エを畏れ正義を行ふべきを奨めしが、恰も其時アツスリアのために危くも亡ぼされんとして不思議に免がれしことあり。王ヘゼキアは大いに驚いて宗教の改革を行ひ、記憶すべからざる頃よりヤールウエ教に混入せし偶像の禮拜を廢して只昔ヤールウエにのみ事ふべきを勉め、其の曾孫ヨシアに至て紀元前六百二十一年所謂申命記文書を神殿中に見出だし、其の嚴格なる敬神主義に従つて徹底的に改革を斷行し、此に至て始めておほよそ偶像禮拜を根絶したりしが、王は埃及軍の北上を打いて戦死し、之がために國民の信仰は動搖し、其より兎角勢ひ振はす、預言者エレミア切りにヤールウエを信じて外國と同盟するを避くべきを勧めしも議行はれず、斯かる内に北方エフラタ河沿岸に再興せしバビロニアは紀元前六百七年にアツスリアを亡ぼし、次第にスリア諸國を壓倒して紀元前五百八十八年エルサレムに至り、十八ヶ月の包圍の後終に之を陥れ、斯くて南方王國は五百八十六年に滅亡したり。

猶太人民の花たる者は國の滅亡と共に俘虜とせられ、バビロニアに携へ行かれぬ。彼等は懐かしき故國より引き離され、尊き神の殿より離れ、メソポタミ

アの漠々たる平原の中に、或は琴を河畔の柳に懸けて亡國の怨を咏し、或は運河の邊に集りてヤールウエの禮拜を行ひ、此に始めて夢の醒めたる如く、自らのヤールウエに對する不忠不信を悔い、ヤールウエを慕ひ、之に助を呼び求むるもの起り來り、或はエゼキエルの如く、新しき新殿及び宗教制度の建設を理想するものあり、或は民族の歴史や習慣法律を編纂記録して其の散逸せざらんことを計るものも多く現はれぬ。舊約聖書の文書中には此の頃の編纂にかゝるものを後また集めたるもの頗る多し。

紀元前六世紀の前半、ヘルシヤ東方に崛起したる、クロスは五百三十八年にバビロニアを陥れ、バビロニアの猶太人は故國に歸りて神殿を再建するを許されたり。一團の殖民者エルサレムに歸りて此の事業を大成せしが、外部の妨害内部の腐敗墮落ありて宗教甚だ弛廢せしむ五世紀の後半エズラ及びネヘミヤ、此の民を救へて之を一新したり。然れど此時より法律儀式は宗教の重大なる要素となり、古の預言者等の唱へし精神的道德的宗教は漸く忘れんとするに至れり。

紀元前三百三十三年アレキサンデル大捷を博してヘルシヤを顛覆し、猶太も亦希臘帝國の領有に歸しぬ。之より先猶太人は絶えず希臘文明に接觸し居たりしが、此に至て一層甚だしく、猶太教の中にも希臘思想浸入し來り、最も著しきは「智慧」の思想の如きものとなり。何時の頃か七十人譯と稱する希臘譯舊約聖書も生ぜり。猶太に對する希臘の政策は猶太人民の希臘化といふことにありたれば、思想の融合は此の時代に入りて一層甚だしくならざるを得ざりしなり。國家の事を言へばアレキサンデルの没後、希臘帝國は四分せられ、猶太は爭奪の後終にスリアのセレウクス家の領となりしが、紀元前百六十八年に至り、王安テオクス、エピファニスは、統一主義を嚴行せんため猶太宗教を撲滅せんことを企て、軍隊を遣はして猶太人を強制し、ヤールウエの禮拜を禁じ、偶像禮拜を迫り、最も汚れたりとせる豚の肉を食はしめ、神の殿をば種々の手段にて汚し、命に従はざる者をば老若男女の別なく強制し又は殺戮せり。此時には希臘化の勢力は滔々として國に瀰り、此等の壓制を歓迎する者までありしが、然もヤールウエの忠臣と愛國の熱情ある者とは尙全く無くならざりき。此の壓制

迫害の中に忍んでヤールウエの正しき審判の日の至るを待ち焦れ、所謂未來記(ダニエル書の如き)思想を耕して益々信仰に活力を得たるものもあり。ユダス、マカベオスなる者は其の兄弟等と共に終に叛旗を翻へし、之に馳せ集る者少からず。終に其の一揆に過ぎざる愛國者等を以て、精煉せるスリアの軍を後け、一時猶太を獨立にせしが、ユダスは戰に斃れ、兄弟等相繼て統治者となり祭司長となりしも、此の時は既に羅馬の勢力スリアに及び、其より後の子孫は悉く羅馬の節度に従ひ、而して肉親相闘いて暫くも寧日なく、常に羅馬の干渉を受け紀元前三十七年其の統の最終の王安テオクスはヘロデと争ひて敗れ、羅馬人のために首を斬られ終り、イドメア人にしてガリラアの方伯たりしヘロデは斯くて多年の野心を遂げ猶太の王として羅馬の承認する所となれり。聖書の中に、耶蘇の生れし時、猶太の王生れしと聞き、之を殺さんために探し求めしとあるは此のヘロデ王の事なり。彼は最も殘忍非道の性質の人にして、其の妻を殺し其子をも幾人となく殺せし程なり。然れど彼は大王と稱せられし程頗る策略に長じ、常に羅馬に媚び、又民心を收攬するを勉め、或はエルサレムに於てアウ

グストスに標呈せし劇場を建て、或は宏大なるヤーウエの神殿を立つることをせり。ヘロデ死して國は三子に分與せられ、アルケラオスはユダヤ、サマリア、イドメアの主となりて王を稱し、アンテパスはガリラヤ及びベレアの主となり、ピリポはトラコニテ及びイッレアの主となれり。然れどアルケラオスは政を失して紀元後六年羅馬より廢位流謫せられ、其後には羅馬の遣はせる方伯來り、カイザリアに政廳を置き、スリア大總督の下に屬して國を治め居たり。ユダヤ王位全く無くなりてよりは、自然の結果として祭司長職や祭司會議は大いに重きを置かれ、衆議所なるもの又裁判上の大勢力となれり。勿論至上權は羅馬の方伯の掌中に在れば、祭司長と雖も其の節度に從はざるを得ず。衆議所の決議も方伯の裁可を得て實行せざるを得ざりしなり。而して此の衆議所の議員は宗教的政治的の二黨派に兩分せられ居たり。一はサドカイ黨にして、貴族的の階級多く、外國文明を迎合し、思想は頗る唯物的傾向を有し、舊約聖書を文字通りに解し、現世の祝福を以て唯一の神の報と信じ、靈魂不滅の如きことを思はざりし徒なり。一はパリサイ黨にして、政治上には國粹保存を主義とし、外國

を排斥し、愛國の熱情に燃えたと共に、宗教上には極めて嚴密に舊約聖書及び其の解釋書の教ふる箇條を守り、之を守るに由て宗教を全うせんとしたる徒なり。此の二黨派は衆議所内のみならず。全ユダヤ人民間に對立して、希臘の統治時代より存在し、初はサドカイ黨勢力ありしが、マカベウス時代よりパリサイ黨の勢力強くなり、耶蘇の時代にも其の數に於ては此派最も多きを占め居たり。民間には尙此外にエッセネスと稱する一派ありき。同じく舊約書の教ふる所を嚴守せしと雖も、隱遁の生活を樂み、苦行を重んじ、神を拜するは必ずしも神殿に於てするを限らずと唱へ、一異彩を放ち居たり。斯くの如き歴史を有し、斯くの如き状態に在りし民族の間に、紀元前六年耶蘇は呱呱の聲を揚げたるなり。西洋の紀元はもと耶蘇の誕生に發せしものなりしも、曆年に六年の違算ありしと思はるゝは何人も知る所なり。耶蘇や實に空前絶後の人傑なり。其の榮光を見るに眞に神の生み玉へる獨り子の其れに外ならず。其の生れしは確に神より生れしなり。其の來りしは明かに天より來りしなり。彼は決して一國一民族の歴史が生みしものには非ず。一代や一世の勢

ひが促し出だせしものに非ず。時の要求が呼び出だせしものには非ず。若し歴史が生み出だせしとせば、實に天地の歴史が生み出だせしなり。若し勢が促し出だせしとせば永遠界の勢が然かせしなり。若し人心の要求に由て出でしとせば、世界全人類の要求が凝つて之を呼び出だせしなり。然り、然かはあれども、耶蘇の來るは決して實際の歴史と無縁にして來らず。其の出でし民族と没交渉にして來らざりき。一人の耶蘇を生ずるため、イスラエル民族の二千年の歴史は向上したり。イスラエル民族の歴史あつて世界人類の救主たる王は出づべかりしなり。イスラエルの精神に於て、神意識は歴史の早き源頭に其の中に起り、次第に發展擴張したり。一方より言へば、神はイスラエルの中に活動して自己を顯はせり。神の精神はイスラエルの歴史に流れ入りて、次第に深く廣くなり行き、遊牧時代、聯邦時代、王朝時代、俘囚時代、回復時代、附庸時代を通じて、此の生命この思想は常に完全の境に湧き上り噴き出でんと煩悶したり。耶蘇基督は此の歴史の終末に出て、此の煩悶を大成したるものなり。實に耶蘇世を去りてより三十餘年にして、猶太人は最後の反抗を羅馬に試みて、國は全然

破壊せられ、長き歴史を有せしイスラエルは、もはや民族として存在せざるに至りしも、亦敢て偶然なりしと言ふべけんや。

耶蘇の一代

イスラエルに於て預言者の聲やみて四百年。而して猶太は羅馬の轡の下に在り。政治の上に不満と倦怠の心は國民の精神を壓し、宗教の上には一層新鮮なる生命を渴望すること切なり。サドカイの現世主義、快樂主義は愛國の熱情と伴ふ能はず。精神の深き要求を充たす能はず。パリサイの頑傲固陋なる精神實行も亦人と神との關係を整ふるに甚だ不満足を覺え、さりとしてエッセネ派の思想も、活動を重んじ、現實を尊ぶ民族の精神と相容れず、人は何物をか求めて已まざる時、忽ち帛を裂く如くして響き來る音信あり。曰くヨハネといふ預言者、ユダヤの曠野中に現はれたり。久しく預言者を見ざりし人民は、早天に雲霓を見る心地して且つ驚き且つ喜べり。此を以て争ひ起つて其の預言者を見んとてヨルダン河畔に赴き行けり。ヨハネは駱駝の毛にて織れる衣を着、柔さぬ革の帶をしめ、何を教ふるかと聞けば、時代のいたく墮落し、神を畏るゝ

の心なく、唯だ偽善をこれ事とせるを嘆き、今にして悔いて心を神に向け、神の心に従つて生活するに非ずんば、神の怒は人民の上に落下し來らんといへり。其の調子は頗る激烈にして、古の預言者を活き復して再び見るの概あり。人民の或者共は其の言に聽きて畏を抱き、其の弟子となり、悔い改めて神に歸するの記號として、ヨルダン河にて洗ひの禮を受けたり。

集り來る多くの人々の中に一青年ありき。先づ親しくヨハネに就て其の懐抱する所を叩き、且つ自己の觀る所、思ふ所を打ち語りたるものゝ如し、而して此の會談は太くヨハネを驚かしたる如く見らる。ヨハネは自己に集り來る多くの人に接し、多くの青年とも語り、其の神を慕ひ向上の精神に溢れたる様を見、喜ひもし感謝もしたるべきも、此の一人の青年に接し其の人格を見、其の談論を聽きては、其の餘りに偉大高潔なるに驚嘆せざるを得ざりき。彼は此の青年を以て全く神に充つるもの、イスラエルの精神的要求を成就するもの、昔より待ちに待たれたる最大の人物なりと看取せり。此を以て自ら讓りて後生に大人物あり。我は屈みて其の靴の紐を解くにも足らずと言ひ、青年のいよいよ洗禮

を彼に受くるや、彼は又然かく人々に紹介せり。

青年、名はイエス、父はヨセフといふ大工、母はマリアと云ふ。ガリラヤのナザレより出づ。ナザレは小部落なりしかども、當時フェニキアより南方アラビアに通ずる街道に沿ひ居たり。耶蘇は確に神の成せる最大の人格、其の裏には無限の靈能藏せられ居たり。品性清く優しき母の手に育ち、明媚なる山水の間人に爲り、イスラエルの宗教的遺傳と教育とに染みて、而もユダヤとは異りて頗る自由あり、粗朴直截なる宗教の誠の残れるガリラヤに生ひ立てり。時の勢ひ一般精神の傾向とも交渉せる其の靈は、遙かにヨルダン河畔の預言者の噂を聞きて、此に一道の光を投げ入れられたるべく、ヨハネに接しては其の眠みし神の子の意識勃然として燃え上りしなるべし。此を以て彼は強て洗ひの禮を受けぬ。洗ひの禮は罪を意識し、之を悔いて心を新にすることを表はすものなりしかば、耶蘇が之を受けしは何の理由に基づくか、之を揣摩するに困難なりと雖も、確に自己も一般中の一個の人として、一般人類といふ種族のために嘆き、イスラエル民族のために痛み、人と共に洗はれて、神と新しき契約に入

らんことを欲してせしに相違あるましく、而して此の洗ひの禮に由て、其の精霊神は此に一轉進をなし、ナザレの人、ヨセフの子耶蘇は、人を救ひて神に歸らすべき使命を負へる救世主基督として自覺せらるゝに至りしは事實なり。聖書の著者は此の精神的事實を記して、水より上れる時、神の靈鳩の如く降りて其の上に止まり、天より聲ありて、此は我が愛子なりと言へりとなせり。聖書は又耶蘇が洗禮の後、暫く曠野に退き、心中に崛起せる強大の誘惑と奮闘し、終に一意天父の心に従つて一生を貫徹すべしてふ大決心を得、勝利の歡喜を以て歸り來りしことを記せり。耶蘇はかくて黒鐵よりも堅く鍊はれ、雪よりも白く清められて、其の救世の大業に入りしなり。

彼は先づヨハネに倣ひて、此の世に精神的新勢力の入り來りて、世界一新の時期到れるを示さんため、『天國は近づけり、悔い改めて福音を信ぜよ』と呼はり、自ら天國の建設を畢生の事業として、其の靈をも體をも之に傾盡せり。天國とは何ぞ。神の在す所、神の支配する所、神の心の限なく行はるゝ所なり。耶蘇は世が罪のために汚され、人が神との關係を誤れるを嘆き、人をして神を

信ぜしめ、人の靈の間に神いまし、神のみ之を支配し、神の心の全く行はるゝに至らせんことを終局唯一の目的として生活したるなり。

ヨハネ、ガラヤの分封王ヘロデ、アンテバスを諫めて獄に投せらるゝや、耶蘇はいよいよ其活動を壯んにし、ヨハネの殺されし後は獨り神の國を説き、其の建設に献靖せり。彼は始より終まで第一に教訓をなせり。『天國は近づけり』といふより始めて、彼は神を明白に人に教へ、神の人を愛すること父よりも切なるを説き、人の罪によりて神より離れ居れること、之を其のまゝに過ごさば神と一つの生命に與かること能はぬこと、故に悔い改めて神を慕ひ神を愛し神に従はゞ神は如何なる者をも赦して之を其の子たる地位に復せしめ、永遠の樂しき生命の中に之を包容すべきこと、又人と人とは相赦し相愛し、己れの如く人を愛して敵にまで及ぶべきこと、而して自己は實に人をして此の幸を得させんために世に來り、之がために生命を棄つるものなることを告げたり。此の以外の點に於ても、彼は折に觸れ事に接して、人々を教へ導き、彼等を啓發誘導し、神に對し世に對し自己に對して、正しき生活を送らせんと勉めたり。之

れがために彼は遍くパレステナを歴巡り、或はエルサレムの神殿に於て、或は地方の猶太教會堂に於て、或は狭き街に臨める弟子の私宅に於て、或は草青き原野に於て、或は水清き湖邊の舟上に於て、倦まず群衆に道を説き、又個人として接し來るものを一々親切に教へたり。彼は今日の牧師高僧の如く、大邸宅を有せず、大會堂を建てざりき。然も其の教訓の聖書に残れるもの、何ぞ崇高にして深遠にして而も明白に、人の心腸を探り肺腑に貫き、神を現はし、人を活かすことの至れるや。

第二に彼は教師として物の理を教へしに止まらず、彼は神の愛を説き、人々互ひに愛すべきを説きしと共に、自ら此の眞理を活現したり。神は愛する者なりと教へしのみならず。神の愛は實に彼の裏に生き、彼は人を愛し、終に至るまで之を愛せり。彼は善をなさんために遍く天下を周流したり。人生到る所悲惨あり不幸あり罪あり。五戸十戸の部落にも尙其の存在するを免れず。耶蘇は弟子を愛し、教を聴く者を愛すると共に、自己に接し來る有らゆる悲惨不幸に同情し、自己の力の及ぶ限り之を取り去り、人をして幸ひならしめんことを勉

めたり。彼は貧しき者をいたはりぬ。病める者を癒しぬ。盲、啞、聾、癩病人、跛、其他さまざまの悲惨のもの、彼に由て或は救はれ、或は慰められたり。耶蘇の生活は眞理の實現の生活なりき。

第三に彼は弟子等を教へ導き此に教會の礎を据ゑたり。彼はヨハネの如く單に教をなしたるまゝに委し去らざりき。其の許に集り來る多くの群衆の中より特に弟子を取り、更に其中より十二使徒を定め、更に其中よりペテロ、ヤコブ、ヨハネを近づけ、之を誘接啓發せり。蓋し天國は決して主義綱領の背承に由て存在せず、人格と人格との接觸に由て起り、人格の間に存在す。耶蘇は初より其の宗教を世界に撒き散らさず、靜に自己の周圍に親しき弟子を引き寄せ、自己の人格に充つる所の宗教と道徳とを之に注ぎ入れたり。短日月の間なりしと雖も、弟子は彼の無限の精神力に感應して、彼等の精神の裏に耶蘇を受け入れたり。彼等は何時の間にか第二の耶蘇となりぬ。耶蘇の再現となりぬ。斯くの如くして一人の人格は更に他の人格を化し、斯くて天國は確實に世界の中に見えざる所に擴がり行きたり。今日の牧師傳道師が徒に講壇の上より基督を説

き、一向に人格の傳承といふことを顧みざるが如きは、抑も基督の方法に反するものと謂ふべし。

第四に耶蘇は自ら宗教の實現なりき。彼は全く神の中に在り、神あつて生き動き存らへたり。其の言ふ所、行ふ所、悉く此なりしと雖も、亦勉めて神に祈り、天父に交はり、其の愛を求め、其の力を乞ひ、其の恩を謝し、其の之に頼る心を言ひ顯はしたり。聖書の中には耶蘇が屢々静かなる所にて祈りせるを記し、又安息日には猶太教の會堂にて禮拜せしことを記せり。彼の一生は引き續ける禮拜なりしも、又形に現はしたる禮拜をも決して怠らざりしなり。

耶蘇は斯くの如く生活せり。人民は初め彼に傾き來りぬ。彼の到る所、彼を見、彼を聴き、彼に癒やされんとする者は雜査せり。彼は食する暇もなく、時としては神へ祈ることをさへ妨げられたり。人民は必ず期せしならん。此人天國の來現を説き、又事實上不思議なる事をも行ふからには、之に由てイスラエルと神との關係を舊に復し、従つて外國の軛より國を救ひ出だし、猶太を祝福の充つる所たらしむべしと。特に國民の不平は満ち／＼て將に破裂せんとし、

其後僅に三十餘年にして大爆發を來せし程なれば、何人か國民を導きて羅馬に抵抗せしむる首領を有意無意の裡に求めて已まざりしを以て、或者は彼に於て、此の首領を得んかと思ひたるべし。然るに耶蘇の行動は一々彼等の所期に反し、彼等は事毎に失望したり。此に於てか彼の人望は幾何もならずして引き去りたり。彼に病を癒され、不具痲疾より回復せられし者も、恩を忘るゝには早くして又彼を顧みざりき。之と共にサドカイ黨の政治的懸念より受る壓迫と、パリサイ黨の嫉妬とは容赦なく其の兇暴を働き始めたり。サドカイ黨は耶蘇の徒を輕んじたれど、然も其の政治的に羅馬の天下を亂し、國民の禍を起さんかを疑惑したるや明なり。パリサイに至ては、耶蘇の言ふ所、行ふ所、悉く自己等の所信と背馳せるを見、耶蘇の宗教の到底自己等と兩立すべからざるを認め、耶蘇を以てイスラエル歴史を無視し、古立法者モーセを破毀し、猶太教の習慣を廢棄するものなりと咎め、之を罪死に當るべきものと信じて、耶蘇の事業の進行するに従つて、益々其の嫉妬憎惡の情を増し加へ、耶蘇も其の到底彼等の手に倒るべきを前知し居たり。

一年一回陽春満月頃に行はるゝ所の猶太人の趨過すうとの節會は來りては去りぬ。其の三たび目の時、耶蘇はエルサレムに入りて毎日説教し、祝節中の木曜の夜、或る二階座敷にて弟子と共に晚餐を食し、己が最後のいよいよ迫れるを告げ、懇ろに彼等を教へ、月明に乗じて都の北門を出て、橄欖山に上り、ゲトセマネと稱する小園にて休み且つ祈れる中、十二使徒の一人にして耶蘇の事業に失望せしユダなる者、之より先敵に内通し、祭司長等の遣はせる兵卒を率ひて來り、此にて其の師を交しぬ。弟子等は驚き惑ひ、牧者を打たれたる綿羊の群の如く散り失せたり。耶蘇は其より祭司長の邸に引かれて宗教的裁判を受け、死罪を宣告せられしが、死罪の執行の權は祭司等の手になきものから、羅馬の方伯にして祝節中エルサレムに滞在監督せるポンテオ、ピラトの廷に引き行き、極力耶蘇の罪を主張し、之を死刑に處せんことを求めしも、ピラトは羅馬の法律に照らして耶蘇を罰すべき所を見ず、或は之を免さんと勉め、或は責任をガリラヤの分封王ヘロデ、アンテバスに譲らんとせしかども果さず。敵は祭のため

に都に雲集せる愚民を煽動し、ピラトの法廷にて耶蘇を十字架につけよ十字架

につけよと狂叫せしめしかば、ピラトは人民の心を失ひ、擾亂の起りて、自ら羅馬に信を失はんことを恐れ、終に耶蘇を暴徒の手に付して其の爲すかまゝに委せたり。暴徒等は耶蘇を引きて之を城外ゴルゴタと稱する所に導き、其所にて盜賊二人と共に之を當時の最慘最賤の刑、十字架に釘つけとなし、之に猶太人の王耶蘇といふ罪状書を附けて、萬人の侮辱嘲笑の的となしぬ。されど時は趨過の節に屬し、明る土曜日最大の安息日とせられ居たりしかば、罪人を長く刑臺上に露らすことを厭ひ、其の日の夕方、之を取り下し、其の活き返らぬため、兵卒等は二人の盜賊の足を折り、耶蘇は全く息絶え居たるものから、鎗にて脅を到したる上、之を野に棄てんとしたり。然るに衆議所の議員にして、曾て窃に耶蘇に教を聴き、之に心服し居たるアリマタヤのヨセフと云ふ人、之を有るまじき事に思ひて、ピラトに至りて耶蘇の屍を乞ひ受け、一二の人の助をも得つ、之を刑場に近き所に在る自己所有の新岩墓に葬りたり。花の如く猶太人民の間に現はれたる一の青年宗教者は、斯くて獸よりも陋劣なる者どもの蹂躪する所となり。又幾千萬年の古人來者と異なることなくヨセフの所有墓地の

石穴の中に埋められたるなり。

耶蘇傳首尾の記事

耶蘇基督が人を神の子とせんために此世にて盡せし事業は、十字架の死に於て完成し、十字架の死に於て終了せり。耶蘇傳は此にて終るも基督を知り、其の救を知るに於て殆ど缺如する所なしとす。然れども福音書は何れも十字架の死を以て耶蘇の終末とせざるなり。其等は一様に記して曰く、耶蘇葬られて第三日、即ち日曜日の朝、弟子等墓に至りしに墓穴の口を塞ぎありし大石は轉はし去られ、穴中は空にして耶蘇の屍を見ず、皆な怪しみ恐れしに、耶蘇は其の日の中、所々にて弟子等に現はれ、其の復活せることを告げ、其より四十日間暫々現はれて、彼等を教へ獎まし、終に彼等を祝福し又全世界に教を傳ふべきを命じて彼等の見る前にて天に昇り輝ける雲の中に入り了れりと。此れ明に基督教の初代より確なる事實として信ぜられしことなり。紀元五十八年前後に成れるパウロの書翰も明白に當時この信仰の基督信徒間に存在して而も重大なる地位を有し居りしを示せり。耶蘇は死の中に止まるべきに非ず、三日目に復活

せりと信ぜられ、然かく傳せられたるなり。

耶蘇復活の信仰が基督教の重大なる要素として初代の教會に存在すると共に、人を救へる基督、此の復活せし基督、神の子たる主基督は、根本的に常人と異りたる素質を有したりとの信仰は、自然之に伴ひ、基督の誕生の時にも様々な天よりの徴候現はれたりてふ信仰及び傳説、また初代より基督信徒の間に行はれたり。聖書の基督傳には彼等は何れも耶蘇が古の賢王、猶太王系の唯一正統源泉たるべきダビデの血液を承けたることを記し、其の母は處女なりしが、聖靈に由て懐胎せりと記し、馬太傳には誕生の時、王星天に現はれ、東國の占星學者等は之を見て遙々尋ね來り、赤子を拜して贈物を献げ、猶太王ヘロデは之を聞きて恐れ、赤子を求めて殺さんとせしかば、父母は暫く携へて埃及に免れ、ヘロデの死せし後歸り來れりと記し、路加傳は一層美はしく希臘的思想を以て、耶蘇誕生の時、夜間野にて羊群を守りし牧者等、天軍の歡喜して救主の生れしを告ぐるに會ひ、行きて赤子を拜せりと記し、母の懐胎の時にはガブリエルといふ名を有する天使現はれて、之を告げ之を祝せりと記し、尙施洗者ヨ

ハネの母と耶蘇の母とは従姉妹の間柄なるを記せり。誕生前後に關する此等記事の内、羅馬の戸籍調査の行はれし頃、ベツレヘムの旅舎にて生れたりといふことは確なるが如く、又天文学上の計算によりて、羅馬の建國七百四十七年に於て、五月と十月と十一月とに、金星と土星と相重なり、天に異様の光景を呈したることありしも事實とせらる。而して耶蘇の誕生は羅馬の七百四十八年乃至五十年なりしとせらるゝなり。然れども耶蘇誕生前後の記事が何所まで有のまゝなりしか、何所より附加せられしものなるか。其を定めんことは到底今日に於て爲し得べきことに非ず。耶蘇の如き特異なる人物に關しては、其の史實の周圍に、直ちに多くの傳説附隨し易きものなり。基督がいよく公人の生活に入り衆目の前に活動し始めし後の事は、もはや多くの人の實見せし所にかゝれば、之に關する福音書の記事は、福音書の出所と年代の確なる以上、之を史實として信ずべしと雖も、其の尙隠れたる時代、誕生前後の事に至ては、随分種々なる傳説の加はり得べき餘地ありとなす。著者決して世を欺かん意志ありしとは覺えず。彼等も眞面目に信じて記せしに相違なし。初代の信徒は之を確

信せしに相違なし。然れども誕生前後の事は多くの人の經驗せし所に非ず、是等の事もし或る確なる源より出てしとせば、其は耶蘇の母マリアの口より出てしものならん。或はマリアも語らざりしに、耶蘇の昇天後、耶蘇を信ずることの篤き徒の間に、誰いふとなく起りて傳はりたる物語りなるやも知るべからず。特に懐胎の時の天使の出現の如きは、之を確なる源より出てしとしても、純粹にマリアの經驗に存せしのみならず。若しマリア耶蘇の昇天後之を語りしとせば思ふに彼は其の親しく生みし子が神に事へ人を愛し、其の偉大至深の人格の力を以て人々の靈を救ひ、マリア自身も之を信じて神との關係整ひ、新しき生命に入りたるを經驗し、耶蘇は實に神の子なりと信じ、此の心を以て過去を回想し、耶蘇を胎みしは眞に人によりしに非ず、聖靈によりしなりと信じ、之を同志の人々に語りたるものならん。若又マリアに耶蘇を産む前より神の子を産む信仰ありしとせば、彼は時代の精神に感染し、人民の要求に全く同情し、婦人として子を生まば應に救主を産むべしと熱望し、其の胎みし時こは神の靈に由りて胎みしなりと信じたるものなるべく、其等の信仰が發して後年に人に

傳はり誕生に關する信仰となりしものならん。否それよりも專ら此等の點に關しては近世に入りて早くより現はれ居りし局部的神話説を容れ、信徒等が初代より耶蘇の超人間的人格を信ずるの餘り、耶蘇の誕生前後を既に不可思議なる信仰を以て圍みしとする方、最も満足なる説明に非ざるかと思ふ。耶蘇が處女より生れたりと云ふ如き信仰は、此れ人間の宗教的要求の凝結して、其の斯くありたし又斯くありしならんと思ひし所、終に斯くありたりといふ信仰となりたるものならん。處女より生れず、人間の父の子なりしとすれば、基督の神の子たる所以無くなるとする如きは、餘りに物質に拘泥したる思想なり。ヨセフの子に非ずとしても、マリアの子には相違なしとすれば、耶蘇の身體は如何にしても朽つべき運命を有する人の子に非ずや。苦し罪が人に遺傳すとせば、マリアが人たる限り又耶蘇にも其の遺傳ありしとせざるを得ず。此に於てかマリアをも人間以上のものとする天主教信仰さへ出てしなり。耶蘇を如何にしても處女より生れしとせざるを得ずとするも所謂頭隠して尻隠さぬ思想たるを免れず。耶蘇の神の子たるは其の身體にはあらず。身體は飽くまで人なり。

神の子たるは耶蘇の品格に於てなり。大工ヨセフの子たると否とは耶蘇の主たるに於て何等の影響を及ぼさざるなり。然れども凡ての不思議なる事が絶對的に有り得べからずとするは頗る偏狹なる意見なり。耶蘇は處女たる人より生れしやも知るべからず。或は天の使マリアに現はれしやも知るべからず。況や東國の學者の來りしこと、牧羊者の來り拜せしこと、埃及へ免れしこと等は、史實なりしやも知るべからず。然れども之を悉く信ぜずんば基督に付ての信仰完からずとなす如きは非なり。此等の事は有りしとしても無かりしとしても耶蘇の至高なる人格及び其宏大なる事業は一毫の價值を増減することなきなり。之に附けて考ふべきは耶蘇の曠野にて悪魔より誘惑せられしことなり。聖書に記されたる如き高き山、高き殿堂は其の附近には存せざりしなり。よしデビッド、スミスの如く、之を實際の山や高塔としても、此の誘惑は凡て耶蘇一人の經驗にかゝるものなり。思ふに耶蘇弟子を誘導し行く内、何時の機會にか此の至痛なりし經驗を語り、彼等の同情を求め、且つ彼等を警戒したることが初代の基督信徒の間に傳へられ、他の公衆の目睹せし耶蘇の行動と同等なる現